東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院入院棟 A 地点

報告編《第 5 分冊》

2 区の調査

2016

東京大学埋蔵文化財調査室

巻頭図版 1

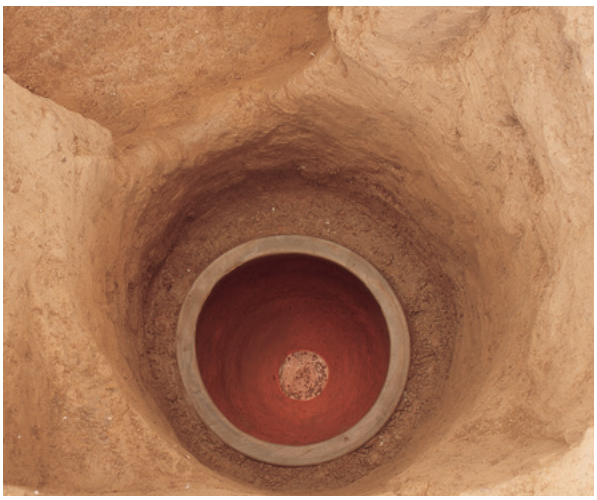
2区C面北側全景

2区墓域全景

ST3310 木棺墓人骨検出状況

巻頭図版２

ST3310−3 方形木棺墓人骨検出状況



ST3351 甕棺墓検出状況

ST3310−10 甕棺墓検出状況

ST2502（中）・2503（右） 火葬蔵骨器墓検出状況

SE1734 木枠検出状況

ST3310-10 甕棺

凡　例

1．遺構の実測図は原則として 1/50 で掲載している。それ以外は各図版に記した。

2．遺構番号は、原則調査順に通し番号を付した。ただし調査担当者が複数介在しているため、必ずしも遺構番号の大小が、遺構の新旧を表すものではない。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。

SA：塀跡　SB：建物跡　SD：溝　SE：井戸　SG：石積み　SK：土坑　SL：便槽　SP：小穴
ST：埋葬施設　SU：地下室　SX：性格不明遺構

3．グリッドは、調査区北西隅を基準点とし（A1）、南へアルファベット、東へ自然数（アラビア数字）を 5m 間隔で付した。よってグリッド名は 5m 四方枡の北西コーナーを交点とする英数字をあてている。A1 の座標値は世界測地系第Ⅸ系 X ＝－ 32013.1397m、Y ＝－ 6113.1242m で、真北より 0 度 23 分 32 秒西偏している。なお、上記の世界測地系の値は平成 23（2011）年東北地方太平洋沖地震による変動数値補正後の世界測地系（JGD2011）である。

4．遺構断面図などに記載された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、基標番号「郷（2）」本郷七丁目 3 東大赤門前（T.P.:23.4046m）から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお、「郷（2）」の T.P. は、平成 6 年 7 月東京都土木技術研究所刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。

5．遺物実測図は個別図に指示がない場合、基本的に以下の尺度で掲載している。

1/1：銭貨
1/2：金属製品
1/3：陶磁器、土器、人形・玩具、木製品、石製品、ガラス製品、動物製品、繊維製品
1/4：瓦

6．実測図に付けられる記号及びトーンは以下のことを表している。

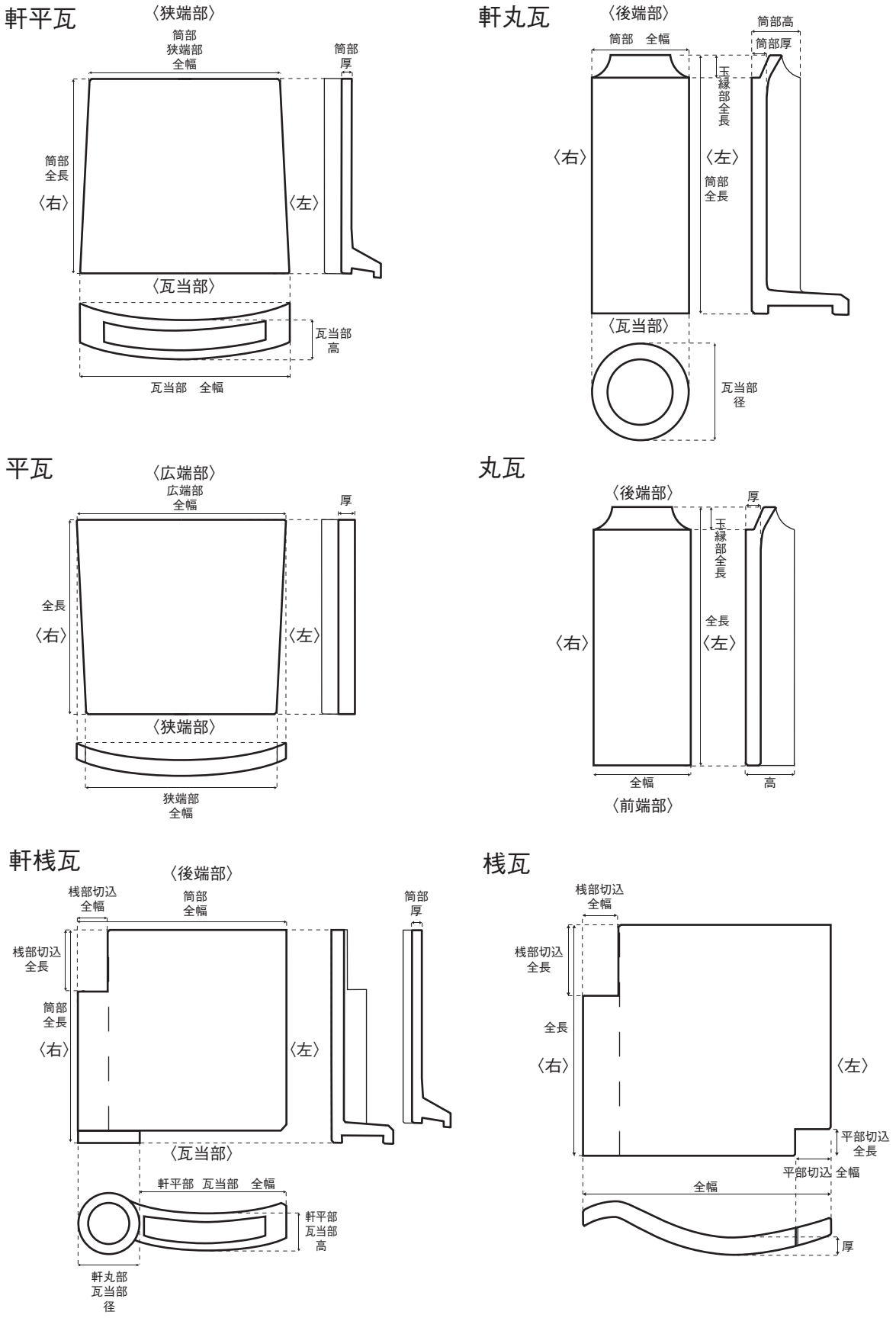
・▲は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。
・＼――／は、口唇部の口銹を表している。
・＼←→／は、人為的な磨耗痕、敲打痕を表している。
・↓――↓は、擂鉢体部擂目の範囲を表している。
・中心線上下端の破線は、各々推定口径、推定底径を表している。
・スクリーントーンは、▒ が青磁の、▒ が施釉土器の施釉範囲を表している。

7．本文中に記載した陶磁器・土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報 2　別冊東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』に一部変更点を加えた新分類に拠った。変更の詳細は、第 3 分冊巻末に提示した。また人形・玩具の分類は「東京大学構内遺跡出土の人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報 7』に拠った。

８．遺物番号は本文、挿図、観察表、DVD－ROM の写真で共通の番号を使用した。

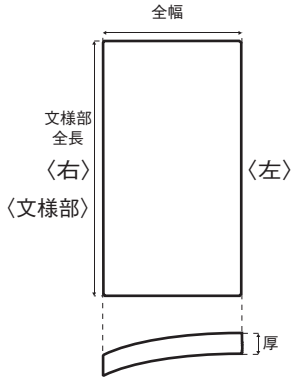
９．遺物観察表は、全て第１分冊添付の DVD－ROM に Excel ファイルにて記録している。

10. 遺物写真は、掲載遺物各個について写真撮影を行い、これを 1280 × 850 ピクセルで jpeg に圧縮し、第１分冊添付の DVD－ROM に記録している。

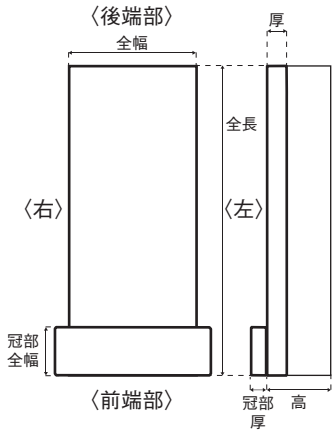


瓦凡例(1)　軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、軒桟瓦、桟瓦

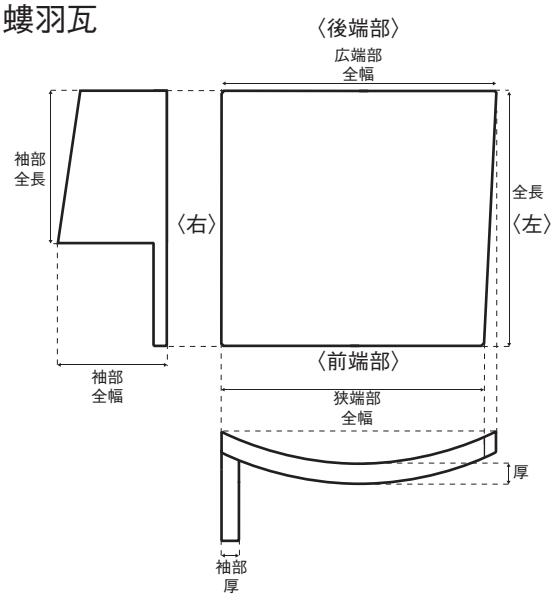
熨斗瓦



冠瓦



螻羽瓦



瓦凡例(2)　熨斗瓦、冠瓦、螻羽(けらば)瓦

コード表記

○○_○○○○_○○○

- 技法コード
- 器種コード
- 産地コード
- 胎質コード

器種コード

○○○○

- 連番
- 1：ひと形
  2：動物形
  3：1・2以外
- 1：人形
  2：器物
  3：建造物
  4：遊具
  9：不明
  0：その他

胎質コード

J：磁器（磁質）
T：陶器（陶質）
D：土器（土師質）
R：瓦　（瓦質）

産地コード

A：輸入陶磁
B：肥前系
C：瀬戸･美濃系
D：京都･信楽系
E：備前系
Q：江戸在地系
Z：不明

技法コード

○○○

- f：中実
  o：底部開口
  e：中空
- 1：1枚型
  2：複数枚型
- H：手びねり
  M：型作り
  W：ろくろ
  B：板作り
  A：加撃

器種コード(詳細)

1000	人形								
1100	ひと形								
1101	天神	1102	恵比寿	1103	大黒	1104	福禄寿・寿老人	1105	布袋
1106	不動明王	1107	地蔵菩薩	1108	猩々	1109	西行	1110	裃人形
1111	力士	1112	朝鮮通信使	1113	蹴鞠人形	1114	坊主人形	1115	虚無僧
1116	猟師	1117	猿曳き	1118	福助	1119	笛吹き	1120	若衆
1121	姉様	1122	太夫（花魁）	1123	お多福	1124	三味線弾き	1125	裸婦
1126	おぼこ・禿	1127	唐子	1128	ぶら人形	1129	這子	1130	狆抱き童子
1131	亀乗り童子	1132	狆乗り童子	1133	面持ち童子	1134	金太郎	1135	桃持ち童子
1136	獅子舞	1137	鯛抱き童子						
1200	動物形								
1201	狛犬	1202	獅子	1203	猿	1204	犬	1205	馬
1206	狐	1207	牛	1208	猫	1209	兎	1210	鼠
1211	狸	1212	虎	1213	象	1214	鳩	1215	鶏
1216	鴛鴦	1217	木菟	1218	亀	1219	蛙	1220	鯉
1221	鯛・鯛車	1222	金魚	1223	蝉				
1300	その他（1100･1200以外）								
1301	達磨	1302	首人形	1303	獅子頭	1304	面	1305	陽物
2000	器物								
2001	碗	2002	皿	2003	鉢	2004	銚子	2005	瓶
2006	壺	2007	片口鉢	2008	急須	2009	土瓶	2010	鍋
2011	釜･茶釜	2012	擂鉢	2013	蓋	2014	七厘・焜炉	2015	石臼
2016	竈	2017	器台	2018	硯	2019	水滴	2020	銭貨
2021	五鈷鈴	2022	柚でんぼ	2023	香炉・風炉				
3000	建造物								
3001	祠	3002	塔	3003	城郭	3004	橋	3005	塀・袖垣・石段
3006	民家・庵	3007	灯籠	3008	鳥居	3009	御輿	3010	舟
3011	庭園・背景	3012	仕切り盤						
4000	遊具								
4001	土鈴	4002	独楽	4003	笛	4004	碁石状製品	4005	面模
4006	泥面子・芥子面	4007	土玉	4008	円盤状製品	4009	車輪状製品		
9000	不明								
0000	その他								

人形・玩具分類コード

○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

○生産地

A－輸入陶磁器

A1　景徳鎮窯系
A2　漳州窯系
A3　徳化窯系
A4　龍泉窯系
A5　宜興窯系
A6　朝鮮
A7　ベトナム
A8　ヨーロッパ
A9　福建・広東系
A10 西アジア

B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－万古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－薩摩系
R－三田系
S－飯能系
Z－不明

○器種

1. 碗	2. 皿・平鉢	3. 大皿・大皿鉢	4. 燗徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉・火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺・甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 溲瓶	29. 擂鉢	30. 餌入れ
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	
63. あんか	64. 煙硝擂鉢	65. 乳棒	66. 硯屏	67. 釜

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類

医学部附属病院入院棟Ａ地点
報告編《第５分冊》
２区の調査

目　　次

口　　絵
凡　　例
目　　次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
遺構一覧表

第Ⅱ章　２区の遺構 ……10
　第１節　Ｃ面の遺構……10
　第２節　Ｂ面の遺構……13
　第３節　Ａ面の遺構 ……19

第Ⅲ章　２区の遺物 ……41
　第１節　埋葬施設出土遺物 ……41
　第２節　遺構出土磁器・陶器・土器 ……46
　第３節　包含層（Ｃ層）出土磁器・陶器・土器 ……52
　第４節　瓦 ……53
　第５節　金属製品 ……53
　第６節　銭貨 ……53
　第７節　石製品・石造物 ……54

第Ⅳ章　まとめ ……88

第Ⅰ章　調査の概要

(1) 調査の位置と概要

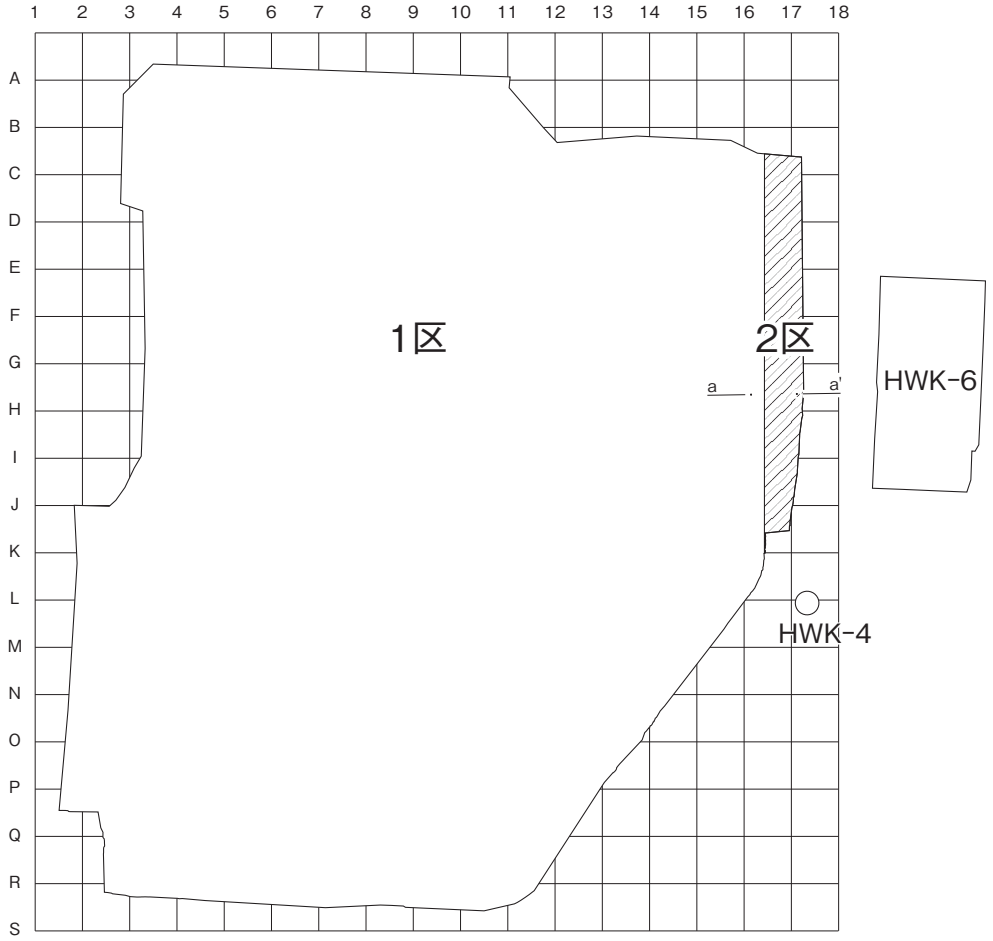
2区は調査区の東側に位置し、東西約5m、南北約40mの帯状を呈し、面積は約200㎡である（Ⅰ－1図）。西側は無縁坂から富山藩表門へ伸びる道で大聖寺藩表門が道の西側に位置する。調査地点は道より一段低く段切りされている。遺構は地境に関連する遺構、小穴、土坑、地下室、井戸、厩関連遺構、基礎、墓壙等を検出している。生活面はC面、B面、A面の3枚が確認されている。C面は地下室、厩関連遺構を検出。B面、A面は墓壙を検出している。墓壙は絵図、地図から、現在も無縁坂にある講安寺に関連する遺構で墓壙には円形木棺墓、方形木棺墓、蔵骨器墓、甕棺墓がある。

(2) 調査の方法

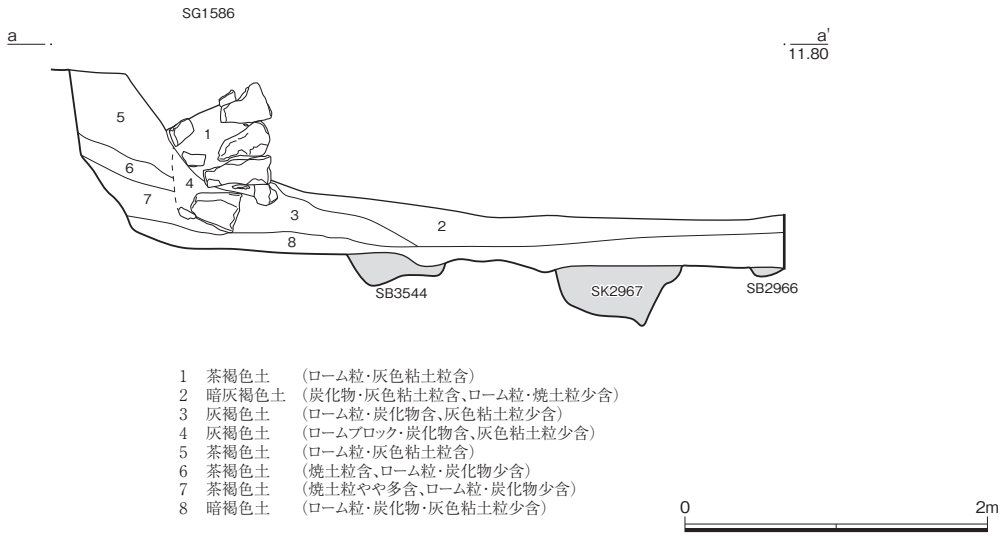
調査地点のグリッド設定は1区のグリッドを用い5×5mでグリッドを設定した。調査区はB～J－16・17グリッド内に位置する。調査は表土を除去した後、A～C面のそれぞれの生活面を上層から調査した。

(3) 基本層序

2区の基本層序はA～C面の3面を確認した。C面の遺構、例えば厩の便槽SL3313は桶が設置されていたが、検出した便槽は明らかに浅く、上面を削平されたと考えられる。他の遺構の中にも上部を削平されたと考えられる遺構があり、C面の削平は調査区全面で行われたと考えられる。削平は地山まで達しており、C面以下の遺構は確認できなかった。墓域を検出したB面は5～8層を盛土している。A面はB面に2層を盛土している。B面の墓を改葬し盛土したと考えられる。井戸は「諸宗作事帳」所収講安寺境内図、「講安寺境内図」（講安寺蔵史料）に描かれていることから江戸時代以降も使用されたと考えられる。

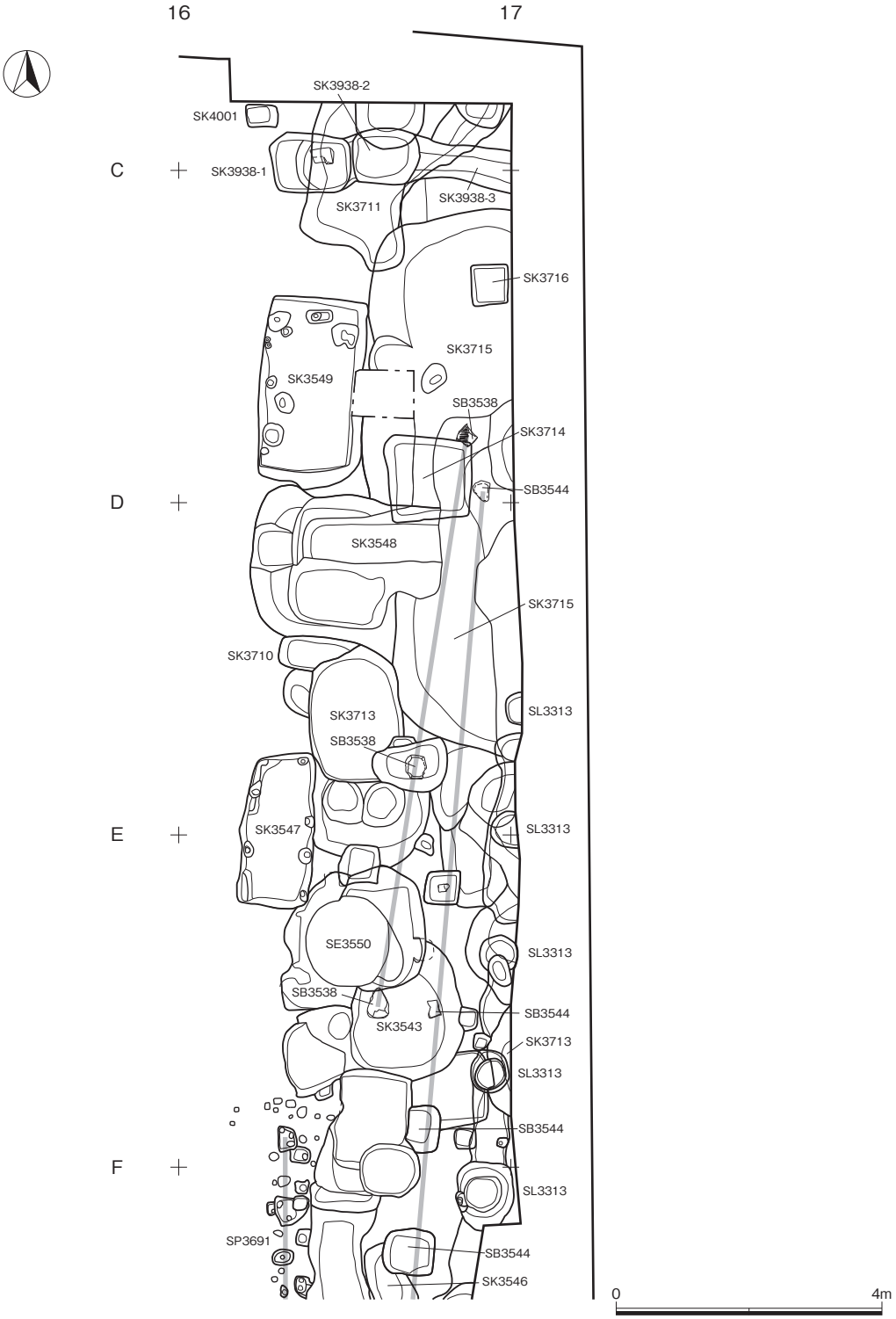


Ⅰ-1図　調査区グリッド・基本層序ポイント(S=1：800)

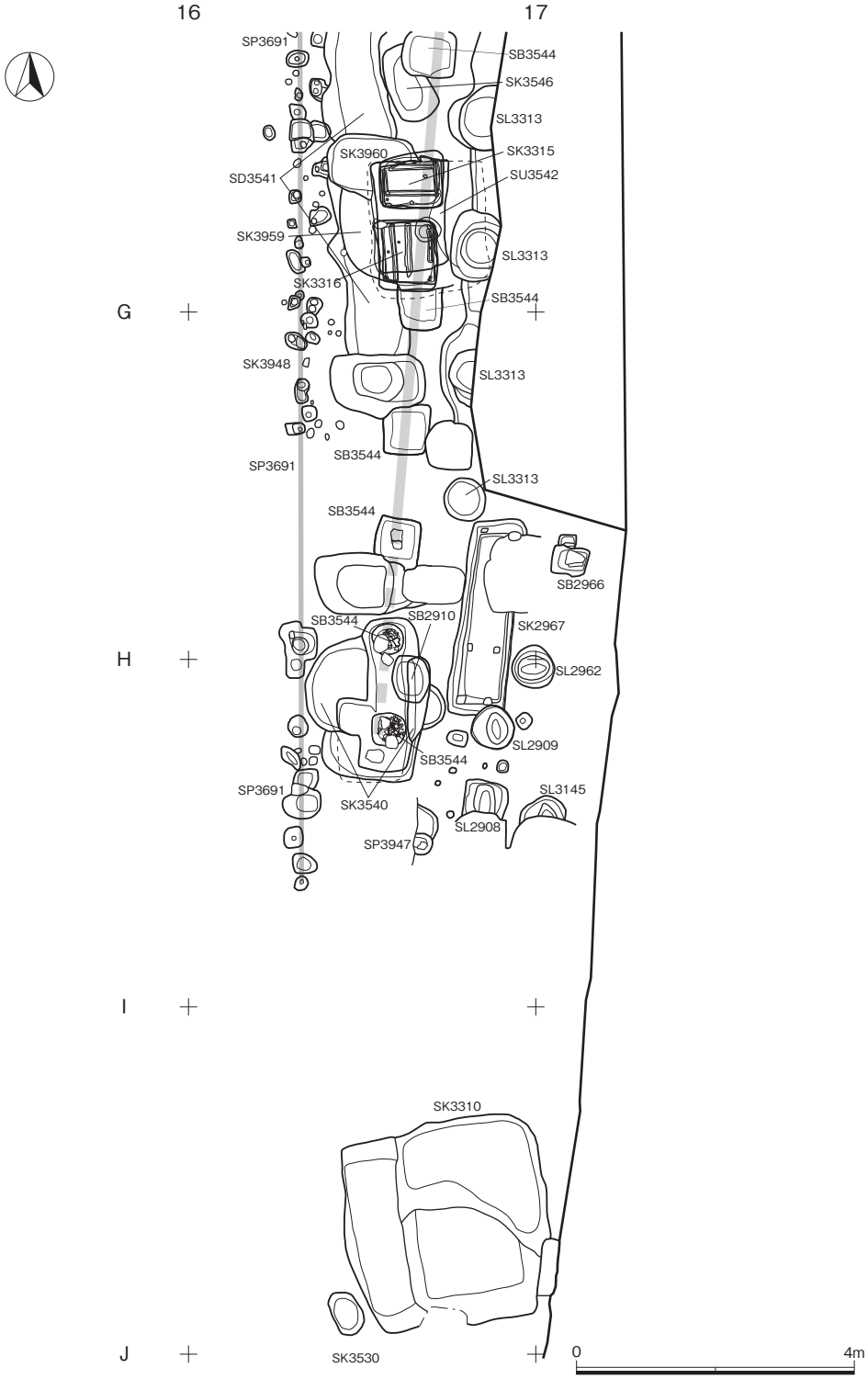


1　茶褐色土　(ローム粒･灰色粘土粒含)
2　暗灰褐色土　(炭化物･灰色粘土粒含､ローム粒･焼土粒少含)
3　灰褐色土　(ローム粒･炭化物含､灰色粘土粒少含)
4　灰褐色土　(ロームブロック･炭化物含､灰色粘土粒少含)
5　茶褐色土　(ローム粒･灰色粘土粒含)
6　茶褐色土　(焼土粒含､ローム粒･炭化物少含)
7　茶褐色土　(焼土粒やや多含､ローム粒･炭化物少含)
8　暗褐色土　(ローム粒･炭化物･灰色粘土粒少含)

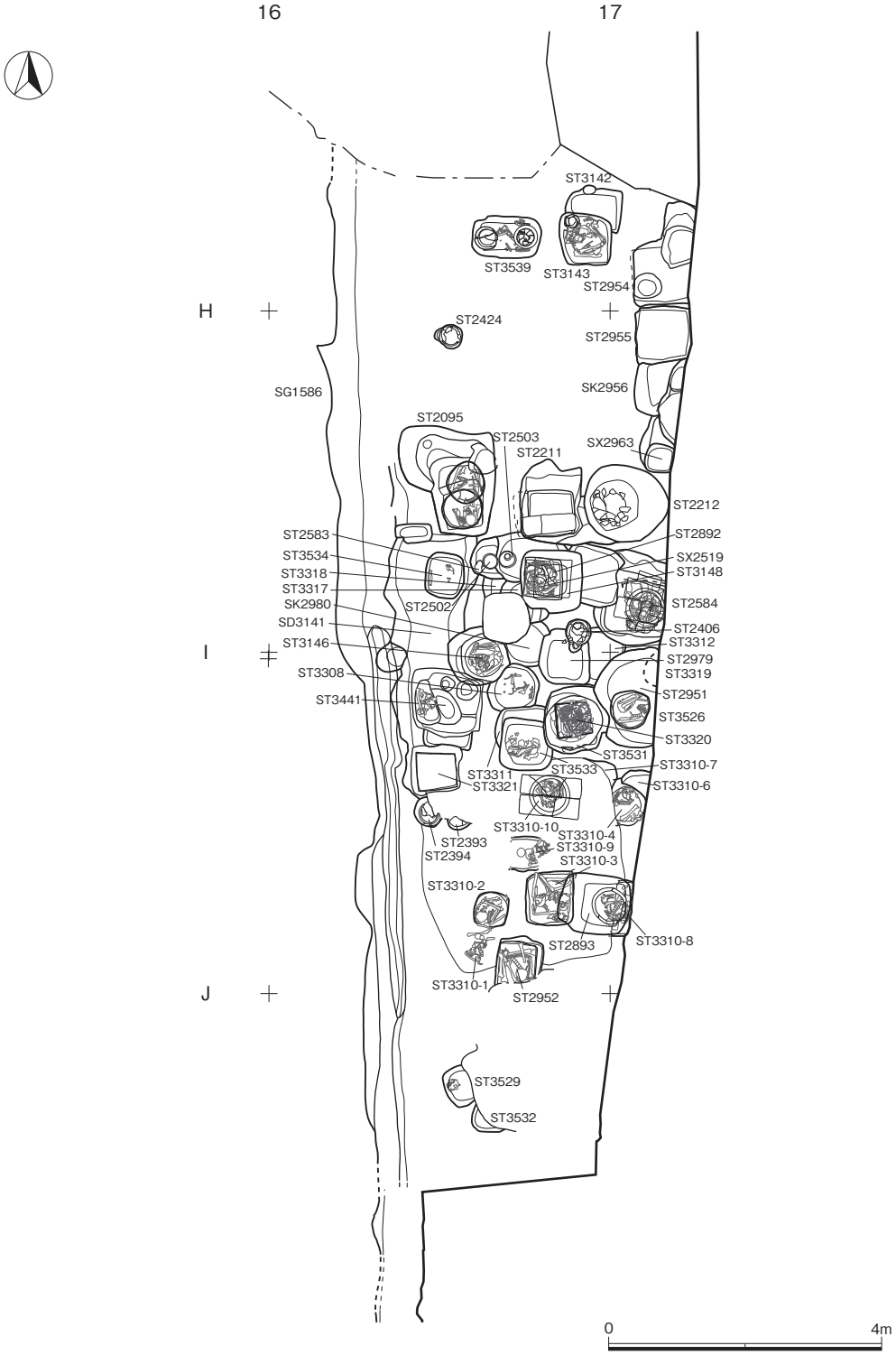
Ⅰ-2図　2区基本層序



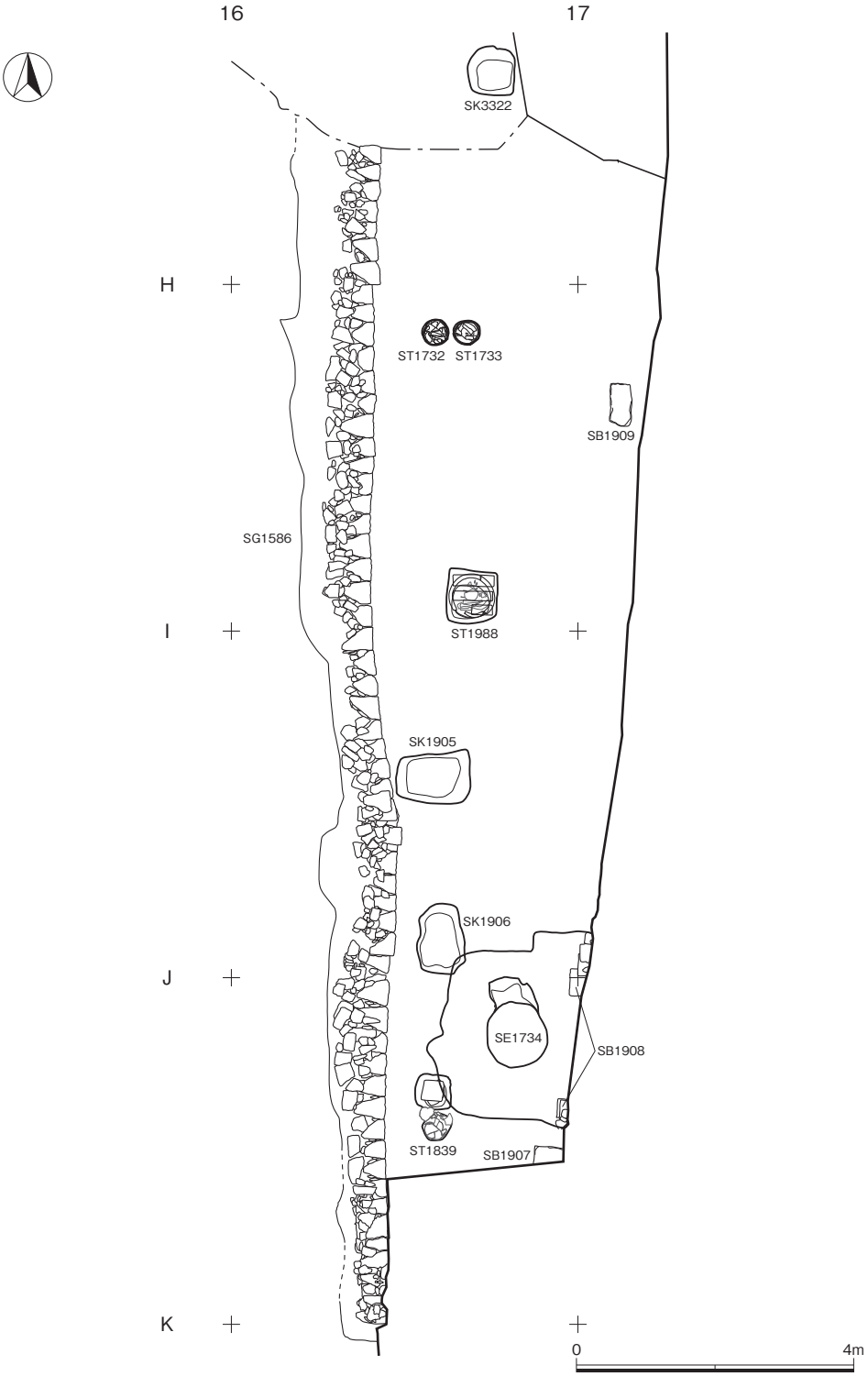
Ⅰ-3 図　C 面北側遺構配置図



Ⅰ-4 図　C 面南側遺構配置図


16
17
H
I
J
ST3142
ST3539
ST3143
ST2954
ST2424
ST2955
SG1586
SK2956
ST2095
ST2503
ST2211
SX2963
ST2212
ST2583
ST2892
ST3534
SX2519
ST3318
ST3148
ST3317
ST2584
SK2980
ST2502
SD3141
ST2406
ST3146
ST3312
ST2979
ST3308
ST3319
ST3441
ST2951
ST3526
ST3320
ST3531
ST3533
ST3310-7
ST3311
ST3321
ST3310-6
ST3310-10
ST3310-4
ST2393
ST3310-9
ST2394
ST3310-3
ST3310-2
ST2893
ST3310-8
ST3310-1
ST2952
ST3529
ST3532
0
4m

Ⅰ-5 図　B 面遺構配置図


16
17
SK3322
H
ST1732
ST1733
SB1909
SG1586
I
ST1988
SK1905
SK1906
J
SE1734
SB1908
ST1839
SB1907
K
0
4m

Ⅰ-6図　A面遺構配置図

遺構一覧表

遺構		確認面	グリッド	遺構図版		遺　物　図　版　(Ⅲ-@)							
種別	No.			PDF 全体図 @	Ⅱ-@	陶磁器・土器	瓦	木	金属	銭	石	ｶﾞﾗｽ	動物
ST	1732	A面	H16	9	47	1							
ST	1733	A面	H16	9	47	1							
SE	1734	A面	I16・I17・J16・J17	9	51	13					31		
ST	1839	A面	J16	9	48								
SK	1905	A面	I16	9	50	13					32		
SB	1906	A面	I16	9	51								
SB	1907	A面	J16	9									
SB	1908	A面	I16・I17・J16・J17	9	51								
SB	1909	A面	H17	9									
ST	1988	A面	H16	9	49	2			2				
ST	2095	B面	H16	9	19								
ST	2211	B面	H16	9	20	1							
ST	2212	B面	H16・H17	9	20	3							
ST	2393	B面	I16	9	21								
ST	2394	B面	I16	9	21	2							
ST	2406	B面	H16・I16	9	22	4							
ST	2424	B面	H16	9	23	4							
ST	2502	B面	H16	9	24	5							
ST	2503	B面	H16	9	24	5							
SX	2519	B面	H16	9	24	14							
ST	2583	B面	H16	9	24	5							
ST	2584	B面	H16・H17	9	25	6、7							
ST	2892	B面	H16	9	26				7	7			
ST	2893	B面	I16・I17	9	27	8							
SL	2908	C面	H16	9	15								
SL	2909	C面	H16	9	16								
SB	2910	C面	G16・H16	9									
ST	2951	B面	H17・I16・I17	9	28	7			7				
ST	2952	B面	I16	9	29	7							
ST	2954	B面	G17	9	30								
ST	2955	B面	G17・H17	9	30								
SK	2956	B面	H17	9									
SL	2962	C面	G16・G17・H16・H17	9	17								
SX	2963	B面	H17	9									
SB	2966	C面	G17	9	5								
SK	2967	C面	G16・H16	9	7								
ST	2979	B面	H16・I16	9	31								
SK	2980	B面	H16・I16	9	31								
SD	3141	B面	H16・I16	9									
ST	3142	B面	G16・G17	9	32								
ST	3143	B面	G16・G17	9	32	8			8				
SL	3145	C面	H16・H17	9	13	14			26				

遺構		確認面	グリッド	遺構図版		遺　物　図　版　(Ⅲ-@)							
種別	No.			PDF 全体図 @	Ⅱ-@	陶磁器・土器	瓦	木	金属	銭	石	ｶﾞﾗｽ	動物
ST	3146	B面	H16・I16	9	33				9				
ST	3148	B面	H16	9	26								
ST	3308	B面	I16	9	34								
SK	3310	C面	I16・I17	9	8	15～18				27			
ST	3310	B面	I16・I17	9	35、36	9				9			
ST	3311	B面	I16	9	34								
ST	3312	B面	H16・H17・I16・I17	9	31								
SL	3313	C面	D16・D17・E16・E17・F16・F17・G16	9	5				26				
SK	3315	C面	F16	9	9				26				
SK	3316	C面	F16	9	9	19			26				
ST	3317	B面	H16	9	24								
ST	3318	B面	H16	9	24								
ST	3319	B面	I17	9	28								
ST	3320	B面	I16	9	37	10							
ST	3321	B面	I16	9	38	10							
SK	3322	A面	G16	9									
ST	3441	B面	I16	9	39	10							
ST	3526	B面	I17	9	40				10				
ST	3529	B面	J16	9	41								
SK	3530	C面	I16	9									
ST	3531	B面	I16	9	42	11							
ST	3532	B面	J16	9	43								
ST	3533	B面	I16	9	44								
ST	3534	B面	H16	9	45								
SB	3538	C面	C16・D16・E16	9	5								
ST	3539	B面	G16	9	46	12							
SK	3540	C面	G16・H16	9	10								
SD	3541	C面	F16・G16	9									
SU	3542	C面	F16	9	18								
SK	3543	C面	E16	9	11								
SB	3544	C面	C16・E16・F16	9	5					27～30			
SK	3546	C面	F16	9									
SK	3547	C面	D16・E16	9	12								
SK	3548	C面	C16・D16	9									
SK	3549	C面	C16	9	13		25						
SE	3550	C面	E16	9	6								
SP	3691	C面	E16・F16・G16・H16	9		1、2							
SK	3710	C面	D16	9									
SK	3711	C面	B16・C16	9			25						
SK	3713	C面	E16	9									
SK	3714	C面	C16・D16	9									

遺構		確認面	グリッド	遺構図版		遺　物　図　版　(Ⅲ-@)							
種別	No.			PDF 全体図 @	Ⅱ-@	陶磁器・土器	瓦	木	金属	銭	石	ｶﾞﾗｽ	動物
SK	3715	C面	C16・D16・D17	9	14	19～23					31		
SK	3716	C面	C16	9									
SK	3938	C面	B16・C16	9									
SP	3947	C面	H16	9									
SK	3948	C面	G16	9									
SK	3959	C面	F16	9									
SK	3960	C面	F16	9									
SK	4001	C面	B16	9									

第Ⅱ章　２区の遺構

第１節　Ｃ面の遺構

SB2966（Ⅱ－５図）

柱穴で、G17 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東西 50cm、南北 40cm、深さ 60cm を測る。坑底で石材を検出している。

SB3538（Ⅱ－５図）

礎石で、C ～ E16 グリッドに位置する。3 基の礎石が南北に並ぶ。礎石はローム層に半分程度埋められている。南側の礎石と中央の礎石の間隔は約 360cm、中央の礎石と北側の礎石の間隔は約 500cm を測る。遺構の軸は真北から 8° 東へ振れる。

SB3544（Ⅱ－５図）

厩の柱穴で、C ～ H16 グリッドに位置する。上層の遺構の削平等により柱穴のない部分もあるが、残存した柱穴の間隔は 180cm を測る。遺構の軸は真北から東へ 3° 振れる。SB3544－1 ～ 10 と対になる柱穴は調査区外で各部屋の奥行きは不明だが、これまでの調査事例から各部屋は方形と推定される。関連する便槽 SL3313－1 ～ 6、8、10、11 は想定区画内西寄りに配置されていることから間口は東側と考えられる。9 基の便槽を確認したことから厩は少なくとも 9 疋立あったと考えられる。SB3544－1 は上部が SK3540 によって削平されている。平面形は長方形、東西 50cm、南北 45cm、深さ 15cm を測る。坑底から銭貨、鉄製品が出土。SB3544－2 も上部が SK3540 によって削平されている。坑底から鉄製品が出土。平面形は円形、東西 45cm、南北 45cm、深さ 75cm を測る。SB3544－1、2 は SB3544－3 より北側の柱穴に対し深く東側で便槽を検出していない。SB3544－3 ～ 7、9 は平面形正方形を呈し、東西 50 ～ 75cm、南北 55 ～ 70cm を測る。SB3544－8、10 では掘方痕跡は確認されなかった。また SB3544－3、8 ～ 10 で礎石もしくは根石を検出した。

SL3313（Ⅱ－５図）

C 面に帰属する厩の便槽で、D ～ G・16 ～ 17 グリッドに位置する。9 基の遺構が並ぶ。遺構の軸は真北から 3° 東へ振れる。SL3313－1 の東側は調査区外に拡がる。平面形は円形、直径は 60cm、深さ 40cm を測る。SL3313－2 の東側は調査区外に拡がる。平面形は円形、直径は 60cm、深さ 33cm を測る。6、7 層に炭化物、焼土を含む。SL3313－3 の東側は調査区外に拡がる。平面形は円形、直径は 95cm、深さ 30m を測る。8 層は焼土を多く含む。SL3313－4 は上部が削平されている。平面形は円形で、上部の削平された部分の直径は 100cm。中央部分の平面形は円形で直径は 50cm、深さ 28cm を測る。9、10 層は焼土を含む。SL3313－5 は上部が削平されている。平面形は円形で、上部の削平された部分の直径は 65cm、中央部分の直径は 65cm、深さ 20cm を測る。11 層と 13 層に灰色粘土を含む。SL3313－6 の平面形は円形、直径 55cm、深さ 18cm を測る。SL3313－8 の東側は調査区外に拡がる。平面形は円形、直径は 55cm、深さ 10cm を測る。SL3313－10 の平面形は円形、直径

50cm、深さ35cmを測る。17層は灰色粘土を多く含む。

SE3550（Ⅱ－6図）

井戸で、D16グリッドに位置する。上部東側は長方形の土坑によって削平されており覆土の1～5層が該当する。壁面西側は崩落している。井戸の平面形は土坑による削平と崩落によって不整形を呈し、東西216cm、南北200cmを測る。井戸部分の平面形は円形を呈する。直径は126cmを測る。204cmまで調査した。

SK2967（Ⅱ－7図）

土坑で、G～H16グリッドに位置する。遺構の軸は真北から6°東へ振れる。B面のST2909、ST3142、ST3143に切られる。平面形は長方形、東西85cm、南北284cm、深さ58cmを測る。坑底から杭跡5基を確認しており、木枠があったと推定される。壁際には1段テラスが巡り、その内側の壁を板材で囲み、杭で固定、外側の11層にローム土を充填し板材を固定したと考えられる。内側の7層は焼土を多く含む。8層は炭化物を多く含む。

SK3310（Ⅱ－8図）

I16～17グリッドに位置する土坑で、平面形は不整方形を呈し、主軸方位は真北から8°西へ振れる。C面検出遺構集中分布区域から約5m南へ離れ、ほぼ単独で位置している。規模は東西295cm、南北296cm、確認面からの最大深度183cmを測る。北東部の台形状の坑底が最も低く、西壁際の台形状の坑底が最も高く位置し、3段の比高差を有する。また北東側坑底の立ち上がりが南東側坑底上覆土を切り込んでいることなど遺構形態、覆土の堆積状況から少なくとも3基の遺構が重複している様相が窺われる。いずれも壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底、壁面共に工具痕が認められる点で共通する。

覆土中からは、東大編年Ⅴ期に比定される陶磁器類が多量に出土している。年代的様相から富山藩借地段階の廃棄資料と考えられる。

なお本遺構覆土内から約10基を数える墓壙が検出された。本来ならば上位面（B面）に帰属する墓壙群であるが、本遺構確認精査時に検出されたことから墓壙群との関連性を予想して調査を進めたため同一番号とし墓壙には枝番を付した。調査の進捗に合わせて別遺構であることが確認されたが、すでに同一名称で遺物を取り上げており、その後の混乱を防ぐために冠詞のみ識別し、番号には変更を加えなかった。

SK3315（Ⅱ－9図）

土坑で、F16グリッドに位置する。SK3316と南北に並ぶ。木枠、杭を伴う内枠と外側の掘方からなる。掘方の平面形は長方形、東西93cm、南北78cm、深さ18cmを測る。内枠の平面形は長方形、東西88cm、南北60cm、深さ15cmを測る。掘方直上には幅8センチほどの角材を設置したと考えられる3条の溝があり、その上に板材を配置している。板材とともに釘が出土しており、板材の固定に使用したものと考えられる。杭穴を5基検出している。南壁の杭穴2基は壁の板材を固定したものか。板材をどのように固定したかは不明。覆土はSK3316と同じで、内側（1層）は灰色粘土。掘方（2層）はローム粒を主体とする。

SK3316（Ⅱ－9図）

土坑で、F16グリッドに位置する。SK3315と南北に並ぶ。木枠、杭を伴う内枠と外側の掘方からなる。掘方の平面形は長方形、東西84cm、南北100cm、深さ22cmを測る。内枠の平面形は長方形、東西76cm、南北87cm深さ18cmを測る。坑底直上には幅約7cmの木材痕が長方形状に認められ、その上に板材を配置している。杭穴を7基検出している。杭穴1基を除き、杭穴は壁に沿って配置されていることから壁面の板材を固定したものと考えられる。覆土はSK3315と同じで、内側（1層）は灰色粘土。掘方（2層）はローム粒を主体とする。

SK3540（Ⅱ－10図）

土坑で、G～H16グリッドに位置する。南側に地下室と考えられる遺構が重複する。SB3554－1、SB3554－2に切られる。坑底の凹みは両遺構による削平。平面形は長方形で東側に半円形の張り出しがある。東西180cm、南北140cmを測る。

SK3543（Ⅱ－11図）

土坑で、E16～17グリッドに位置する。SB3544－7、SE3550、SL3313－5に切られる。覆土と検出状況から少なくとも6基の土坑が切り合っている。規模は東西310cm、南北409cm、深さ124cmを測る。

SK3547（Ⅱ－12図）

D～E16グリッドに位置する土坑で、SK3549と南北に並ぶ。遺構の軸は真北から6°東へ振れる。平面形は長方形を呈する。東西118cm、南北235cm、深さ105cmを測る。西壁に沿って検出された柱穴は遺構検出面から最大120cm掘削されており、坑底で礎石を確認した。柱穴は西壁で2基、東壁で4基検出している。柱穴は木枠に関連するものと考えられる。西壁北側と南側にテラス状の段差がある。a－a´ライン上で検出した杭痕（1層）5基は坑底まで達していない。この杭列は、E～H16グリッドに位置し南北に並ぶ小穴群（SP3691）の延長線上に位置することから、SP3691に関連する遺構と考えられる。

SK3549（Ⅱ－13図）

C16グリッドに位置する土坑で、SK3547と南北に並ぶ。遺構の軸は真北から6°東へ振れる。平面形は長方形を呈する。東西165cm、南北290cm、深さ153cmを測る。壁際には杭穴があり、東壁で1基、北壁で1基、西壁で8基を検出している。杭穴は木枠に関連するものと考えられる。南壁にはテラス状の段差がある。覆土中検出した杭痕（1層）は坑底まで達していない。この杭痕は、E～H16グリッドに位置し南北に並ぶ小穴群（SP3691）の延長線上に位置することから、SP3691に関連する遺構と考えられる。

SK3715（Ⅱ－14図）

土坑で、C～D・16～17グリッドに位置する。遺構は東側の調査区外に広がる。SK3548、SK3713－2に切られる。覆土と検出状況から、ほぼ遺構の2/3を占める南側の一段低い部分、1層が堆積している部分、少なくとも2基の土坑が切り合っていると考えられる。平面形は不整長方形、東西243cm、南北825cm、深さ124cmを測る。

SL2908（Ⅱ－15図）

便槽で、H16グリッドに位置する。周辺にSL2909、SL2962、SL3145が位置する。平面形は方形を呈し、断面形は長方形で坑底に平面形が不整形の凹みがある。ST2211に南側を切られる。東西64cm、深さ50cmを測る。遺構内に桶が埋設されていたと考えられ、桶の直径は50cmを測る。1～4層は桶内の覆土。2層は灰褐色土で砂と灰色粘土を含む。5～9層は掘方の覆土。遺構の軸は真北から8°東へ振れる。

SL2909（Ⅱ－16図）

便槽で、H16グリッドに位置する。周辺にSL2908、SL2962、SL3145が位置する。平面形は円形を呈し、断面形は長方形で坑底に平面形が不整形の凹みがある。直径60cm、深さ50cmを測る。遺構内に桶が埋設されていたと考えられ、桶の直径は50cmを測る。2層は桶内の覆土。焼土と灰色粘土を含む。3、4層は掘方の覆土。

SL2962（Ⅱ－17図）

便槽で、G～H・16～17グリッドに位置する。周辺にSL2908、SL2909、SL3145が位置する。平面形は円形を呈し、断面形は長方形で坑底に平面形が不整形の凹みがある。直径60cm、深さ37cmを測る。遺構内に桶が埋設されていたと考えられ、桶の直径は45cmを測る。1、2層は桶内の覆土で灰色粘土を含む。3、4層は掘方の覆土で灰色粘土を含まない。

SL3145（Ⅱ－15図）

便槽で、H16～17グリッドに位置する。周辺にSL2908、SL2909、SL2962が位置する。平面形は不整形を呈する。坑底に平面形が不整形の凹みがある。ST2212に南側を切られる。東西64cmを測る。

SU3542（Ⅱ－18図）

地下室で、F16グリッドに位置する。遺構の北西部が入口で、東側と南側に天井が残る。開口部の平面形と室部分の平面は長方形を呈し、北壁を除き天井部から床面にかけてはオーバーハングしている。北壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底中央東壁際に凹みがある。開口部は東西110cm、南北160cm、室部は東西176cm、南北196cm、深さ164cmを測る。底部の凹みの平面形は円形を呈し、断面形は台形、直径36cm、深さ12cmを測る。

第2節　B面の遺構

ST2095－1、ST2095－2（Ⅱ－19図）

ST2095－1、ST2095－2は円形木棺墓でH16グリッドに位置する。墓壙内に円形木棺を埋納している。掘方南壁は垂直に立ち上がり、南側坑底の平面形は方形を呈し一段低くなっている。段差の北側は平坦で、北壁は緩やかな弧を描いて立ち上がる。この遺構の検出状況から少なくとも3基の墓壙が重なり合っていると考えられる。ST2095－1とST2095－2の切り合い関係はST2095－1がST2095－2を切っている。

ST2095－1は中央の平坦部分に埋納されている。東西55cm、南北60cmを測る。円形木棺の上端部は確認できなかった。出土人骨の遺存状態は良好でほぼ完全体で検出された。被葬者は成人である。

ST2095－2 は南側の方形掘方に埋納されている。東西 60cm、南北 58cm を測る。円形木棺の上端部は確認できなかった。出土人骨の遺存状態は比較的良好で、成人男性と推定される。

ST2211、ST2212（Ⅱ－20 図）

ST2211 と ST2212 は甕棺墓で東西に並ぶ。H16 ～ 17 グリッドに位置する。ST2211 は出土状況と覆土の堆積状況から 2 回の埋納と改葬が行われている。掘方の平面形は長方形を呈し、西壁がオーバーハングしている。オーバーハング部に 1 枚の蓋石の端が載る形で残っている。東西 103cm、南北 122cm、深さ 132cm を測る。5 層は 1 基目の墓の改葬時に埋め戻された覆土である。4 層は 2 基目の墓壙の掘方の覆土で、甕棺を埋納している。3 層は 2 基目の墓を改葬した後の覆土である。2 基目の墓壙の直径は 54cm、掘方までの深さは 72cm を測る。甕棺の底部が残る。

ST2212 は出土状況と覆土の堆積状況から改葬が行われている。掘方の平面形は楕円形で、西壁がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、東壁が斜めに立ち上がる。7 層は甕棺埋設の際の覆土、6 層は改葬後の覆土である。甕棺の底部が残る。

ST2393、ST2394（Ⅱ－21 図）

ST2393 と ST2394 は火消壺転用棺墓で南北に並ぶ。I16 グリッドに位置する。両遺構ともに撹乱による削平を受け破損している。ST2393 の棺は、口縁部と胴部のほとんどが欠損している。掘方の平面形は円形を呈する。断面形は棺に合わせ、坑底が平坦で壁の立ち上がりは中程が張り出した曲線を呈する。残存部分は東西 34cm、深さ 18cm を測る。内容物は確認されていないことから改葬された後に撹乱を受けたと考えられる。

ST2394 の火消壺転用棺はほぼ南半分が残っている、棺は東側に傾斜した状態で埋納されている。掘方の平面形は円形を呈し、断面形は棺に合わせ、壁の立ち上がりは中程が張り出した曲線を呈する。掘方の平面形は楕円形で東西 40cm、南北 43cm、深さ 40cm を測る。人骨片が底部に炭化物とともに少量残っていることから、改葬された後に撹乱を受けたと考えられる。

ST2406（Ⅱ－22 図）

火消壺転用棺墓で H16 グリッドに位置する。棺の胴部から上は撹乱により削平を受け欠損している。掘方の平面形は円形を呈し、東側の壁面は棺に合わせ、壁の立ち上がりは中程が張り出した曲線を呈する。西側の立ち上がりは改葬もしくは撹乱により失われている。掘方の直径は南北で 37cm、深さは 21cm を測る。人骨がほとんど確認できないことから改葬された後に撹乱を受けたと考えられる。

ST2424（Ⅱ－23 図）

火消壺転用棺墓で H16 グリッドに位置する。胴部から上は撹乱により削平を受け欠損している。掘方の平面形は円形を呈し、西壁上部は撹乱により張り出している。棺に合わせ、坑底が平坦で壁の立ち上がりは中程が張り出した曲線を呈する。直径は 34cm、深さ 16cm を測る。人骨がほとんど確認できないことから改葬された後に撹乱を受けたと考えられる。

ST2502、ST2503、ST2583、ST3317、ST3318、SX2519（Ⅱ－24 図）

ST2502 は蔵骨器墓で、H16 グリッドに位置する。ST2502、ST2503、ST2583 が埋納されている墓壙は不整形で、東西 145cm、南北 73cm、深さ 42cm を測る。ST1988、ST3317 を切り、ST2211、

ST3148に切られる。ST2502、ST2503は東西に並び、口縁部の高さは揃えられている。SX2519は割られているため元位置を留めていないが、ST2502、ST2503と同じ瀬戸・美濃系陶器の甕が用いられていること、布を被せ銅線を巻いて蓋としていること、ST2502、ST2503が埋納された墓壙の範囲にあることから関連があると考えられる。

ST2503は蔵骨器墓で、H16グリッドに位置する。ST2502と東西に並ぶ。瀬戸・美濃系陶器の甕で焼骨が納められている。口縁には銅線が巻かれており、布の付着した痕跡が銅線に残っている。蔵骨器に布を被せ銅線を巻いて蓋としたものと考えられる。

ST2583は江戸在地系土器の土師質鉢を埋納し、火消壺の蓋の破片を被せ蓋にしている。人骨、副葬品は確認されていない。遺体収納容器ではなく有機物の副葬品が納められていた可能性もある。

ST3317はH16グリッドに位置する。南側をST1988、北側をST2502、ST2503、ST2583に、東側をST3148に切られている。埋葬施設は確認されていない。

ST3318はH16グリッドに位置する。南側をST1988、北側をST2502、ST2503、ST2583に切られている。埋葬施設は確認されていない。

SX2519は改葬時の遺体収納容器廃棄遺構で、H16グリッドに位置する。瀬戸・美濃系の甕と火消壺が廃棄されている。ST2502、ST2503と同様銅線が出土しており、蔵骨器に布を被せ銅線を巻いて蓋としたものと考えられる。

ST2584（Ⅱ－25図）

甕棺墓でH16～17グリッドに位置する。未改葬のため遺存状態は良好である。142cmまで調査を行った。墓壙はさらに下へ続くため下に甕棺が埋納されていた可能性がある。安全を考慮し坑底まで調査できなかった。蓋石の上層に不整形の土坑があり、下層の甕棺墓を改葬した際に掘削した土坑の可能性がある。上層の土坑は確認された範囲で東西105cm、南北135cm、深さ40cmを測る。墓壙の平面形は方形で、東西の軸から13°南へ振れる。確認された範囲で東西94cm、南北88cmを測る。蓋石は東西方向に7枚置かれ、蓋石と甕棺の間には腐食した木の蓋が付着している。被葬者は成人男性で、南向きに埋葬されている。副葬品は骨角製の簪1点、掘方から土製の犬、恵比寿、他1点が出土している。

ST2892、ST3148（Ⅱ－26図）

ST2892、ST3148はH16グリッドに位置する。ST2892は方形木棺墓でST3148を切る。木棺の上部は失われているが未改葬で遺存状態は良好で、被葬者は成人男性で、南を向いている。方形木棺内から籾殻が確認されている。方形木棺は一辺60cmで残存部の深さは16cmを測る。副葬品は寛永通宝、キセルが出土している。

ST3148は改葬されているが形状、規模から甕棺墓と考えられる。ST2892に切られる。平面形は方形を呈する。東西92cm、南北93cm、深さ130cmを測る。坑底から成人骨と考えられる頭蓋骨、釘が出土。植物遺存体が確認されている。

ST2893（Ⅱ－27図）

甕棺墓でI16～17グリッドに位置する。改葬されているため人骨は出土していない。甕棺は口縁部が一部欠損している。平面形は長方形、東西107cm、南北90cm、深さ76cmを測る。

ST2951、ST3319（Ⅱ－28 図）

ST2951、ST3319 は H ～ I・16 ～ 17 グリッドに位置する。遺構の東側は調査区外である。ST2951 の平面形は楕円形で、長軸 148cm、短軸は残存部分で 95cm を測る。墓壙と考えられるが痕跡は確認できなかったことから、改葬が行われたと考えられる。ST2951 は ST3319 を切る。

ST3319 の平面形は残存部分の長軸が 56cm、短軸が 20cm を測る。覆土は灰褐色土でシルトを多く含む。墓壙と考えられるが痕跡は確認できなかった。

ST2952（Ⅱ－29 図）

方形木棺墓で I16 グリッドに位置する。遺構の軸は真北から 4° 東に振れる。上部は削平される。南側は SE1734 に削平される。2 つの方形木棺が切り合っており人骨を検出した方形木棺は別の方形木棺を切っている。切られた方形木棺は残存部分の長軸 77cm、短軸 68cm、深さ 10cm を測る。人骨は確認されていない。人骨の残る方形木棺は残存部分の長軸 68cm、短軸 52cm、深さ 28cm を測る。人骨は成人男性と考えられ、遺存状態は良好で北側を向いている。

ST2954、ST2955（Ⅱ－30 図）

ST2954、ST2955 は人骨等を検出していないが遺構の形状、規模から方形木棺墓と考えられる。両遺構に切り合いは無い。ST2954 は G17 グリッドに位置する。東側は調査区外に拡がるため未調査である。北側を土坑によって削平されている。平面形は長方形で残存部の長軸は 118cm、短軸は 115cm、深さ 138cm を測る。

ST2955 は G ～ H17 グリッドに位置する。平面形は方形、一辺 100cm、深さ 138cm を測る。

ST2979、ST2980、ST3312（Ⅱ－31 図）

ST2979、ST2980、ST3312 は墓壙で ST1988、ST2584 、ST2951、ST3146、ST3308、ST3317 など墓壙の密集した区域に位置する。

ST2979 は H ～ I16 グリッドに位置する。平面形は長方形、長軸は 100cm、短軸は 94cm を測る。

ST2980 は H ～ I16 グリッドに位置する。平面形は不整形で長さ 85cm、深さ 5cm を測る。若年成人男性と考えられる歯牙のみ出土した。

ST3312 は H ～ I·16 ～ 17 グリッドに位置する。平面形は不整形で長さ 100cm、深さ 20cm を測る。ST2584、ST2951、ST2979 によって削平されている。

ST3142、ST3143（Ⅱ－32 図）

ST3142 は方形木棺墓で G16 ～ 17 グリッドに位置する。平面形は長方形、東西 85cm、南北 66cm、深さ 38cm を測る。北側を小穴、南側を ST3143 に切られる。小穴の平面形は楕円形で東西 18cm、南北 12cm、深さ 48cm を測る。人骨は確認されていない。

ST3143 は方形木棺墓で G16 グリッドに位置する。平面形は不整方形、北側に土坑を伴う。東西 100cm、南北 100cm、深さ 40cm、土坑を含めた深さは 55cm を測る。ST3142 を切る。被葬者は成人女性で、遺存状態は良好である。頭位方向は南向きである。棒材が出土している。

ST3146（Ⅱ－33 図）

円形の墓壙で H ～ I16 グリッドに位置する。平面形は確認面で楕円形、坑底は円形。形状、規模

から円形木棺墓と考えられる。2基の墓壙が重複しており東西91cm、南北88cm、深さ22cmを測る内側の墓壙を東西72cm、南北86cm、底径54cm、深さ40cmを測る外側の墓壙が切る。後者は遺存状態が良好で人骨が残っている。ST1988、SK2980、SD3141に切られる。

ST3308、ST3311（Ⅱ－34図）

ST3308はI16グリッドに位置する。平面形は確認面で楕円形、坑底は円形、東西78cm、南北78cm、坑底の直径は58cm、深さ42cmを測る。形状、規模から円形木棺墓と考えられる。ST3311に切られる。成人人骨の一部が残っている。

ST3311はI16グリッドに位置する。平面形は確認面で長方形、坑底は方形もしくは長方形。残存部分で東西75cm、南北64cmを測る。形状、規模から方形木棺墓と考えられる。

ST3310－1～4、6～10（Ⅱ－35、36図）

ST3310－1はI16グリッドに位置する。東西45cm、南北52cmの範囲で未成年を含む最低3体分の人骨を確認した。埋葬施設の有無は確認できなかった。

ST3310－2はI16グリッドに位置する。平面形は不整形、坑底は円形、東西50cm、南北52m、坑底の直径は50cm、深さ29cmを測る。形状、規模から円形木棺墓と考えられる。最低3体分の成人人骨を確認し、うち1体はほぼ完全体である。

ST3310－3はI16グリッドに位置する。平面形は長方形、坑底は長方形、北東角がオーバーハングしておりこの部分を含むと東西74cm、南北82cm、含まない場合は東西70cm、南北80cm、坑底は東西72cm、南北75cm、深さ24cmを測る。形状、規模から方形木棺墓と考えられる。最低4体分の成人人骨を確認し、そのうち1体は男性、1体は女性と判断された。

ST3310－4はI17グリッドに位置する。平面形は楕円形、残存部の東西42cm、南北69cm、坑底は残存部の東西43cm、南北52cm、深さ12cmを測る。形状、規模から円形木棺墓と考えられる。北側のST3310－6を削平している。最低2体分の成人人骨を確認した。

ST3310－6はI17グリッドに位置する。平面形は楕円形、坑底は不整形、残存部の東西は50cm、残存部の南北は46cm、深さ37cmを測る。ST3310－4に削平されて人骨は確認されていないが、形状、規模から円形木棺墓と考えられる。

ST3310－7はI16～17グリッドに位置する。平面形は不整形で、残存部の東西50cm、南北43cmを測る。削平によって人骨は確認されていないが形状、規模から円形木棺墓と考えられる。

ST3310－8はI16～17グリッドに位置する。東側は調査区外で西側は削平されている。断面形は長方形、残存部の東西は49cm、南北は83cm、坑底の南北は76cmを測る。形状、規模から方形木棺墓と考えられる。成人人骨1体分を確認した。

ST3310－9はI16グリッドに位置する。東側と西側は削平により失われている。残存部で東西40cm、南北52cm、坑底は南北42cm、深さ10cmを測る。形状、規模から方形木棺墓と考えられる。

ST3310－10はI16グリッドに位置する。甕棺墓で蓋石が載せられており人骨の遺存状況は良好である。被葬者は成人女性で頭位方向は南向きである。甕棺の掘方は確認できなかった。北側の蓋石は長さ90cm、幅32cm、厚さ8cmを測る。南側の蓋石は長さ88cm、幅30cm、厚さ8cmを測る。遺体は南向きに埋葬されている。

ST3320（Ⅱ－37図）

I16 グリッドに位置する。平面形は方形で、一辺は 52cm、坑底の一辺は 48cm、深さ 78cm を測る。形状、規模から方形木棺墓と考えられる。墓坑の軸は真北から 4° 西に振れる。人骨の遺存状況は良好で遺体は南側を向いている。被葬者は成人男性である。

ST3321（Ⅱ－38 図）

I16 グリッドに位置する。方形木棺墓で板材の痕跡、釘を検出した。掘方の平面形は長方形、東西 77cm、南北 75cm、深さ 48cm を測る。方形木棺は平面形が台形で本来は方形だった方形木棺が土圧によって変形したと考えられる。東西 60cm、南北 60cm、深さ 38cm を測る。方形木棺は掘方の底面から 10cm 上に埋納されている。

ST3441（Ⅱ－39 図）

I16 グリッドに位置する。平面形は長方形、坑底には 5 箇所の凹みが確認されている。壁は外側に開きながら立ち上がる。形状、規模から方形木棺墓と考えられる。遺構の軸は真北から 6° 東に振れる。長軸 106cm、短軸 102cm、深さ 54cm、坑底は長軸 84cm、短軸 78cm を測る。西側の凹みで人骨が出土。

ST3526（Ⅱ－40 図）

I17 グリッドに位置する。平面形は楕円形、形状、規模から円形木棺墓と考えられる。直径 56cm、深さ 8cm を測る。上部を削平されているため人骨は一部失われている。ST2951 を切る。

ST3529（Ⅱ－41 図）

J16 グリッドに位置する。平面形は確認面で不整形、坑底は楕円形を呈し、形状、規模から円形木棺墓と考えられる。残存部は東西 48cm、南北 60cm、深さ 34cm を測る。SE1734 に東側を削平されており人骨はほとんどが失われている。

ST3531（Ⅱ－42 図）

I16 グリッドに位置する。平面形は長方形、確認面から深さ 34cm まで壁の立ち上がりは緩やかで、そこから平面形は円形に変化し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。南側に 1 基、北側に 2 基足掛がある。坑底に甕棺が納められている。坑底は甕棺に合わせた U 字形、検出面での規模は東西 90cm、南北 98cm、深さ 34cm での規模は直径 79cm、深さ 186cm を測る。蓋石は割れた状態で甕棺の口縁部分に残っている。もともと 3 枚あった蓋石のうち中央の 1 枚を外し、残り 2 枚を割って取除き改葬を行ったと考えられる。人骨の遺存状態は良好である。被葬者は成人男性で頭位方向は南向きである。深さ 34cm までの部分は改葬時もしくは墓坑を掘削した際の痕跡と考えられる。上部は ST3320 に切られる。

ST3532（Ⅱ－43 図）

J16 グリッドに位置する。SE1734 に大部分が切られるため埋葬形態か不明である。平面形は不整形で残存部分東西 48cm、南北 42cm、深さ 36cm を測る。

ST3533（Ⅱ－44 図）

I16 グリッドに位置する。平面形は正方形を呈し、坑底に凹凸がある。東西 78cm、南北 78cm、深さ 22cm を測る。人骨を検出。形状、規模から方形木棺墓と考えられる。

ST3534（Ⅱ－45図）

H16グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、坑底には凹凸がある。東西57cm、南北68cm、深さ23cmを測る。成人及び胎児～新生児程度の未成人骨が確認されている。形状、規模から方形木棺墓と考えられる。

ST3539－1・2（Ⅱ－46図）

G16グリッドに位置する。火消壺転用棺墓で､2基の棺が埋納されている。掘方は､平面形が長方形、東西92cm、南北56cm、深さ88cmを測る。覆土から人骨が出土している。西側のST3539－1は坑底上4cmに埋納されている。人骨の検出は無く改葬されていると考えられる。東側のST3539－2は坑底上26cmに埋納されている。

第3節　A面の遺構

ST1732、ST1733（Ⅱ－47図）

H16グリッドに位置する。ST1732、ST1733は東西に並ぶ。ST1732は甕棺墓で平面形は円形で、東西38cm、南北36cm、深さ28cmを測る。甕棺は胴部から上が割られ甕棺内に詰め込まれている。人骨は確認されていないことから改葬されたと考えられる。骨片が掘方から出土している。

ST1733は甕棺墓で平面形は円形、東西38cm、南北34cm、深さ22cmを測る。甕棺は胴部から上が割られ甕棺内に詰め込まれている。人骨は確認されていないことから改葬されたと考えられる。骨片が掘方から出土している。

ST1839（Ⅱ－48図）

I16グリッドに位置する。平面形は不整形、東西49cm、南北36cm、深さ16cmを測る。火消壺転用棺が埋納されている。削平により底部より上のほとんどの部分が失われている。棺内には少量の骨片が確認されているが検出状況から改葬されたと考えられる。

ST1988（Ⅱ－49図）

H16グリッドに位置する。甕棺墓で掘方の平面形は台形、東西75cm、南北80cm、深さ124cmを測る。確認面から15cmで蓋石を3枚検出。北から1枚目は長さ48cm、幅18cm、北から2枚目は長さ58cm、幅13cm、厚さ8cm、北から3枚目は折れていて長さ29cm、幅14cmを測る。3枚目の割れた部分が下層から出土している。甕棺から遺存状態の良好な人骨が出土しているが改葬によって埋葬状態を保っていない。最低3体分の成人人骨を確認し、そのうち1体は男性である。蓋石は甕棺より上層で出土しており、改葬に伴い取り外された蓋石は埋め戻す途中で覆土の上層に並べられたと考えられる。

SK1905（Ⅱ－50図）

I16グリッドに位置する土坑で平面形は台形、東西110cm、南北80cm、深さ60cmを測る。

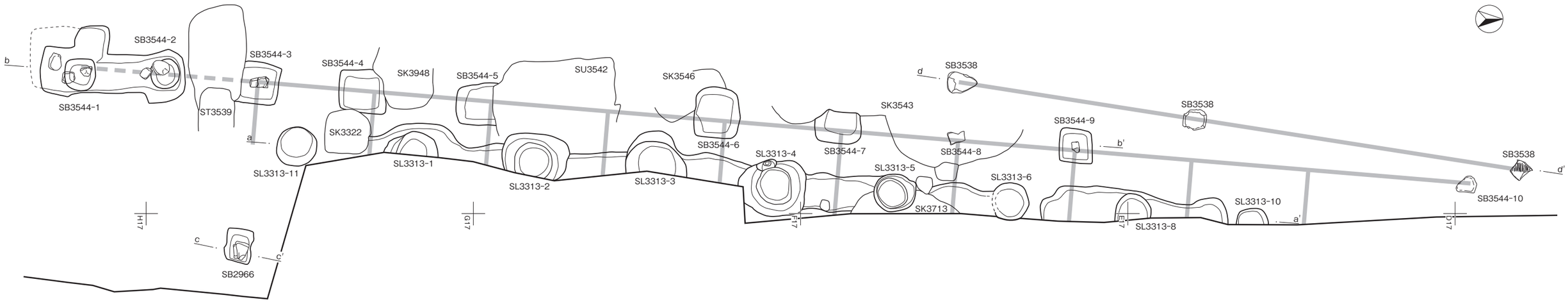
SE1734、SB1906、SB1908（Ⅱ－51 図）

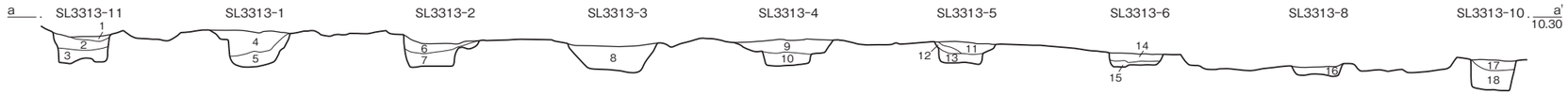
SE1734、SB1906、SB1908 はⅠ～Ｊ・16 ～ 17 グリッドに位置する。東側は調査区外。SE1734 は井戸で SB1906、SB1908 は井戸に伴う遺構である。SB1906 は 2 基の遺構が南北に並ぶ。北側の遺構は平面形が不整形、東西 72cm、南北 100cm、深さ 14cm を測る。南側の遺構では根石を伴う礎石を検出している。平面形は方形、東西 54cm、深さ 34cm を測る。臍穴の有る石材が遺構検出面から 14cm 地表に出ている。

SB1908 は東側の調査区外に拡がる。北側の遺構は東西 34cm、南北 93cm の範囲から長方形の石材が 3 段積み重なって検出された。南側の遺構は東西 16cm、南北 45cm の範囲から長方形の石材が 2 段積み重なって検出された。SB1906 南側の遺構のように明確に礎石と判断できる石材は他の遺構で確認されていないが、SE1734 を中心に東西南北に遺構が配置されていることから、4 遺構は井戸の上屋の基礎と考えられる。

SE1734 は三重構造である。中心に井戸側を伴う井戸、その外側に井戸を取り囲む井桁が組まれ、その外側は掘方になっている。

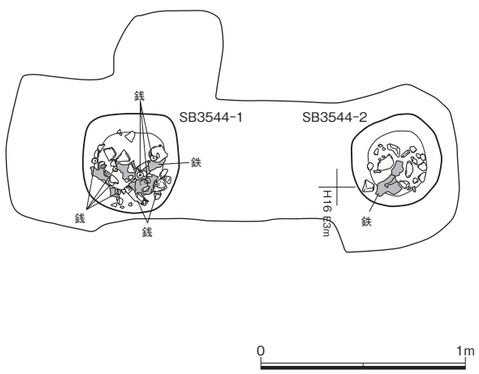
中心の井戸は平面形が円形で東西 88cm、南北 94cm、深さ 153cm まで調査した。井戸の外側の井桁を伴う部分は平面形が長方形、東西 164cm、南北 192cm、深さ 133cm を測る。井桁の外側の掘方とは明確に覆土が分かれており、板材で囲まれていたと考えられる。掘方は長方形で東側は調査区外に拡がる。確認された範囲で東西 240cm、南北 285cm、深さ 133cm を測る。坑底に平面形が長方形の掘り込みが 2 基確認されている。東側は東西 56cm、南北 240cm、深さ 20cm を測る。西側は東西 59cm、南北 212cm を測る。東西井桁を固定するための掘り込みと考えられる。

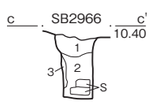




SL3313

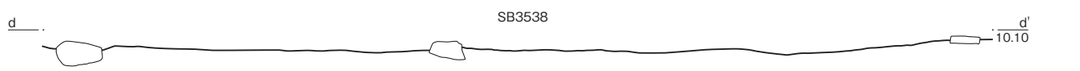
1 茶褐色土 （ローム粒少含）
2 黒色土 （炭化物多含、ローム粒少含）
3 暗灰色土 （シルト多含）
4 黒褐色土 （炭化物やや多含、ローム粒・焼土少含）
5 茶褐色土 （ローム粒含、炭化物・焼土少含）
6 赤褐色土 （焼土・炭化物含、ローム粒少含）
7 茶褐色土 （ローム粒含）
8 赤褐色土 （焼土多含、炭化物含）
9 赤褐色土 （焼土含、ローム粒・炭化物少含）
10 茶褐色土 （炭化物含、ローム粒・焼土少含）
11 灰褐色土 （灰色粘土含、ローム粒・炭化物・焼土少含）
12 茶褐色土 （ローム粒含、炭化物・焼土少含、しまりなし）
13 暗褐色土 （ローム粒・炭化物・焼土・灰色粘土少含）
14 茶褐色土 （ローム粒・炭化物・焼土少含）
15 暗褐色土 （ローム粒・炭化物少含）
16 黒褐色土 （炭化物含、焼土少含）
17 暗灰色土 （灰色粘土多含、炭化物・焼土少含、しまりなし）
18 赤黒色土 （炭化物やや多含、焼土含、ローム粒少含）





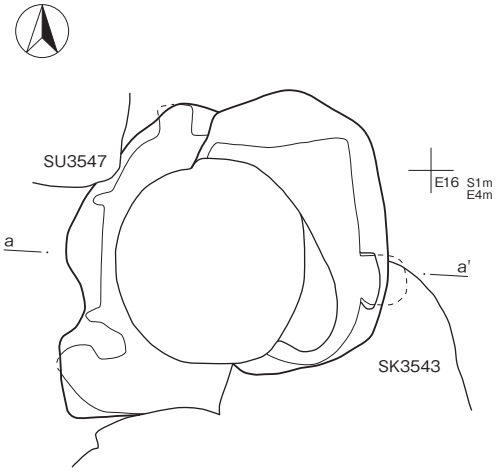
SB2966

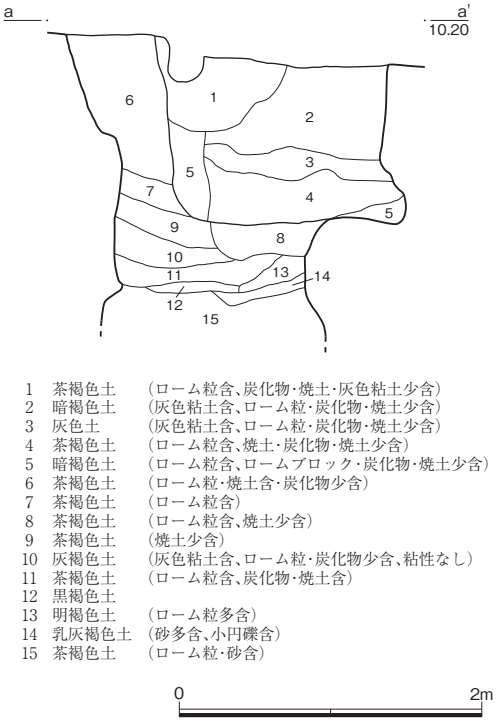
1 灰褐色土 （ローム粒・炭化物粒・焼土粒・灰色粘土粒少含）
2 茶褐色土 （ローム粒含、炭化物粒・焼土粒少含）
3 茶褐色土 （ローム粒多含、しまり弱）



0 2m

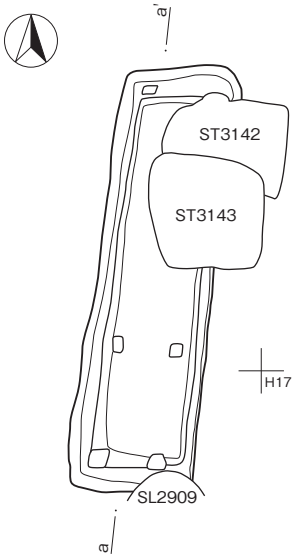
Ⅱ-5図　SB2966、SB3538、SB3544、SL3313

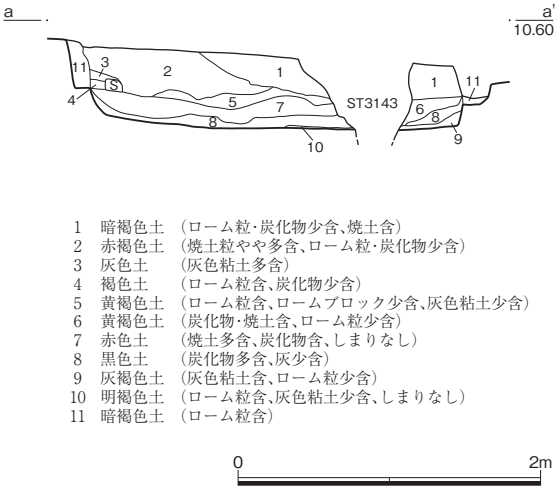




1　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物・焼土・灰色粘土少含）
2　暗褐色土　（灰色粘土含、ローム粒・炭化物・焼土少含）
3　灰色土　（灰色粘土含、ローム粒・炭化物・焼土少含）
4　茶褐色土　（ローム粒含、焼土・炭化物・焼土少含）
5　暗褐色土　（ローム粒含、ロームブロック・炭化物・焼土少含）
6　茶褐色土　（ローム粒・焼土含・炭化物少含）
7　茶褐色土　（ローム粒含）
8　茶褐色土　（ローム粒含、焼土少含）
9　茶褐色土　（焼土少含）
10　灰褐色土　（灰色粘土含、ローム粒・炭化物少含、粘性なし）
11　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物・焼土含）
12　黒褐色土
13　明褐色土　（ローム粒多含）
14　乳灰褐色土　（砂多含、小円礫含）
15　茶褐色土　（ローム粒・砂含）

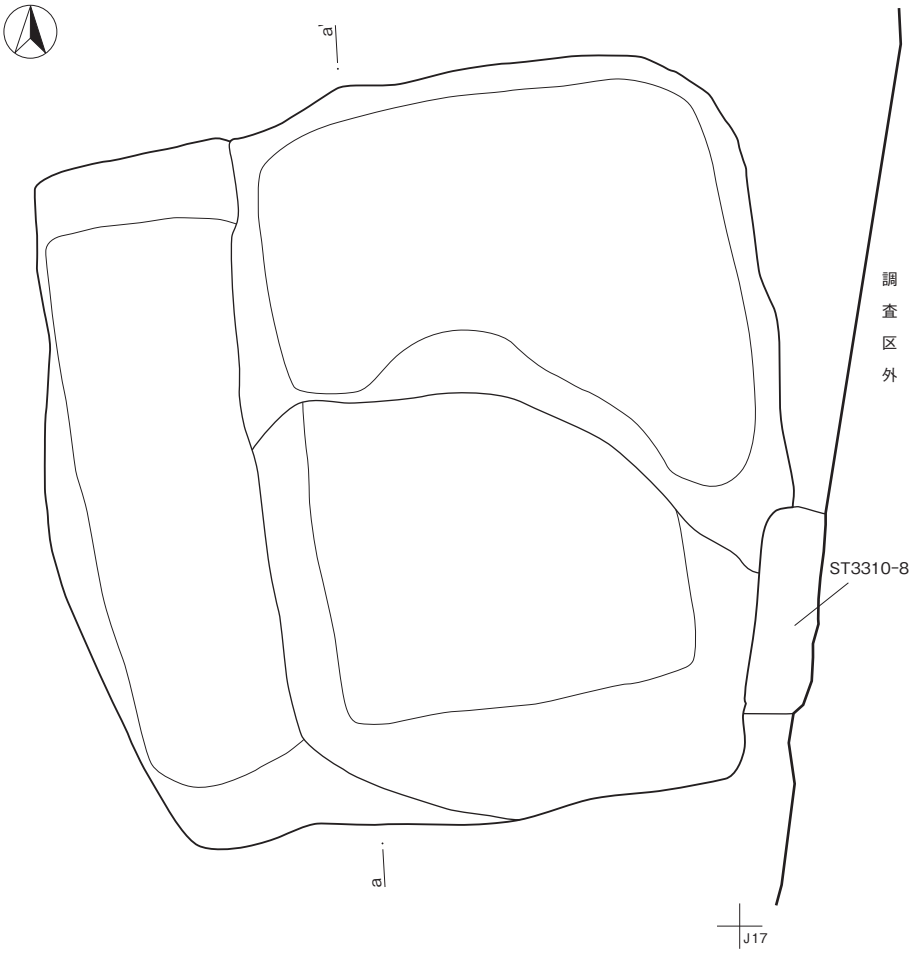
Ⅱ-6図　SE3550





1　暗褐色土　（ローム粒・炭化物少含、焼土含）
2　赤褐色土　（焼土粒やや多含、ローム粒・炭化物少含）
3　灰色土　（灰色粘土多含）
4　褐色土　（ローム粒含、炭化物少含）
5　黄褐色土　（ローム粒含、ロームブロック少含、灰色粘土少含）
6　黄褐色土　（炭化物・焼土含、ローム粒少含）
7　赤色土　（焼土多含、炭化物含、しまりなし）
8　黒色土　（炭化物多含、灰少含）
9　灰褐色土　（灰色粘土含、ローム粒少含）
10　明褐色土　（ローム粒含、灰色粘土少含、しまりなし）
11　暗褐色土　（ローム粒含）

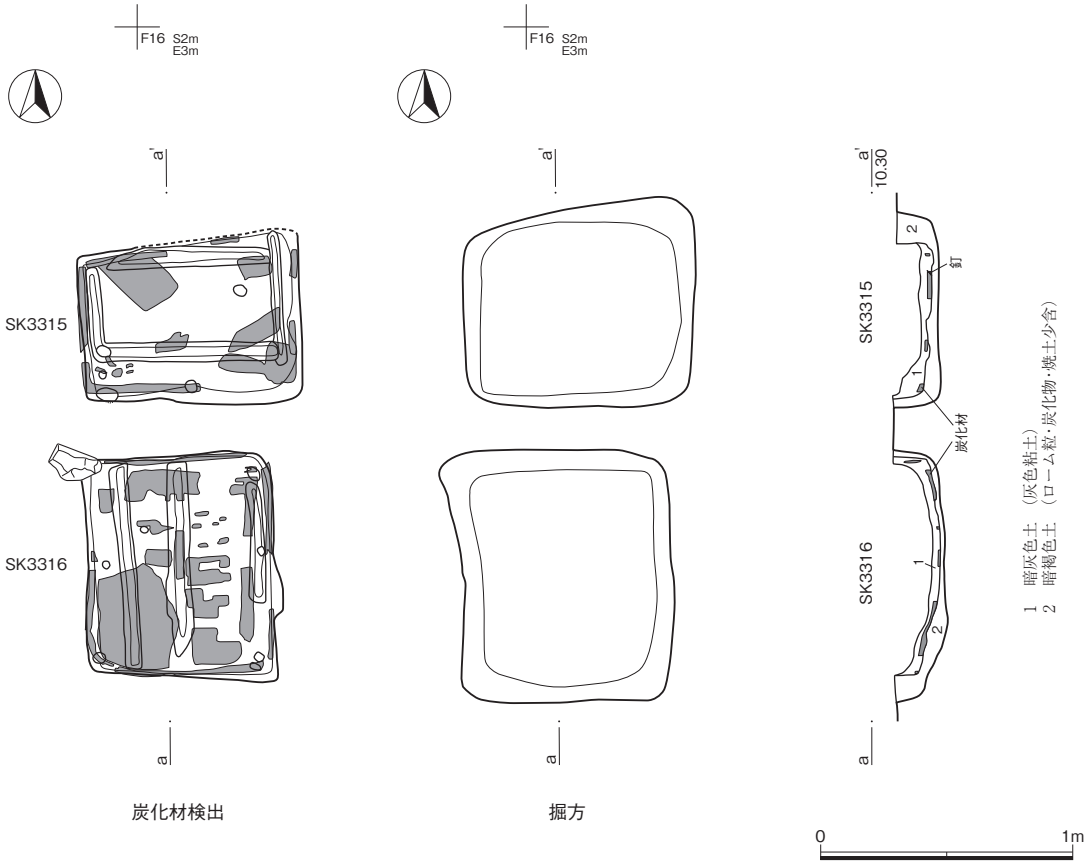
Ⅱ-7図　SK2967



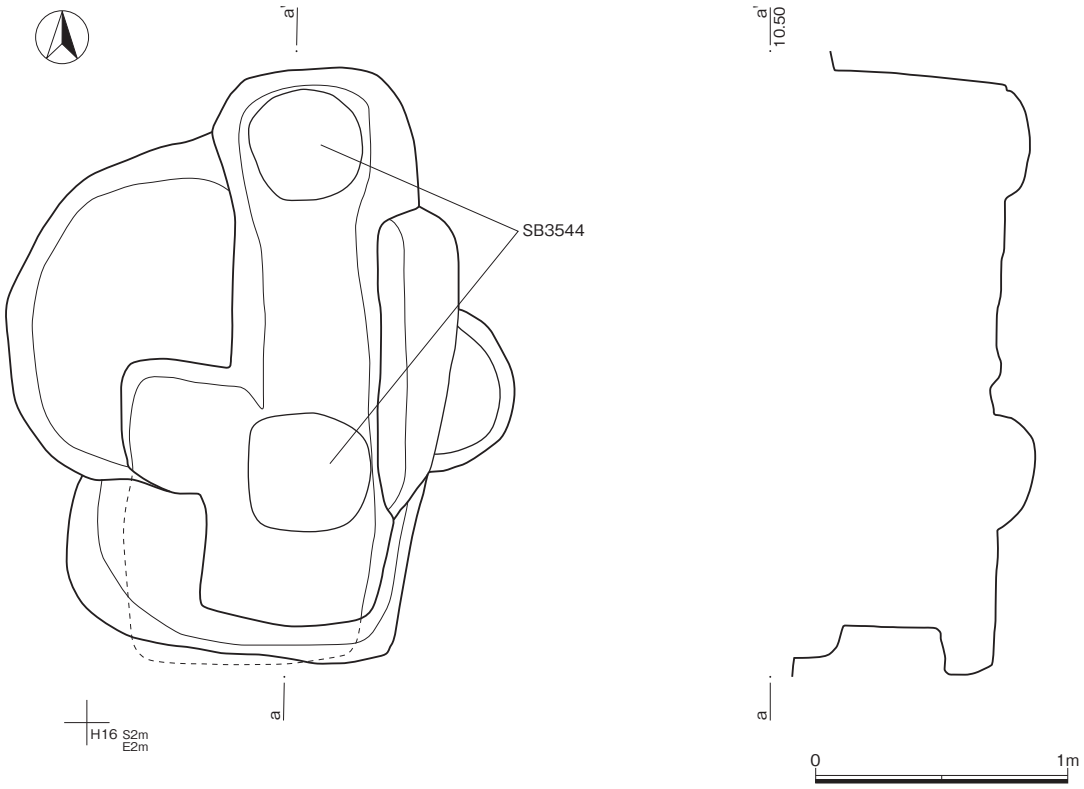
1　暗褐色土　（ローム粒・炭化物粒・焼土少含、しまりやや弱）
2　灰褐色土　（灰色粘土粒含、炭化物粒・焼土粒少含）
3　茶褐色土　（ローム粒含、灰色粘土粒少含、しまりやや弱）
4　暗灰色土　（暗灰色粘土粒多含、黒色粘土粒含、炭化物粒少含、しまりなし）
5　茶灰色土　（ローム粒・灰色粘土粒含、炭化物粒・焼土粒少含）
6　黒灰色土　（黒灰色粘土粒多含、炭化物粒・焼土粒少含、材を含む、しまり弱）
7　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物粒・焼土粒少含）
8　灰褐色土　（ローム粒・灰色粘土粒含、しまり弱）
9　青灰色土　（青灰色粘土粒多含、しまりなし）
10　灰褐色土　（灰色粘土粒多含、黒ボク土少含、しまり弱）
11　茶褐色土　（ローム粒含、焼土粒少含）
12　灰褐色土　（ローム粒・灰色粘土粒含、焼土粒少含、しまりなし）
13　暗灰色土　（粘土粒多含、しまりなし）

0　1m

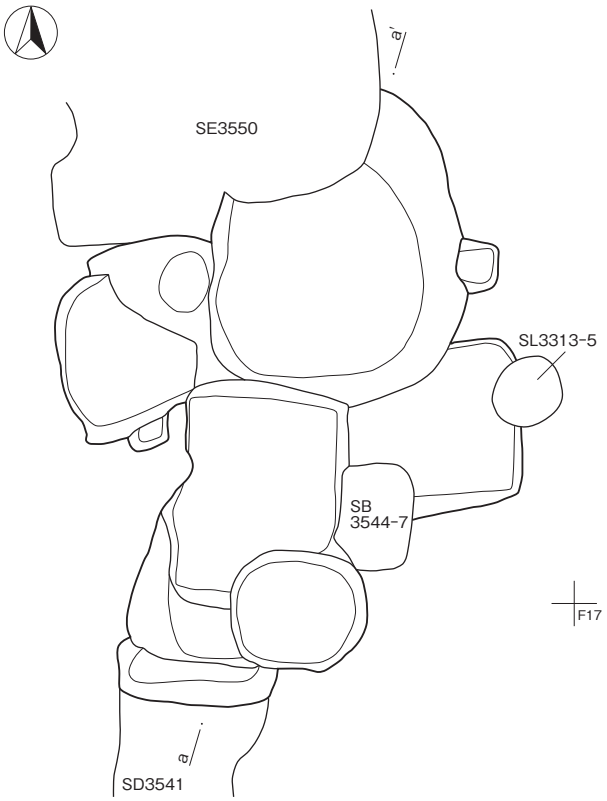
Ⅱ-8図　SK3310

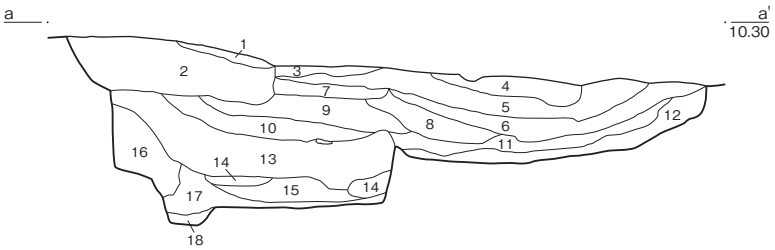


Ⅱ-9図　SK3315、SK3316



Ⅱ-10図　SK3540

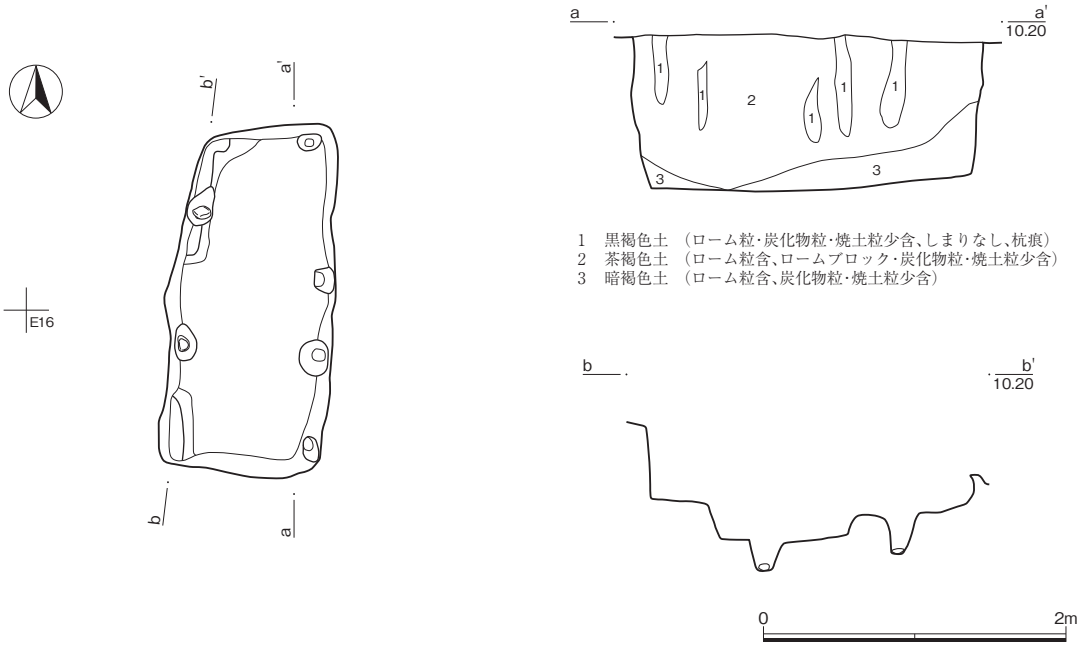




1　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物粒少含、しまり強）
2　灰褐色土　（小円礫・灰色粘土粒含、炭化物粒・焼土粒少含）
3　灰褐色土　（炭化物粒・焼土粒・灰色粘土粒少含）
4　灰褐色土　（ローム粒・灰色粘土粒含、炭化物粒・粘土粒少含）
5　暗灰褐色土（焼土粒・灰色粘土粒含、ローム粒・炭化物粒少含、しまり弱）
6　黒灰色土　（灰色粘土粒含、炭化物粒・焼土粒少含、しまり弱）
7　茶褐色土　（ローム粒含、しまり強）
8　茶褐色土　（ローム粒含、灰色粘土粒少含）
9　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物粒・焼土粒少含）
10　灰色土　（ローム粒・焼土粒少含、しまり弱）
11　暗灰色土　（灰色粘土粒含、炭化物粒・焼土粒少含）
12　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物粒少含）
13　暗褐色土　（ローム粒・炭化物粒・焼土粒少含）
14　明褐色土　（ローム粒多含、炭化物粒・焼土粒少含）
15　灰褐色土　（灰色粘土粒含、ローム粒・炭化物粒少含）
16　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物粒・焼土粒少含、しまりなし）
17　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物粒・焼土粒少含）
18　明褐色土　（ローム粒多含）

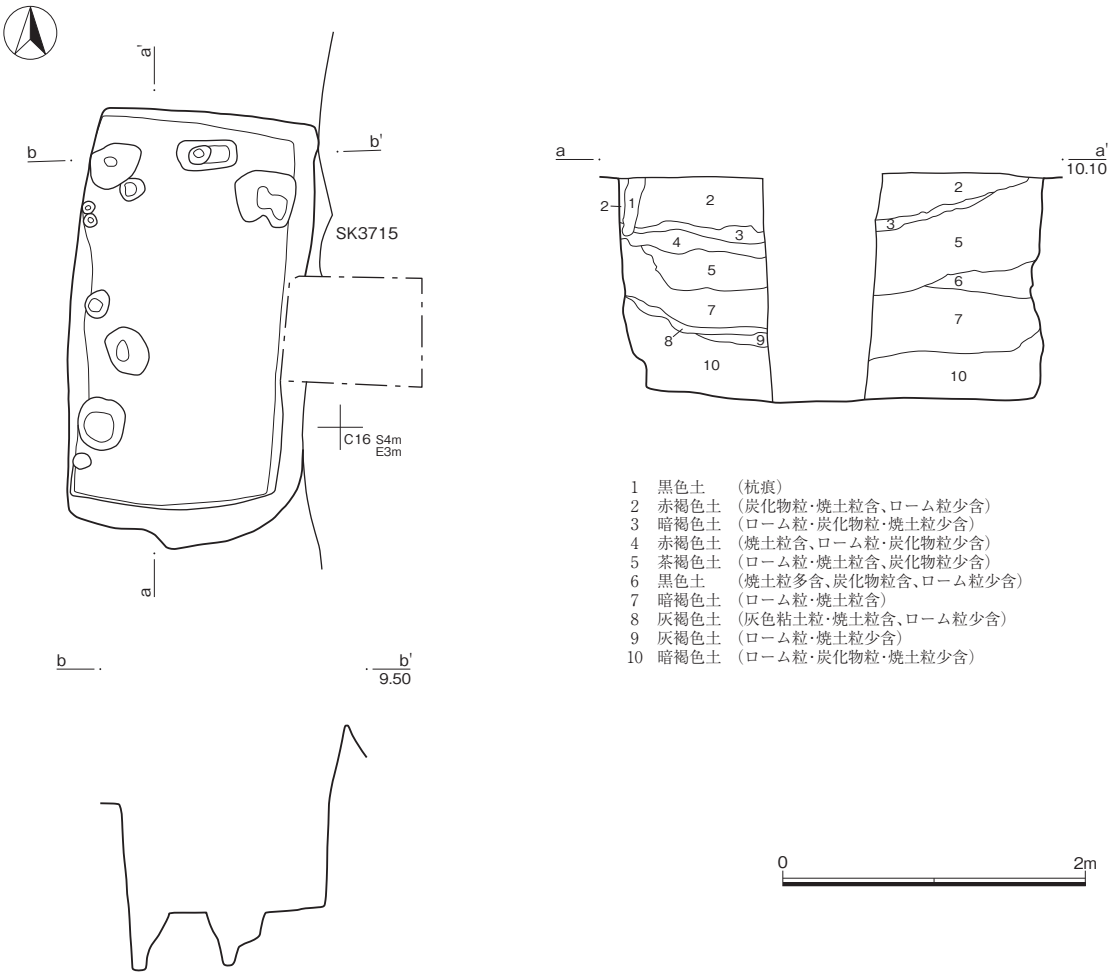
0　2m

Ⅱ-11図　SK3543



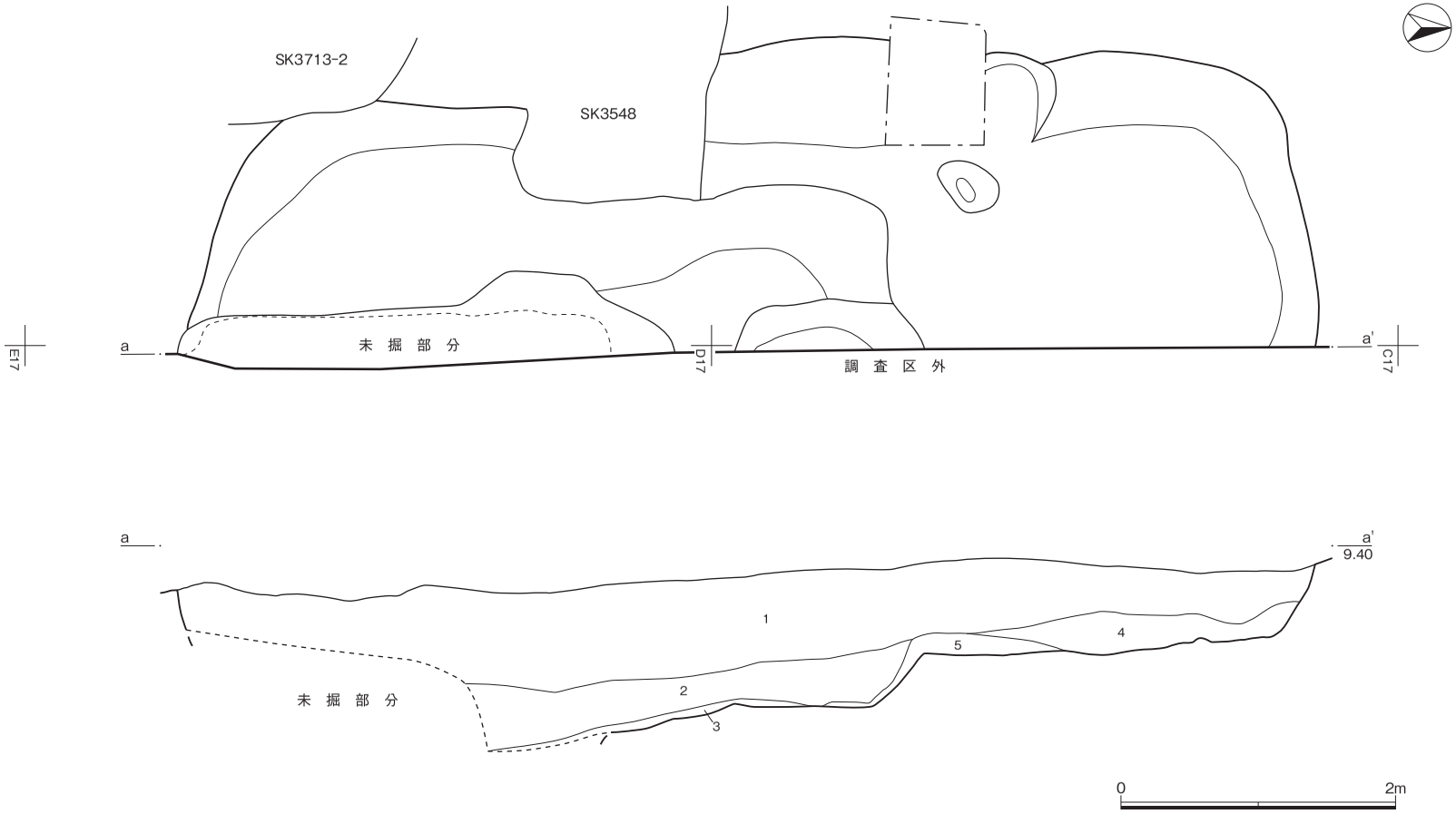
1　黒褐色土　（ローム粒・炭化物粒・焼土粒少含、しまりなし、杭痕）
2　茶褐色土　（ローム粒含、ロームブロック・炭化物粒・焼土粒少含）
3　暗褐色土　（ローム粒含、炭化物粒・焼土粒少含）

Ⅱ-12図　SK3547



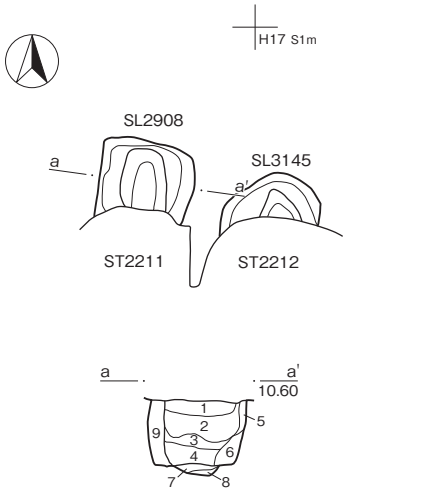
1　黒色土　（杭痕）
2　赤褐色土　（炭化物粒・焼土粒含、ローム粒少含）
3　暗褐色土　（ローム粒・炭化物粒・焼土粒少含）
4　赤褐色土　（焼土粒含、ローム粒・炭化物粒少含）
5　茶褐色土　（ローム粒・焼土粒含、炭化物粒少含）
6　黒色土　（焼土粒多含、炭化物粒含、ローム粒少含）
7　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒含）
8　灰褐色土　（灰色粘土粒・焼土粒含、ローム粒少含）
9　灰褐色土　（ローム粒・焼土粒少含）
10　暗褐色土　（ローム粒・炭化物粒・焼土粒少含）

Ⅱ-13図　SK3549



1　暗褐色土　（ローム粒・炭化物粒・シルト含）
2　灰色土　（シルト多含、ローム粒・炭化物粒・焼土粒少含）
3　暗茶褐色土　（砂粒多含、焼土粒少含、粘性弱）
4　暗褐色土　（ローム粒多含、ロームブロック含、炭化物粒・焼土粒少含）
5　黒褐色土　（ローム粒少含）

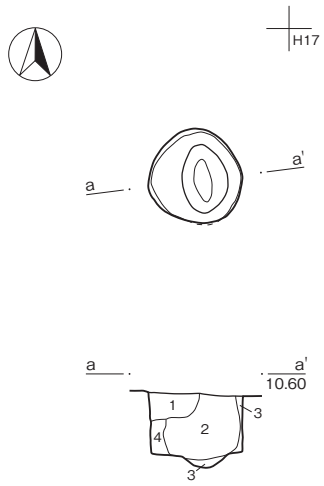
Ⅱ-14図　SK3715



SL2908
1　暗褐色土　（ローム粒･焼土･炭化物少含）
2　灰褐色土　（砂多含､灰色粘土含､ローム粒少含）
3　茶褐色土　（ローム粒･灰色粘土･砂･焼土少含）
4　茶褐色土　（ローム粒･焼土･炭化物少含）
5　茶褐色土　（ローム粒･焼土少含）
6　茶褐色土　（茶褐色粘土多含）
7　暗灰色土　（暗灰色粘土多含）
8　灰色土　　（砂多含､灰色粘土少含､しまりやや弱）
9　暗褐色土　（ローム粒･炭化物･焼土少含）

0　1m

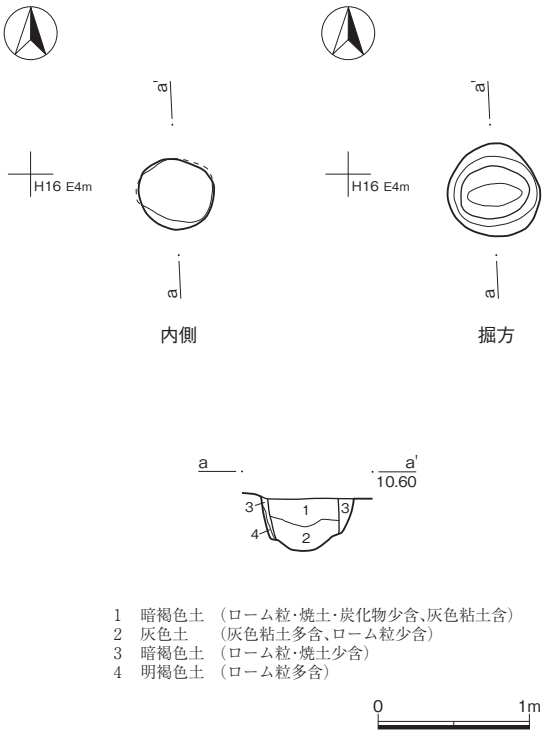
Ⅱ-15図　SL2908､SL3145



1　茶褐色土　（灰色粘土･炭化物･焼土少含）
2　灰褐色土　（灰色粘土含､焼土やや多含､ローム粒･焼土少含）
3　灰褐色土　（砂含､ローム粒少含）
4　茶褐色土　（ローム粒含）

0　1m

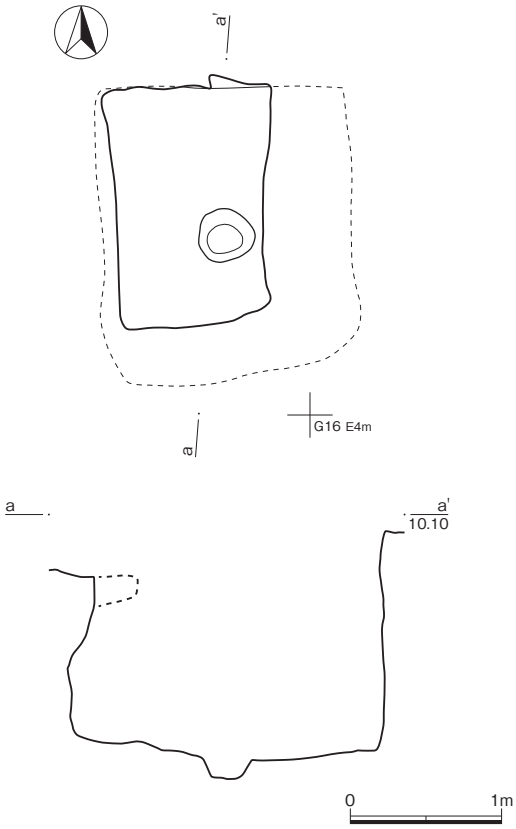
Ⅱ-16図　SL2909



1　暗褐色土　（ローム粒･焼土･炭化物少含､灰色粘土含）
2　灰色土　　（灰色粘土多含､ローム粒少含）
3　暗褐色土　（ローム粒･焼土少含）
4　明褐色土　（ローム粒多含）

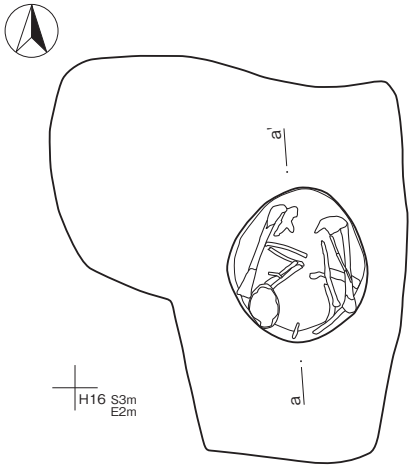
0　1m

Ⅱ-17図　SL2962

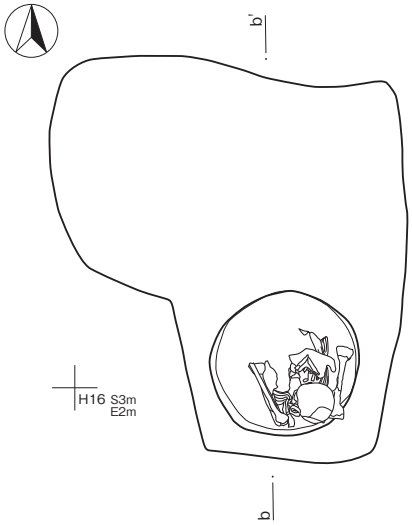


0　1m

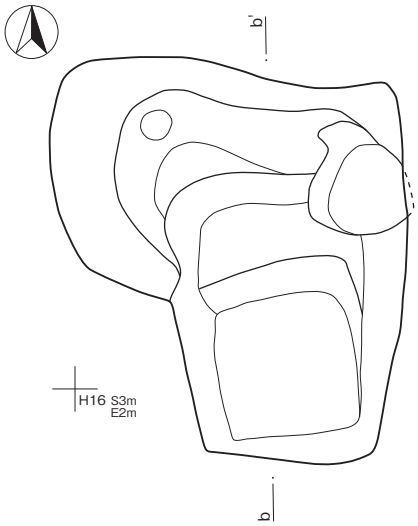
Ⅱ-18図　SU3542



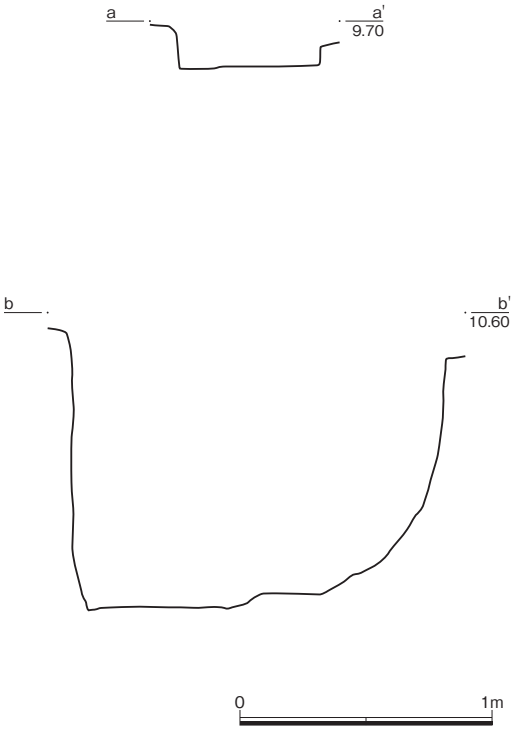
ST2095-1 人骨検出



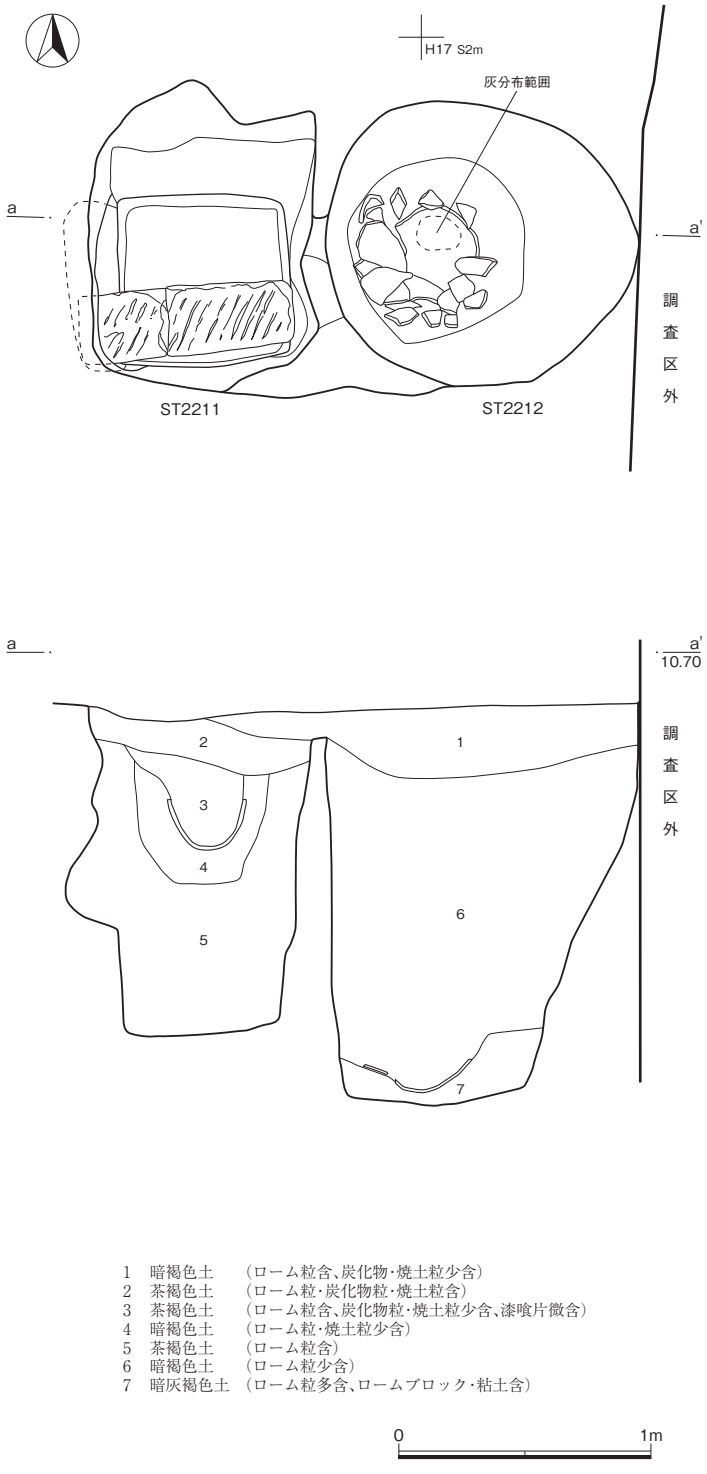
ST2095-2 人骨検出



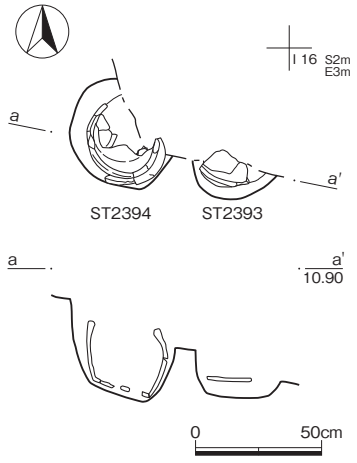
掘方



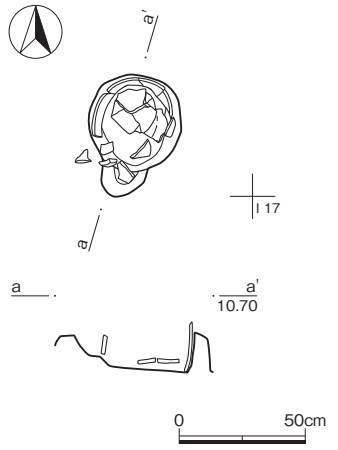
Ⅱ-19図　ST2095



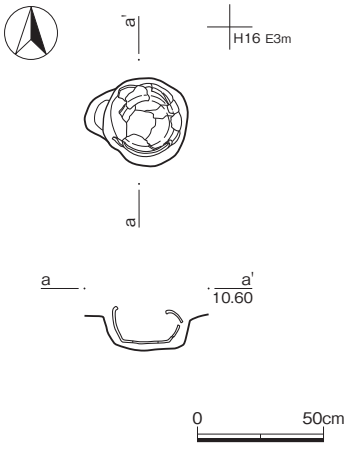
Ⅱ-20図　ST2211、ST2212



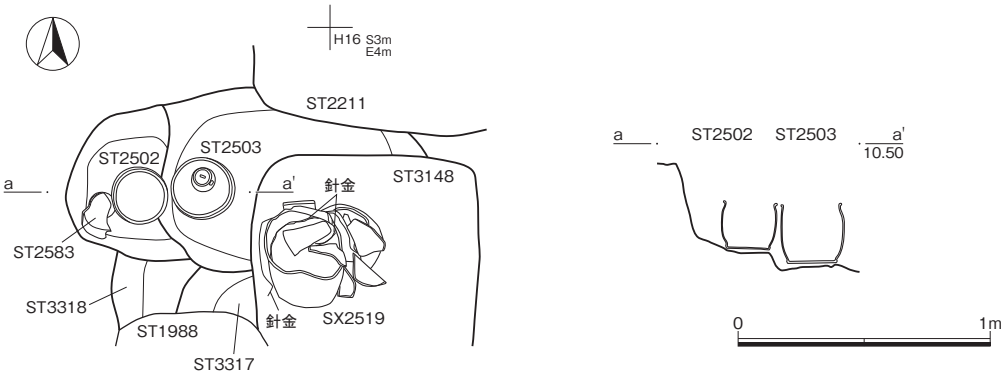
Ⅱ-21図　ST2393、ST2394



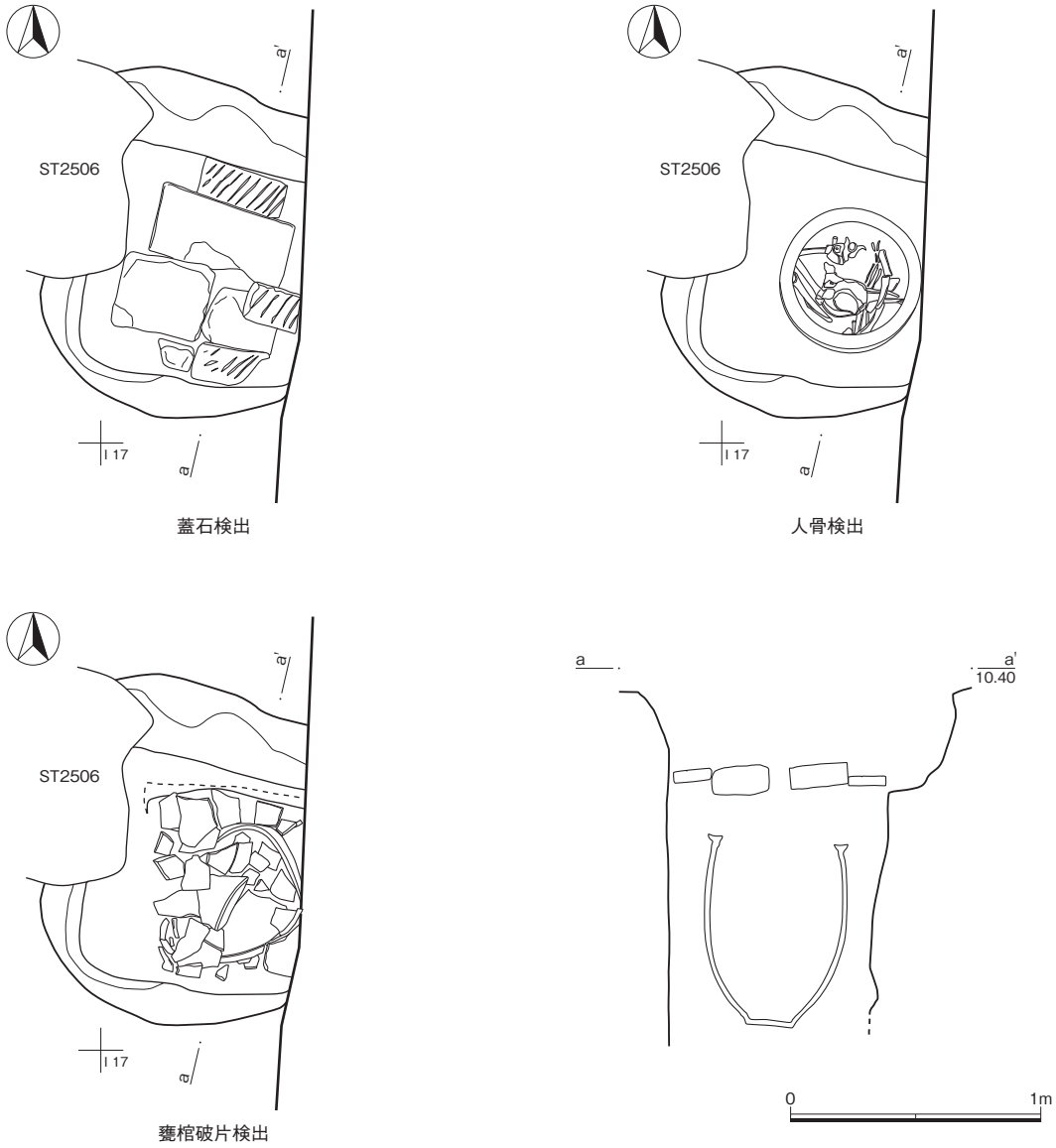
Ⅱ-22図　ST2406



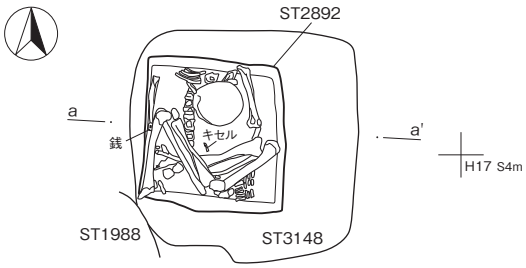
Ⅱ-23図　ST2424



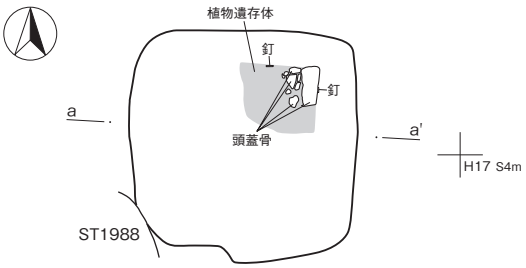
Ⅱ-24図　ST2502、ST2503、SX2519、ST2583、ST3317、ST3318



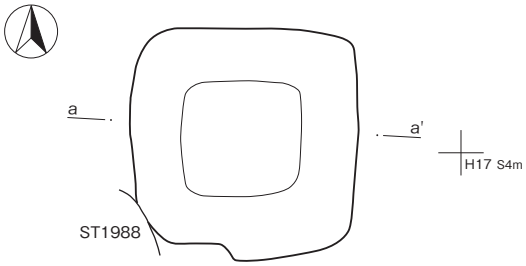
Ⅱ-25図　ST2584



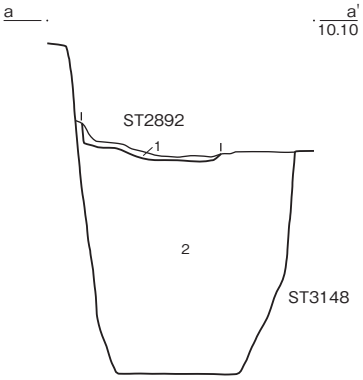
ST2892 人骨検出



ST3148 人骨検出



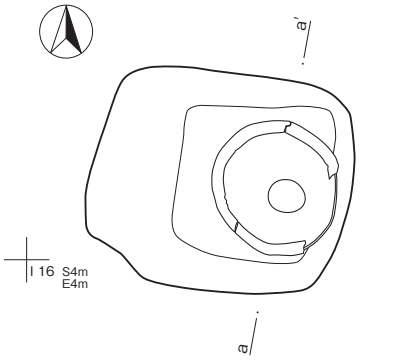
ST3148 掘方

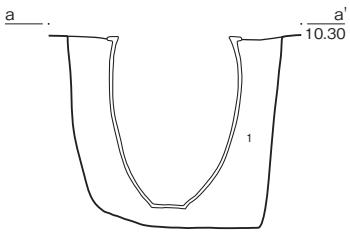


ST2892
　1　黒褐色土　（籾殻？しまりなし）
ST3148
　2　明褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含）

0　1m

Ⅱ-26図　ST2892、ST3148

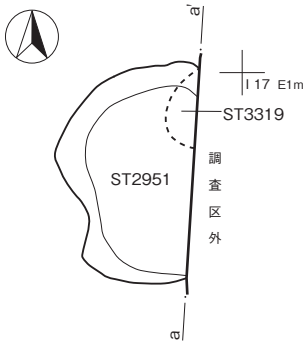


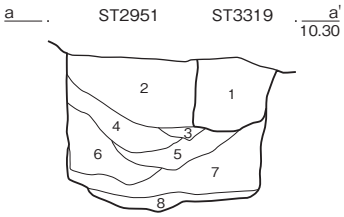


1　灰褐色土　（灰色粘土含、ローム粒少含、しまりなし）

0　50cm

Ⅱ-27図　ST2893

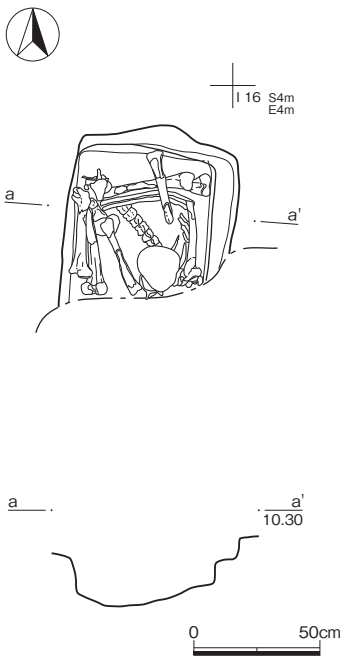




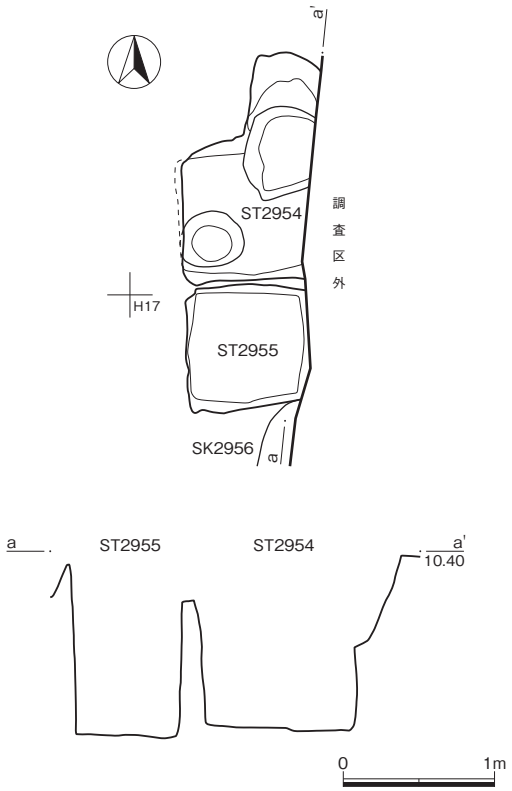
ST3319
　1　灰褐色土　（シルト多含、ローム粒含、炭化物・焼土少含）
ST2951
　2　茶褐色土　（炭化物やや多含、ローム粒・焼土・シルト含）
　3　灰色土　（シルト多含、炭化物・焼土少含）
　4　暗灰褐色土　（炭化物・焼土多含、シルト含、ローム粒少含）
　5　暗灰色土　（シルト多含、炭化物・焼土少含）
　6　茶褐色土　（ローム粒含、炭化物・焼土少含）
　7　灰褐色土　（シルト含、ローム粒・炭化物・焼土少含）
　8　茶褐色土　（ローム粒含）

0　1m

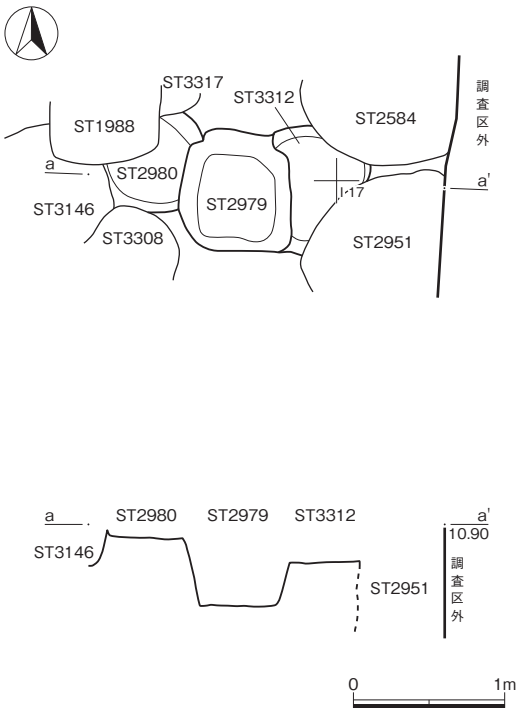
Ⅱ-28図　ST2951、ST3319



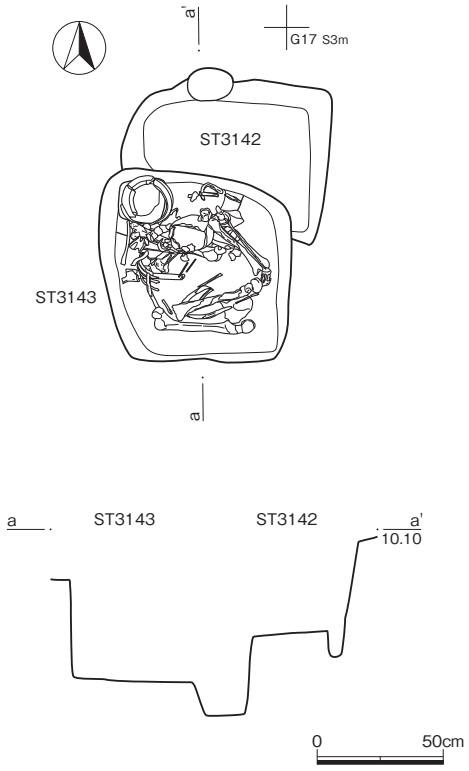
Ⅱ-29図　ST2952



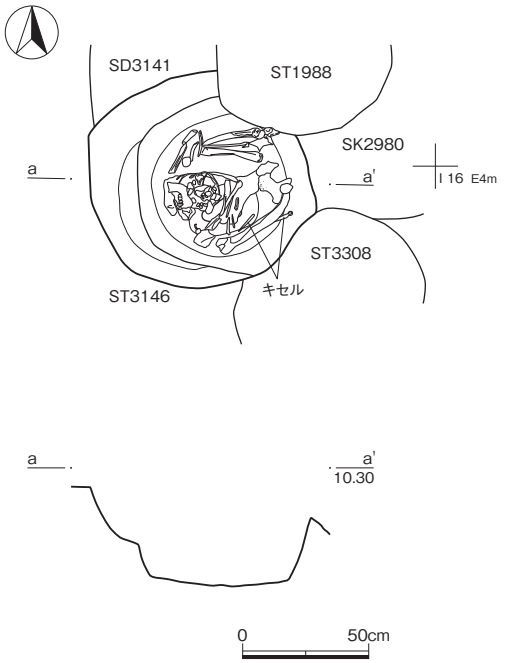
Ⅱ-30図　ST2954、ST2955



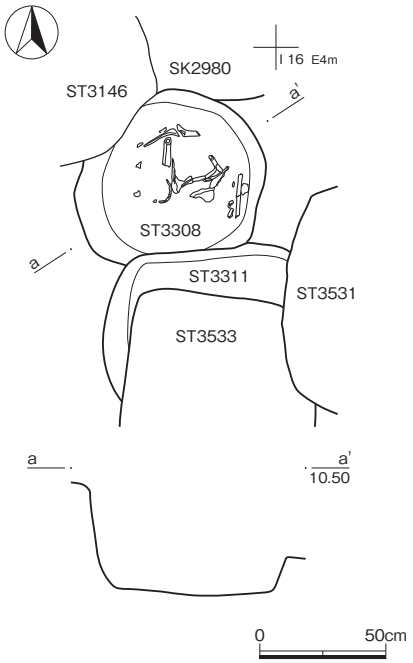
Ⅱ-31図　ST2979、ST2980、ST3312



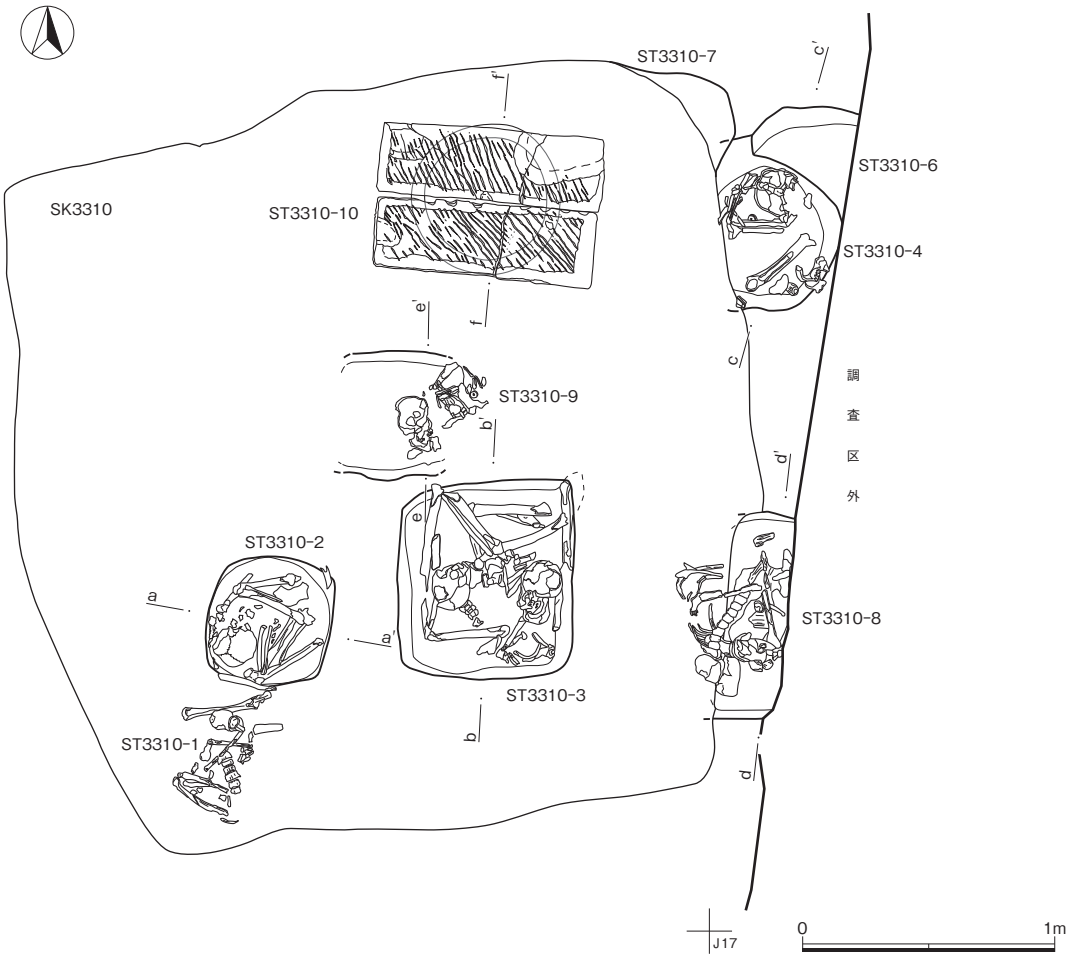
Ⅱ-32図　ST3142、ST3143



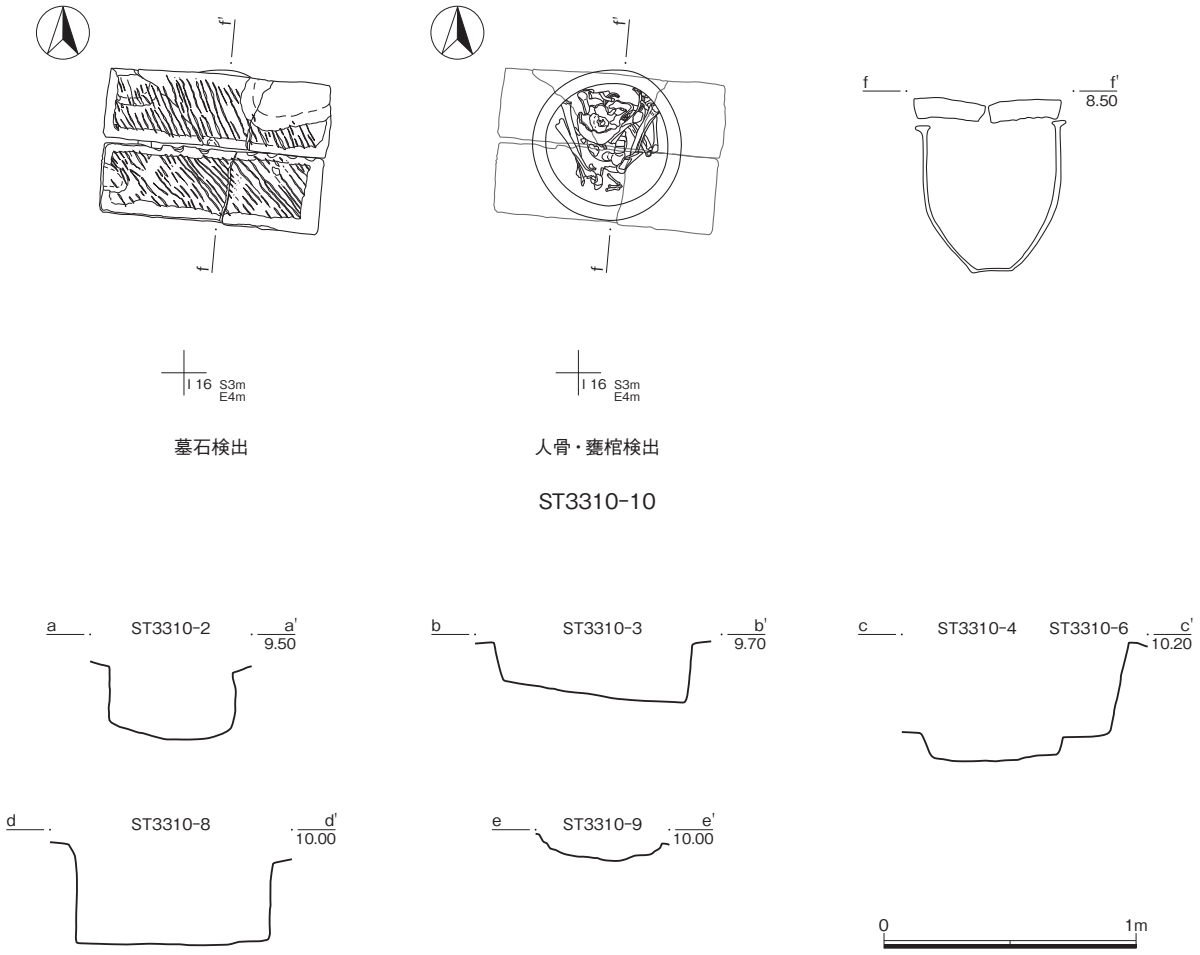
Ⅱ-33図　ST3146



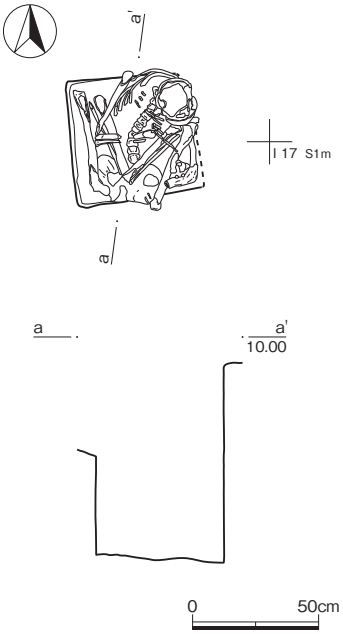
Ⅱ-34図　ST3308、ST3311



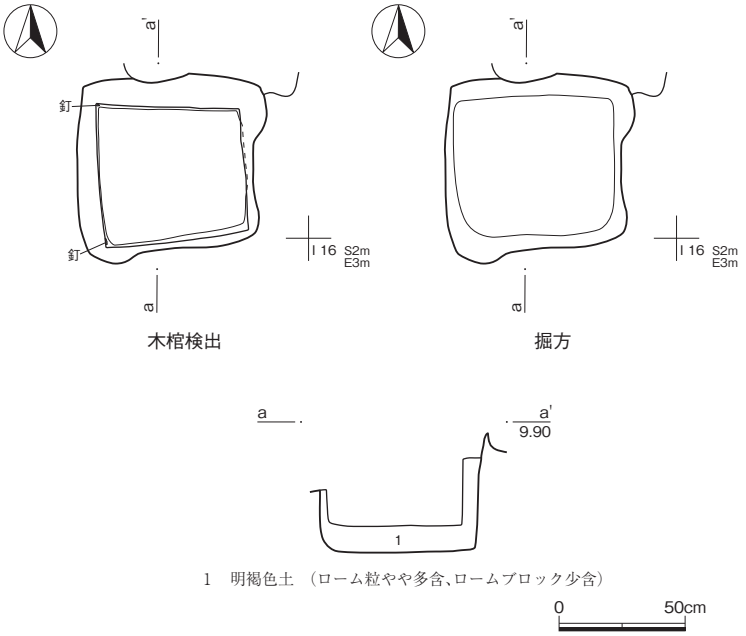
Ⅱ-35図　ST3310(1)



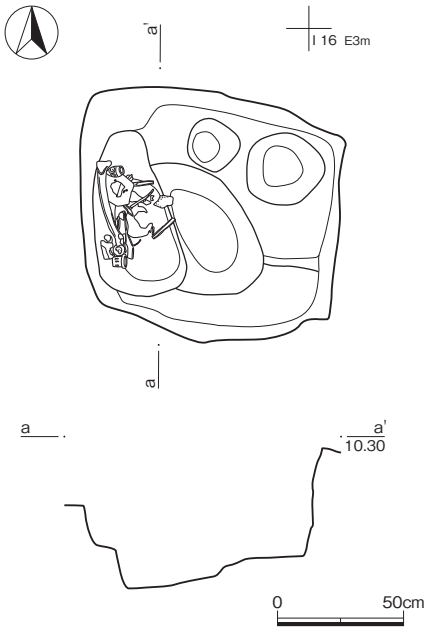
Ⅱ-36図　ST3310(2)



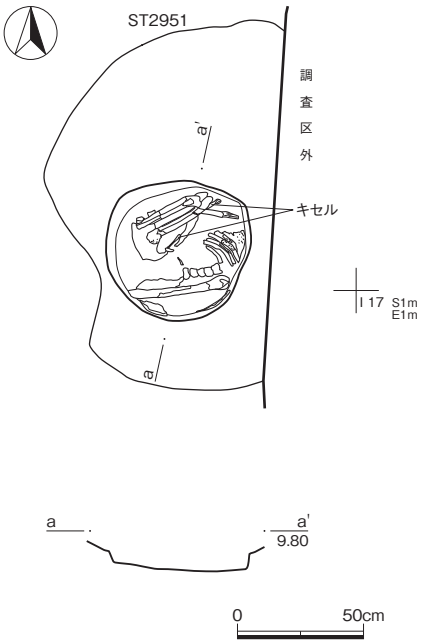
Ⅱ-37図　ST3320



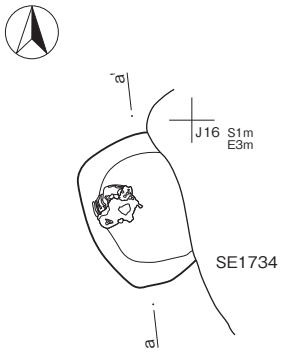
Ⅱ-38図　ST3321

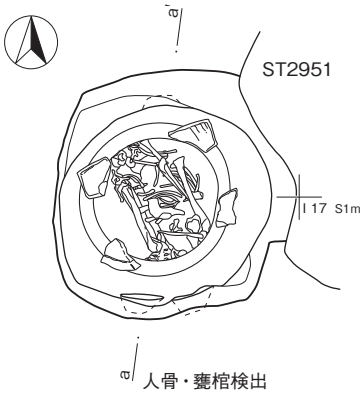


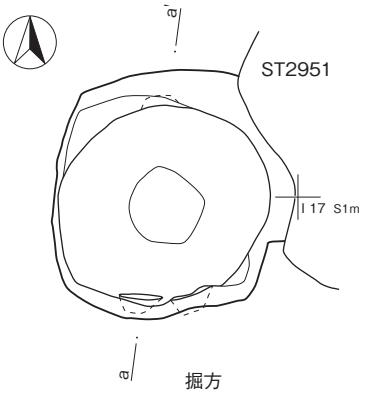
Ⅱ-39図　ST3441

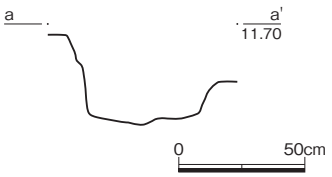


Ⅱ-40図　ST3526

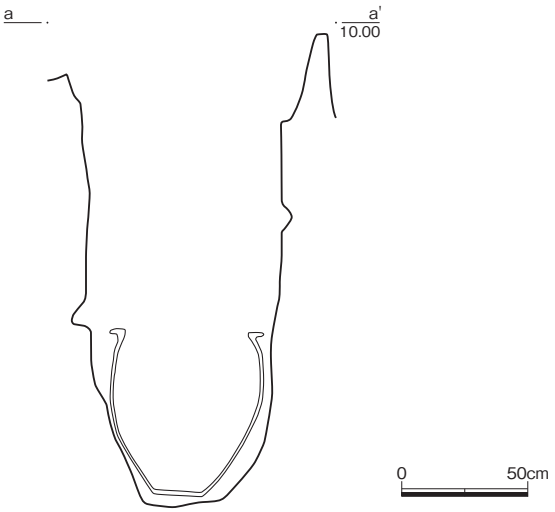




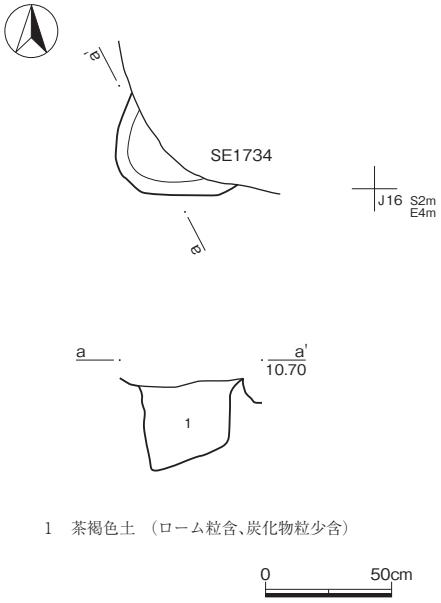




Ⅱ-41図　ST3529

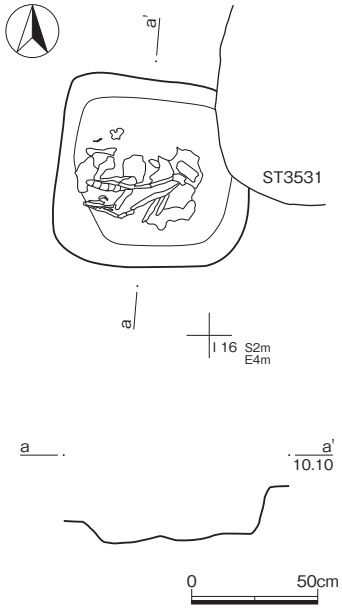


Ⅱ-42図　ST3531

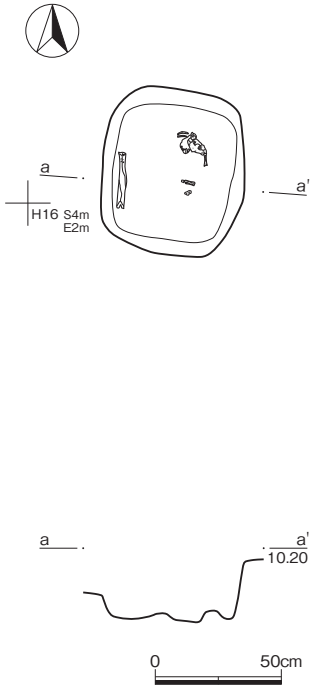


1　茶褐色土（ローム粒含、炭化物粒少含）

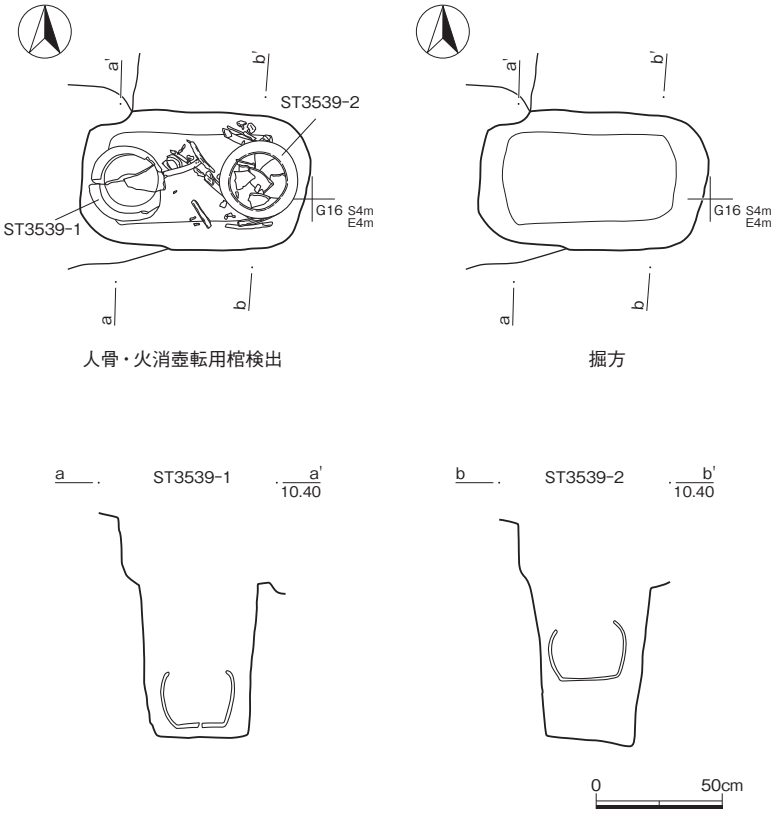
Ⅱ-43図　ST3532



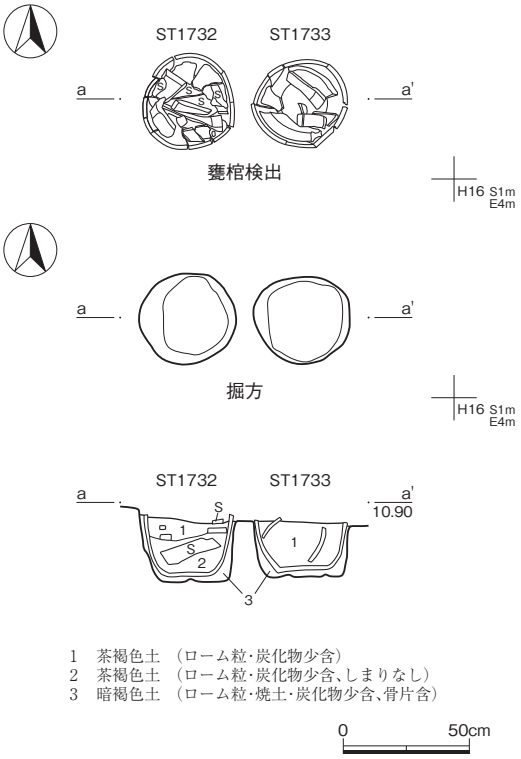
Ⅱ-44図　ST3533



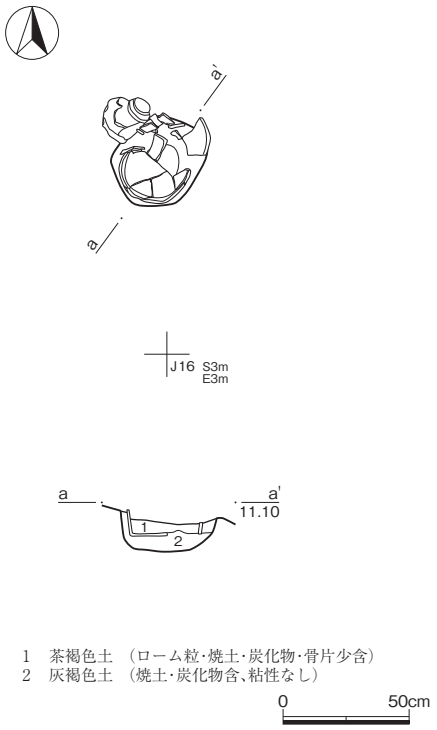
Ⅱ-45図　ST3534



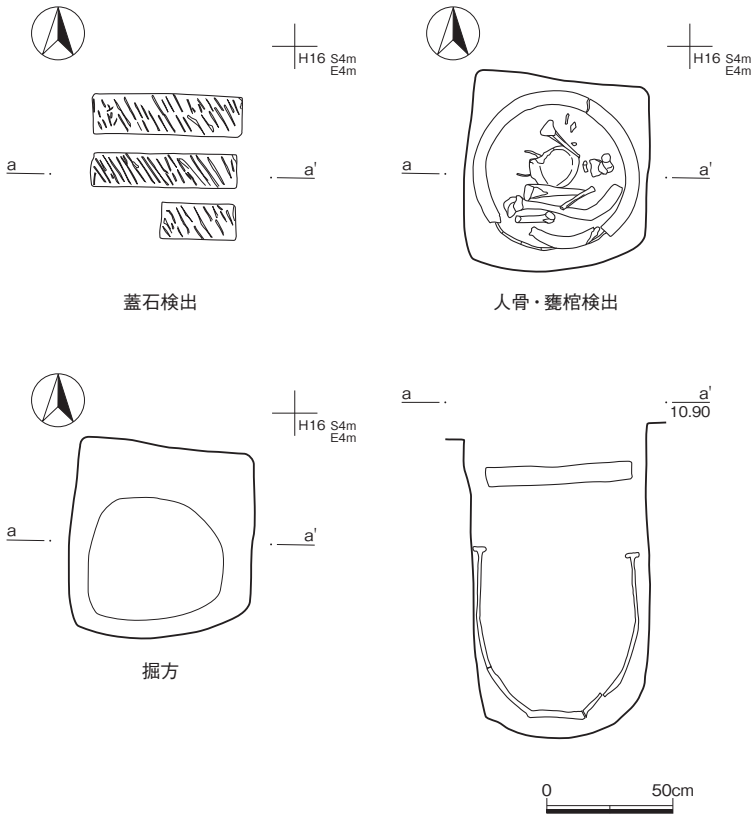
Ⅱ-46図　ST3539



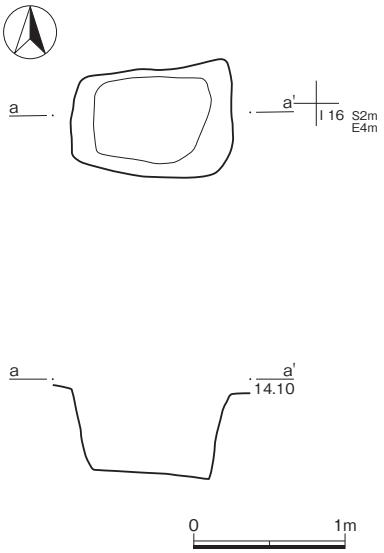
Ⅱ-47図　ST1732、ST1733



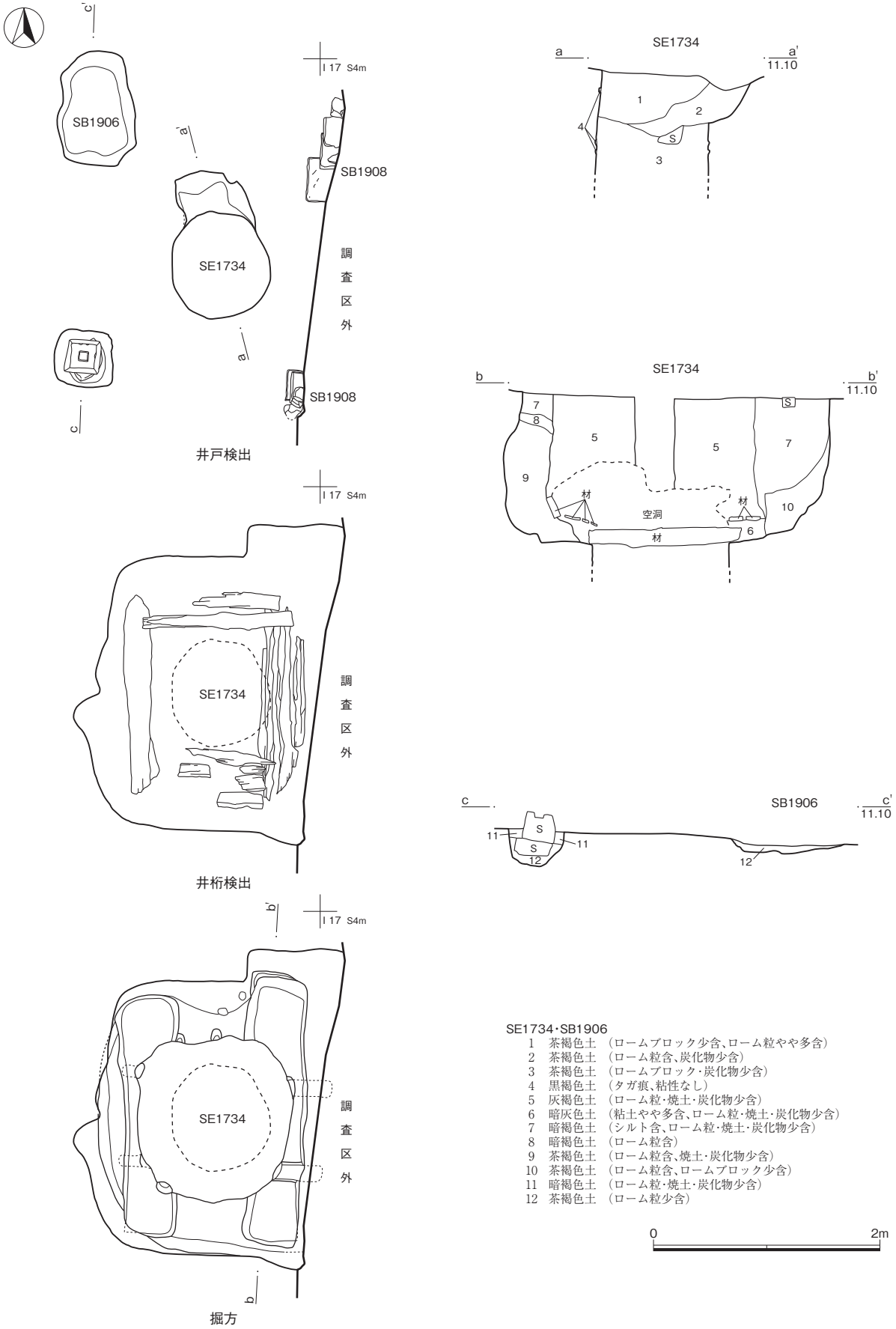
Ⅱ-48図　ST1839



Ⅱ-49図　ST1988



Ⅱ-50図　SK1905



Ⅱ-51図　SE1734、SK1906、SB1908

第Ⅲ章　2区の遺物

本地点からはA～Cの3遺構面が検出された。遺構の様相よりA、B面は、講安寺墓域段階、C面は富山藩借地段階に該当する。C面出土遺物は富山藩邸に関する資料で、SK3310出土資料が最も新しい様相を示す。B面出土遺物は、19世紀前～中葉に帰属する資料で、遺体収納容器および副葬品である。A面出土遺物は、明治段階と考えられる。包含層（C層）出土遺物は、調査区北側の埋没谷範囲で部分的に認められたC面形成のための包含層である。

第1節　埋葬施設出土遺物

ST1732（Ⅲ－1図）

1は甕棺として利用された甕で、TG-15に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色粒子を含み硬質である。体部は寸胴で、口縁部は内外面ともに張り出し縁帯を形成する。縁帯外面にはリンズによる連続押形文が施されている。また体上位には箍をイメージしたと考えられるヘラ彫りによる沈線文が施されている。口唇部平坦面には重ね焼きの遊離材として7箇所の目痕が認められる。底部を除き、施釉されているが、焼成不良のためか、やや白濁した暗黄緑色を呈する。ST1733、SG1586と接合。

ST1733（Ⅲ－1図）

1は甕棺として利用された甕で、TG-15に分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、白色砂粒を少量含み、硬質かつ緻密である。体部はほぼ寸胴形を呈するが、体中位がやや張り出している。口縁部は縁帯を有し、口唇部は内側にやや張り出している。縁帯にはリンズによる連続押形文が施されている。また体上位には箍をイメージしたと考えられるヘラ彫りによる沈線文が施されている。口唇部平坦面には重ね焼きの遊離材として長方形を呈する目痕が認められる。底部を除き、柿釉が施されている。口縁部縁帯上と縁帯直下に横方向の熔着痕が認められる。2は碁石状製品で、DQ_4004_Hに分類される。掌握痕が観察される。

ST2211（Ⅲ－1図）

1は甕棺として利用された甕で、TG-15に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含み硬質である。体部はほぼ寸胴形を呈するが、体中位がやや張り出している。口縁部は縁帯を有し、口唇部は内側にやや張り出している。縁帯にはリンズによる連続押形文が施文されている。文様は左から、雷文・菊花文・雷文・雲形文・雷文・雲形文を1単位としている。内面にはヨリコ成形による輪積み痕、指頭圧痕が認められる。口唇部平坦部には重ね焼きの遊離材として7箇所の目痕が認められる。

ST1988（Ⅲ－2図）

1は甕棺として利用された甕で、TG-15に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含み硬質である。体部はほぼ寸胴形を呈するが、体中位がやや張り出している。内面にはヨリコ成形による輪積み痕、指頭圧痕が認められる。口縁部は断面T字状を呈すが、内側張り出し部が貼り付けられたと考えられる。口縁部には焦茶色を呈するゴマ状の自然釉が生じている。また頸部には横ナデによる

調整痕が認められる。2はキセル。副葬品で甕棺内底部付近より出土した。吸口は伴っていない。雁首Ⅴ－2類。脂返しが別部品のように見えるが腐食のため確認できない。地金の色調は金色、溶接部は腐食のため地金の色調は不明。

ST2394（Ⅲ－2図）

1は埋葬容器として利用された土師質火消壺で、DZ-31-iに分類される。撹乱により約1/2を欠損する。口径対器高比は1:0.94と、器高が低い器形である。胎土は橙褐色を呈し、金雲母を微量に含む。底部にはチヂレ目が認められ、体部は内外面ともに横ナデによって丁寧に整形されている。

ST2212（Ⅲ－3図）

1～3は副葬品と考えられるが、改葬時の埋め戻し土より出土した。1は刷毛目端反碗で、TZ-1に分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密でやや硬質である。内面全体に白泥を施し、外面は横刷毛目を施した上に透明釉が掛けられている。2は灰釉二合半徳利で、TC-10-cに分類される。胎土は灰白色を呈し、白色粒子を含み硬質である。口縁部は縁帯を呈し、口唇部は外側から削られ、断面三角形を呈す。口唇部の釉は剥落している。釉はやや緑味を帯びた灰釉が、つけ掛けによって底部を除き掛けられている。体部には列点状の釘書きで、三鱗文が書かれている。3は瓦質製の蓮華座と考えられる製品である。胎土は暗灰褐色を呈し、金雲母微粒子を含む。型押し成形によってドーナツ形に作られ、表面には三重の蓮弁文が巡る。4は甕棺として利用された甕で、TG-15に分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、白色砂粒を含み硬質かつ緻密である。体部はほぼ寸胴形を呈し、頸部でクランク状に窄まり、口縁部はL字状に外反する。口唇部平坦面には円形状の目痕と、刻印が認められる。外面には鉄泥が施されている。

ST2406（Ⅲ－4図）

1は埋葬容器として利用された土師質火消壺で、DZ-31-iに分類される。胎土は淡褐色を呈し、金雲母微粒子を微量含む。底部にはチヂレ目、スダレ状圧痕が観察され、扁平ドーム状の脚が貼り付けられている。体部は内外面ともに横ナデによって丁寧に調整されている。2は土師質火消壺の蓋である。1の蓋である。胎土は淡褐色を呈し、金雲母微粒子を微量含む。上面にはチヂレ目、スダレ状圧痕が観察され､外側面は横ナデによって丁寧に調整されている。上端は特に丁寧で光沢を発している。内面にはスス痕が認められる。

ST2424（Ⅲ－4図）

1は埋葬容器として利用された土師質火消壺で、DZ-31-iに分類される。胎土は淡褐色を呈し、金雲母微粒子を微量含む。底部にはチヂレ目、スダレ状圧痕が観察され、扁平ドーム状の脚が貼り付けられ、脚の周囲は指ナデによって調整されている。体部は内外面ともに横ナデによって整形されている。内面上半部はやや黒ずんでいる。2は土師質火消壺の蓋である。1の蓋である。胎土は淡褐色を呈し、金雲母微粒子、白色砂粒を微量含む。上面にはチヂレ目が観察され、外側面は横ナデによって丁寧に調整されている。上端は特に丁寧に調整されている。内面にはスス痕が認められる。

ST2502・2503・2583（Ⅲ－5図）

1、2は埋葬容器として利用された柿釉甕で、TC-15-bに分類される。胎土は黄白色を呈し、白色

粒子を含み硬質である。1の内底部には不整楕円形状の目痕が5箇所認められる。底部を除き柿釉が施され、体上部には鉄釉流し掛けのアクセントが3箇所認められる。頸部には銅製の針金が三重に巻かれ、それを二重に撚りループを作った針金が4箇所巻き付けられている。ループに紐を通し、十字状に蓋を押さえていたものと推定される。2は1より一回り大きな製品で、内底部には不整楕円形状の目痕が6箇所認められる。底部を除き柿釉が掛けられ、体上半部には、鉄釉流し掛けのアクセントが2箇所認められるが、いずれも非常に薄い。頸部には1と同様、銅製の針金が二重に巻かれ、それを二重に撚りループを作った針金が2箇所巻き付けられている。3は2の中に納められた二耳壺で、TC-15-fに分類される。胎土は黄白色を呈し、白色粒子を含み硬質である。最大径は体上部にあり、体下半分にヘラ削りが施されている。肩部には橋状把手が2箇所貼り付けられている。口唇部から体下半にかけて灰釉が施され、口唇部から口縁部内側にかけて拭き取られている。4は壺・甕の蓋で3に伴う。裏面には回転糸切り痕が認められる。表面中央には粘土紐による橋状把手が貼り付けられている。釉は表面にのみ灰釉が掛けられている。5は袋状を呈する土師質鉢で、DZ-5に分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母が極微量含まれる。底部には左回転の糸切り痕が認められる。また江戸式かわらけと同様の腰折れ状痕が認められる。

ST2584（Ⅲ－6、7図）

1、6は大甕で、TG-15に分類される。1は人骨が収納されていた甕棺。6は改葬され1の下層より破片状態で出土した甕棺、1より古い。1の胎土は橙褐色を呈し硬質である。体部は寸胴形を呈し、頸部でクランク状に屈曲し口縁は外反する。口唇部には焦茶色を呈するゴマ状の自然釉が掛かっている。また口唇内端部には重ね焼きの遊離材圧痕が認められる。内体部にはヨリコ成形による輪積み痕と指頭圧痕が認められる。体下位には重ね焼きによる環状痕、遊離材圧痕、熔着痕が認められる。6の胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含み硬質である。体部は膨らみを帯びて立ち上がり、最大径は中位付近にある。口縁部はT字状を呈するが、内傾している口唇部内端に重ね焼きの遊離材剥離痕が認められる。また体中位付近には重ね焼きの遊離材圧痕が認められる。内体部にはヨリコ成形による輪積み痕、指頭圧痕が認められる。2は埋葬容器として利用された土師質火消壺で、DZ-31-iに分類される。胎土は淡橙褐色を呈し、金雲母を微量含む。底部にはチヂレ目とスダレ状圧痕が認められ、円錐台形状の脚が3箇所貼り付けられている。内外面とも全体的に横ナデによる調整が施されているが、内面下部には輪積み状痕が、上部には指頭圧痕が認められる。また口縁部は布ナデによって丁寧に調整されている。3は裃を着けた人物で、DZ_1110_M2fに分類される。胎土は灰白色である。4は恵比寿で、DQ_1102_M2e分類される。内面は指頭押圧痕が顕著で、彫りは深い。5は猫で、DQ_1208_M2eに分類される。1の脇、覆土中より出土しており、6の副葬品の可能性もある。ガラガラ状になっている。合わせ目は丁寧にナデ調整している。

ST2892（Ⅲ－7図）

1はキセル。遺体の腰周辺より出土している。1aは吸口Ⅴ－2類。吸口と肩が一体で成形されている。肩の断面は6角形、腐食のためすべての面の文様は確認できないが、横方向の細沈線と、斜め45°の細沈線が交互に彫金されている。ラウが残る。1bは雁首Ⅴ－2類。油返しと肩が一体で成形されている。肩の断面は6角形、腐食のためすべての面の文様は確認できないが、横方向の細沈線と、斜め45°の細沈線が交互に彫金されている。首部の溶接は吸口側から見て右側にある。ラウが残る。1a、1bともに地金の色調は金色。溶接部の色調は腐食のため不明。2は明和期、寛永通宝四文銭と思われる。

遺体に向い左側より出土した。銭貨はこの１枚のみである。

ST2951（Ⅲ－７図）

改葬時の埋め戻し土より出土した遺物である。1 は狛犬で、DD_1201_M2f に分類される。台座は型成形である。鬣（たてがみ）、尾は緑色、台、目、眉は焦茶色で描き施釉している。2 はキセル。2a は雁首Ｖ－２類。油返しと肩が一体で成形されている。肩には縦方向に沈線が施されている。肩の下側の表面、腐食部に布状の痕跡が認められる。キセルを包んでいた布が金属の腐食と一体になったものと考えられる。首部の溶接は吸口側から見て右側にある。2b は吸口 V-2 類。吸口と肩が一体で成形されている。肩には縦方向に沈線が施されている。腐食部に布状の痕跡が認められ、キセルが包まれていた布が金属の腐食と一体になったものと考えられる。2a・2b ともに地金の色調は金色、溶接部は腐食のため地金の色調は不明。ラウが残る。

ST2893（Ⅲ－８図）

1 は甕棺として利用された大甕で、TG-15 に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含み硬質である。体中位でわずかに膨らみを持つが、寸胴形に近い。口縁部はＴ字状を呈し、頸部は横ナデによって調整されている。口唇部上面には焦茶色を呈するゴマ状の自然釉が掛かっている。また内端部には重ね焼きの遊離材熔着痕が認められる。内体部にはヨリコ成形による輪積み痕と指頭圧痕が認められる。3、4 は腰周辺より出土した。

ST3143（Ⅲ－８図）

1 は火葬骨収納専用器と考えられる硬質瓦質壺で、DZ-15-a に分類される。胎土断面は暗褐色を呈し、金雲母を微量含む。ロクロ水引き成形によって作られ、器壁は体中位で約 5mm と薄い。底部はヘラ削りによって整形されている。体部は縦方向に肩部から口縁部にかけては横方向に丁寧に磨かれ、光沢を放っている。2 は 1 の蓋である。1 よりはやや焼成不良で、胎土断面は暗褐色を呈し、金雲母を含む。上面は同心円状に、外側面は横方向に丁寧に磨かれ、光沢を放っている。3 と 4 はともに棒状の製品で長さ、太さはほぼ同じで対の製品と考えられる。この状態の製品なのか、附属部品があったのかは不明である。錆を除去した地金の色調は赤銅色である。

ST3146（Ⅲ－９図）

1 はキセル。右大腿骨上より出土した。右手に添えていた可能性がある。1a は雁首Ｖ－１類。彫金で文様が刻まれているが腐食のため文様は不明。腐食部に布状の痕跡が認められる。キセルを包んでいた布が金属の腐食と一体になったものと考えられる。首部の溶接は吸口側から見て右側にある。油返し上部に敲打による凹みがある。地金の色調は金色、溶接部は腐食により地金の色を確認できない。ラウが残る。1b は吸口Ｖ－２類。彫金で文様が刻まれているが腐食のため文様は不明。腐食部に布状の痕跡が認められる。キセルを包んでいた布が金属の腐食と一体になったものと考えられる。地金の色調は金色、溶接部は腐食により地金の色を確認できない。ラウが残る。

ST3310-9（Ⅲ－９図）

1 は四ッ寶銭広永型、2 はⅢ期に属する不旧手である。3 ～ 5 はＶ期に属する新寛永通宝である。4 は背文に「元」が記されており、元文十万坪銭類と思われる。文献での鋳銭開始期は 1741 年。3

は虎ノ尾寛型、5は元文期足尾銭類である。

ST3310-10（Ⅲ－9図）

1は甕棺として利用された大甕で、TG-15に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含む。体部は膨らみを有し、最大径は中位よりやや上方にある。内体部にはヨリコ成形による輪積み痕、指頭圧痕が認められる。外面、頸部下に○と、その左下方、胴下半部に逆位に書かれた∧三の墨書が認められる。また内体部上部には樒と考えられる葉痕が多数認められる。

ST3320（Ⅲ－10図）

1は福助で、DQ_1118_M2eに分類される。型抜きは甘く粗い。手に扇子を持っている。2は牛で、DD_1207_M2fに分類される。キラが顕著である。3はミニチュアの瓶で、DD_2005_Wに分類される。口縁部は厚く算盤珠状で、緑釉で笹の文様を二箇所施している。底部は釉を剥いでいる。

ST3321（Ⅲ－10図）

1はいわゆる腰銹碗で、TC-1-uに分類される。胎土は白色を呈し、硬質である。器高は4.8cmと低く、体部には3条の沈線が巡っているが、器高の低さからほぼ灰釉部分に含まれている。2は狆抱き童子で、DD_1130_M2eに分類される。中空であるが空間は薄く少ない。童子と狆の目、斑は焦茶色で描き施釉、童子の着物の所々を緑釉で装飾している。舐り（ねぶり）人形といわれている。

ST3441（Ⅲ－10図）

改葬され墓壙脇に整理された人骨と伴に出土した。

1はミニチュアの瓶で、JB_2005_Wに分類される。簡略された鮹唐草文様、胴部、高台脇に圏線を描いている。畳付は広く釉剥ぎされ、砂粒が観察される。口縁部は僅かに外反、高台はハの字形である。2は人物で、DQ_1100_Hfに分類される。胎土は灰黄色で簡素な作りである。3～6はミニチュアである。3は土瓶で、DQ_2009_M2に分類される。全体を白色に塗彩後に梅花文様を桃色、赤で描き鉄釉で縁取りし透明釉を施し、最後に緑釉で葉を描いている。注口、把手は貼り付けている。4は羽釜で、DQ_2011_M2に分類される。内部口縁部下、貼り合わせた鍔部をナデ調整をしている。5は七輪で、DZ_2014_Mに分類される。上部と胴部は別作りで貼り合わせている。胎土は灰色を呈している。サナ部は6箇所穿孔を施し、火を表現して赤色に塗彩している。胴部は二枚の型で貼り合わせ作成し、6区画に割り付けし同様の文様を施す。風口部は成形後開口し縁を貼付している。丁寧な作りである。6は竈で、DQ_2016_Mに分類される。竈は台付きの角形で、焚き口は2つである。煮炊き道具をのせる孔は成形後に穿っている。指頭押圧痕が観察される。

ST3526（Ⅲ－10図）

1はキセル。右上腕骨周辺より出土した。右手に添えていた可能性がある。1aは雁首Ⅴ－1類。脂返し上部に敲打による凹みがある。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部は腐食により地金の色を確認できない。ラウが残る。1bは吸口Ⅴ－2類。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。ラウが残る。

ST3531（Ⅲ－11図）

1 は甕棺に利用された大甕で、TG-15 に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含む。体部は膨らみを有し、最大径は中位やや上方にある。口縁部は T 字状を呈する。内体部にはヨリコ成形による輪積み痕、指頭圧痕が認められる。外体部下部には重ね焼きによる環状痕と遊離材圧痕が認められる。底部に、＼三の記号が墨書されている。

ST3539（Ⅲ－12 図）

1、3 は埋葬容器として利用された土師質火消壺で、DZ-31-i に分類される。1 は ST3539－1 に使用された製品で、胎土は橙褐色を呈し、金雲母を含む。底部にはチヂレ目とスダレ状圧痕が認められ、扁平ドーム状の脚が 3 箇所貼り付けられているが、その直径は 15mm と非常に小さい。口縁部は布ナデによって丁寧に調整され、若干光沢を放っている。3 は ST3539－2 に使用された製品で、胎土は橙褐色を呈し、金雲母微粒を含む。底部にはチヂレ目とスダレ状圧痕が認められ、扁平ドーム状の 3 足が貼り付けられている。底部端はヘラ削りによる面取り調整が施されている。外面はナデによって丁寧に調整されており、内面には回転ナデ調整が認められる。2、4 は火消壺の蓋である。2 は 1 の蓋で、胎土は橙褐色を呈し、金雲母微粒を含む。表面全面にチヂレ目が認められ、中央に貼り付けられた釦状の摘み周囲はナデによる調整が施されている。外側面、内面は横ナデが施されている。4 は 3 の蓋で、胎土は橙褐色を呈し、金雲母微粒を含む。表面全面にチヂレ目が認められ、中央の釦状摘み周囲はナデによって調整されている。外側面と内面は横ナデによって調整されている。

第 2 節　遺構出土磁器・陶器・土器

SE1734（Ⅲ－13 図）

1 ～ 8 は覆土中出土資料である。1 は仏飯器で、JB-8-a に分類される。見込みには釉飛びが認められ、全体に貫入が入っている。底部無釉。体部外面に蔓文が描かれているが、発色は悪い。2 は仏飯器で、JB-8-b に分類される。体部は腰が張って立ち上がる。外面に斜格子文が描かれている。3 は青磁香炉で、JB-9 に分類される。体部下半は袴腰状に張り出し、口縁部は外曲する。青磁釉は淡青色を呈する。4 は御室碗で、TC-1-d に分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質である。高台はシャープに削られ、断面長方形を呈す。底部を除き灰釉が掛けられ、全体に細かい貫入が入る。体部上半に呉須による文様が描かれている。5 は小杉茶碗で、TD-1-d に分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。高台内側は外傾し、畳付外側は面取りされている。体部文様は鉄絵によって描かれている。6 は水滴で、TD-19 に分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質かつ緻密である。体部には S 字状の注口が、口縁部 1/2 弱には水止めの蓋が貼り付けられ、表面には型紙による花文と「木山」銘が同素地で摺絵されている。7 は板作り塩壺の蓋で、DZ-00-c に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を多量に含む。内面には布目圧痕が認められる。8 は人物で、TD_1100_M20 に分類される。片膝を立て、片手を地に着けた童子像で、着物と羽織に金と赤で文様を描いている。髪、目、沓は黒色で描いている。掲げた手に小さな穿孔があり、手に何か持っていたと思われる。底部は開口している。9 は掘方出土資料である。白磁蓋物の蓋と考えられる。外端部の鍔は短く、受けはやや内傾している。摘み欠損。

SK1905（Ⅲ－13 図）

1 は硬質瓦質壺で、DZ-15-a に分類される。底部はベタ底でチヂレ目痕が認められ、外縁部がナデ調整されている。底部脇は面取りされ、体部は緩やかに開きながら肩部に至る。肩部までは立て方向

のミガキが、肩部から口縁部にかけては横方向のミガキによって平滑に整形されている。内面はロクロ目が顕著に認められる。2は硬質瓦質壺の蓋である。無摘の蓋で、フリスビー形を呈する。表面は横方向のミガキで丁寧に調整されている。3～5は小形の硬質瓦質壺で、DZ-15-aに分類される。左回転のロクロ水引き成形によって成形されている。底部の糸切り痕はケズリ取られ、3では外縁部にナデ調整が施されている。肩部までは立て方向のミガキが、肩部から口縁部にかけては横方向のミガキによって平滑に整形されている。内面にはロクロ目が顕著に認められる。蔵骨器として利用された可能性がある。

SX2519（Ⅲ－14図）

1は柿釉壺で、TC-15-bに分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。頸部には集合細沈線が認められる。底部を除き柿釉が施され、頸部から体下部にかけて鉄釉が流し掛けされている。内底部には5箇所の目痕が認められる。2は土師質火消壺で、DZ-31-iに分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母微粒を微量含む。底部にはチヂレ目とスダレ状圧痕が認められ、扁平ドーム状の3脚が貼り付けられている。体部は横ナデによって丁寧に整形されている。

SL3145（Ⅲ－14図）

1は泥面子で、DQ_4006_Mに分類される。人の顔を表現している。キラが顕著で胎土は粗い。2はミニチュアの筒形をした小さな瓶で、DQ_2005_M2に分類される。内外面を白色で彩色し、口縁部から外面にかけ緑色で上塗りをし施釉している。

SK3310（Ⅲ－15～18図）

本遺構は全ての墓坑より古く、墓域成立以前の廃棄遺構と位置付けられ、富山藩邸借地期の廃棄遺構と考えられる。年代的にはJB-1-v（9､10）､JB-2-m（16､17）などの粗製品､京焼風陶器（TB-1-b､c）、焼塩壺（DZ-51-j）が観られ、東大編年Ⅴ期に位置付けられる。

1～23は磁器。1～12は碗である。1は青磁染付碗で、JB-1-uに分類される。外面に青磁釉、内面に透明釉を掛け、見込みには二重圏線内にコンニャク印判による花文が描かれている。2は白磁碗で、JB-1-aに分類される。高台高は13mmと高く、内側は外傾する。畳付には砂が熔着している。釉には全体的に貫入が認められる。3は染付半球碗で、JB-1-fに分類される。外面は氷裂文で埋められている。見込みには同心円状の集合擦痕が認められる。漆継ぎによる補修痕が認められる。4～8は染付丸碗で、JB-1-gに分類される。4の釉は焼成不良のため白濁し、内面には貫入が認められる。外面には簡略化された雪輪草花文が描かれ、高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。5は器面色調が灰白色を呈し、内面には釉飛びが認められる。口縁部に雨降り文が巡らされている。6は器面色調が灰白色を呈し、釉には微細気泡が多量に含まれる。外面にはコンニャク印判によって文様が描かれている。7は器面色調が灰白色を呈し、外面に釉飛びが認められる。文様は八つ橋に梅樹文が描かれて、高台内には一重圏線内に崩れた「大明年製」銘が書かれている。8の胎土は灰褐色を呈し、器面も同様の色調を呈す。文様は扇形区画を描きその周囲に草花文が描かれている。高台内には一重圏線内に「渦福」銘が書かれいている。9、10は粗製の染付丸碗で、JB-1-vに分類される。9の胎土は灰白色を呈す。外面には簡略化された雪輪梅樹文が描かれ、高台内には一重圏線内に崩れた「大明年製」が書かれている。呉須の発色は悪い。10の胎土は灰白色を呈し、底部厚は8mmと厚い。畳付には砂が熔着している。外面には雪輪梅樹文が描かれている。11は染付丸碗で、JB-1-gに分類

される。器面色調は灰白色を呈し、釉には微細気泡が多量に含まれている。外面には唐草文が巡らされている。12 は白磁小碗で、JB-1-e に分類される。ほぼ全面に貫入が認められる。13 ～ 17 は皿である。13 は染付輪花皿で、JB-2-f に分類される。口縁部は外反し、8 単位の輪花を形成する。器面はやや青味がかり、見込みには副弁を有する手書き五弁花文が描かれ、内側面には 5 条の竹管により 3 単位の区画を形成し、竹葉、花文を描いている。裏文様には縁取りを有する如意頭形唐草文が描かれている。高台内には一重圏線内に「冨貴長春」銘が書かれている。14 は染付皿で、JB-2-s に分類される。胎土は灰白色を呈す。高台径は口径の約 1/2 で、高台断面は幅広の三角形を呈する。文様は見込み、内側面に草花文を描き、外面は無文である。15 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付皿のうち、高台径が小さいタイプで、JB-2-l に分類される。胎土は灰白色を呈し、全体的に器壁は厚い。口縁部はやや外反する。見込み中央にコンニャク印判による五弁花文が描かれ、内側面には蔓文が描かれている。16、17 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付皿のうち、高台径が大きいタイプで、JB-2- m に分類される。16 の胎土は灰白色を呈し、呉須の発色も悪い。見込みにはコンニャク印判による五弁花文が描かれ、内側面には草花文が描かれている。蛇ノ目釉剥ぎ部には重ね焼きによる環状熔着痕が認められる。17 は焼成不良の製品で、器面は黄白色を呈する。見込みにはコンニャク印判による五弁花文が描かれ、内側面には唐草文が描かれている。裏文様には折れ松葉が描かれている。18 は香炉と考えられる白磁製品で、JZ-9 に分類される。胎土は白色を呈し、ガラス質で光沢を有す。体部は砲弾形を呈す尖底状の器形で、獣面が陽刻された C 状を呈する 3 脚を有す。型打ち成形によって輪花を形成する口縁部が貼り付けられている。墓域期の混入の可能性がある。19 は青磁筒形香炉で、JB-9-e に分類される。底部蛇ノ目部と見込みを除き、薄青緑色を呈する青磁釉が施されている。ほぼ全体的に貫入が認められる。底部蛇ノ目部には環状熔着痕が認められる。20 は染付花生で、JB-22 に分類される。器形は鼓形を呈す。畳付幅は約 5mm を測り、両端は面取りされている。体部には梅、竹が描かれている。21 は染付瓶で、JB-10 に分類される。鶴首形の瓶で、口縁部は外反する。体部全面に唐草文が描かれ、高台内には銘が書かれている。22 は型押し成形による小坏で、JB-6-f に分類される。底部無釉で、高台周辺の露胎部には成形時のチヂレ目が認められる。見込みには折れ松葉が描かれている。23 は蓋物の蓋である。身掛かりの露胎部には砂が熔着している。表面には丸文を散らしている。

24 ～ 39 は陶器である。24 は京焼風陶器丸碗で、TB-1-b に分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。高台周囲にはヘラ削りによる縮緬状のチヂレ目が認められる。体部には楼閣山水文と推定される鉄絵文様が描かれている。25 は打刷毛目による端反碗で、TB-1-h に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、硬質かつ緻密である。外面は打刷毛目により蓮弁状文様を、内面は放射状にジグザグ状の刷毛目を施している。26、27 は京焼風陶器平碗で、TB-1-c に分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。26 は底部中央に「の」の字状のケズリを施し、その脇に「清水」銘が刻印されている。27 は底部中央に円形状のケズリを施し、その中に刻印が押されているが、印銘は不明である。28、29 はいわゆる御室碗で、TC-1-d に分類される。28 の胎土は黄灰白色を呈し、硬質である。底部を除き、透明釉が掛けられている。体部上半に呉須絵文様が描かれている。29 の胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。畳付はナデによって U 字状に整形されている。底部を除き、透明釉が掛けられている。体部には呉須絵文様が 2 箇所描かれている。30、31 はいわゆる腰錆碗で、TC-1-u に分類される。30 の胎土は灰褐色を呈し、硬質である。高台断面は長方形を呈し、高台内のケズリは外側よりやや浅い。体部は腰が張って立ち上がり、口縁部でやや外傾する。掛け分け部には渦巻き状の沈線が 3 条巡る。底部から体中位にかけてはほぼ無光沢の錆釉が薄く掛けられ、上位から見込みにかけては灰釉が掛けられている。31 の胎土は黄灰白色を呈す。高台内のケズリは外側よりやや深い。体部は腰が

張って立ち上がり、ほぼ直立する。釉掛け分け部には渦巻き状の3～4条の沈線が巡る。底部から体中位にかけて暗茶褐色を呈する鉄釉が施され、上位から見込みにかけてはやや緑味を帯びた灰釉が施されている。32は柿釉丸碗で、TC-1-agに分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。釉は畳付を除き施されている。混入の可能性あり。33は刷毛目皿で、TB-2-gに分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、砂粒を含みやや粗い。高台断面は逆台形状を呈し、畳付外側が面取りされている。見込みは重ね焼きのため蛇ノ目釉剥ぎが施され、露胎部には白泥が掛けられている。内側面には波状の刷毛目が施されている。34、35は灰釉摺絵丸皿で、TC-2-eに分類される。34の胎土は黄灰白色を呈し、白色砂粒を含む。見込みには菊花と蔓草を描いた鉄絵文様が摺絵されている。また目痕が3箇所認められる。35の胎土は黄白色を呈す。体部は高台脇から丸味を帯びて立ち上がるが、中位に明瞭な稜を有す。見込みには花文を描いた鉄絵文様が摺絵されている。36は灰釉小坏で、TC-6に分類される。高台内のケズリは浅く、底部厚は9mmを測る。底部を除き、灰釉が掛けられている。37は鉄釉筒形香炉で、TC-9-dに分類される。胎土は黄白色を呈し、白色砂粒を少量含み、きめ細かい。底部はベタ底で、粘土紐を摘んだ脚が貼り付けられている。体部は直立し、下半には半菊状のしのぎが施されている。口縁部は内側にやや張り出すY字状を呈しており、口唇部には著しい敲打痕が認められる。38は油受け皿で、TF-40に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色砂粒を含み、硬質である。底部から体部下半にかけてヘラ削りによって整形されている。見込みに貼り付けられた皿受けはやや内傾し、凸レンズ状の刳り抜きが2箇所認められる。釉は見込みから外体部上位にかけて錆釉が施されている。外体部には重ね焼きによる環状熔着痕が認められる。39は壺の蓋である。表面中央には乳首状の摘みが引き出されているが、非常に低い。無釉である。

40～48は土器。40～46はかわらけである。40は口径20cmを測る大形のかわらけで、DZ-2に分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母を微量含む。見込みには中央から階段状に高くなる同心円状の調整痕が認められる。41～46は左回転のロクロ水引き成形による製品で、DZ-2-bに分類される。胎土は淡橙褐色を呈し、金雲母微粒、暗赤褐色微粒を少量含む。41、46には灯心痕が認められる。44は見込みに人物、底部に文字が墨書されている。47は瓦燈の受け部で、DZ-45に分類される。胎土は淡褐色を呈し、暗赤褐色微粒を多量に含む。舌状突起は高さ3.5cmを測る。48は板作り成形による塩壺で、DZ-51-jに分類される。底部は内側からはめ込まれている。肩部下部には数条の沈線が巡る。二重角枠内に「泉州磨生」の刻印を持つ。

49～51、63はミニチュアの器物である。49は鉢で、DD_2003_Wに分類される。小礫、石英粒子を含む粗い胎土で、口縁部は内湾している。京都の「でんぼ」といわれているものに類似している。50は土瓶で、DQ_2009_Wに分類される。外面全体に黒褐色の低火度釉を施している。注口と把手は別作りで貼付している。51は茶釜で、DQ_2011_Wに分類される。過去、陶磁器・土器分類でDZ-5-cと分類されたものである。白色、赤色粒子を多く含む胎土である。鍔上の湾曲は大きく丸味があるもので、鍔から下の器高は低い。52は狆抱き童子で、DD_1130_M2oに分類される。ST3321（Ⅲ－10図）から同様の人形が出土している。53は西行で、DD_1109_Hoに分類される。荷、袖、手足、首部は別作りし貼付している。足は衣の裾を凹ませ貼付している。荷と衣の一部を鉄釉と緑釉で装飾している。54は岩に腰掛けた寿老人で、DD_1104_M2fに分類される。所々に緑釉を流し掛している。55は人物で奴か、TD_1100_Hfに分類される。鉄釉で家紋を描いている。貫入が観察される。56は坊主人形で、DD_1114_Heに分類される。SK557（第4分冊Ⅳ－366図37）から出土した人形と同様である。57は西行で、DQ_1109_M2fに分類される。58は朝鮮通信使で、DQ_1112_M2fに分類される。57、58の2点ともキラが顕著で、胎土に白色粘土や、赤色粒子が多く観察され、成形時の類似点が

観られる。59 はぶら人形で、DQ_1128_M2e に分類される。本来は別作りの手足が紙又は布で繋いであったものである。60 は恵比寿で、DQ_1102_M2f に分類される。全体の彫りが深く、キラが凹んだ箇所に顕著にみられる。右手には釣り竿を挿したと思われる穿孔が観察される。61 は力士、62 は鬼をモチーフとしたもので、DQ_4006_M に分類される。63 は蓋で、DQ_2013_M に分類される。キラと黒色痕が観察され、指頭圧痕が顕著である。花弁文様が施されている。SK3310 の人形、玩具類は 18 世紀前葉と 19 世紀前葉を中心とした 2 時期を含む遺物群である。

SK3316（Ⅲ－19 図）

1 は擂鉢で、TL-29 に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色砂粒を含み、硬質である。底部には幅 1cm を測る浅い沈線を巡らせ外周の高台を作出している。口縁部は 2 条の沈線を有す幅 4cm、断面台形の縁帯を有す。また口唇部に 1 条、口縁内側にも 1 条の沈線が巡る。擂目は 1 単位 5 条からなり、内側面の擂目上端は口縁下で揃えられ、下端は底体間で止まる。見込みは干の字状に引かれている。2 は泥面子で、DQ_4006_M 成形で、モチーフは将棋の駒である。他の泥面子とくらべ厚さは薄く、彫りは深く丁寧な作りである。

SK3715（Ⅲ－19 ～ 23 図）

本遺構は、C 面から検出され、墓域形成以前、富山藩借地段階に比定される。本資料は刻印を有する京焼風陶器が多く含まれるなど、17 世紀後葉の様相を呈しているが、JB-1-d（1、2）、TB-1-d の刷毛目碗（17）、コンニャク印判を有する JB-1-u（3）、TC-1-c（21）などの存在から、東大編年Ⅳ b 期に比定される一括資料といえる。

1 ～ 14 は磁器である。1、2 は染付丸碗で、JB-1-d に分類される。1 の外面には水鳥が描かれ、高台内には一重圏線が引かれている。2 の胎土は灰白色を呈す。外面には松、草花などが描かれ、高台内には一重圏線が引かれている。3 は染付丸碗で、JB-1-u に分類される。外面にはコンニャク印判による紅葉文を散らしている。高台内には一重圏線が引かれている。4 は漳州窯系の青花皿で、JA2-2 に分類される。胎土は焼成不良のため黄白色を呈し、釉もやや白濁している。高台断面は三角形を呈し、砂が熔着している。釉は高台内中央には掛けられていない。全体的に貫入が入り、釉飛びも認められる。5 は染付三寸皿で、JB-2-c に分類される。見込み文様は型紙摺りによって描かれている。同一製品が天和 2 年の火災廃棄層である C2 層からも出土している（第 4 分冊Ⅳ－307 図 643）。6 は染付二寸皿で、JB-2-r に分類される。高台は貼り付けによる輪高台で、体部は型打ち成形によって輪花を形成している。7 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付皿で、JB-2-k に分類される。焼成不良のため釉が白濁している。底部無釉。内側面に簡単な文様が描かれている。8 は丸碗形の鉢で、JB-5-b に分類される。口唇部に口銹が施されている。体上部には扇面にシダ状の蔓を描いた文様が巡っているが、輪郭など線書き部分を型紙摺りで描き、その上にダミをかけている。高台内には「宣真（年製）」銘が書かれている。9 は小鉢で、JB-5-f に分類される。型打ち成形によって口縁部は 4 単位の輪花を形成し、口銹が施されている。体部文様は七宝繋ぎ文により 4 単位に区画され、対になる 2 種類の花唐草文が描かれている。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。見込みには手書き五弁花文が描かれている。非常に丁寧な作りである。10 は端反形の染付小坏で、JB-6-b に分類される。高台脇と口縁部に二重圏線を巡らし、体中位に紅葉文を帯状に巡らせている。見込み、口縁部内側にも二重圏線が描かれている。漆継ぎによる補修痕が観察される。11 は端反形の白磁小杯で、JB-6-b に分類される。畳付内側には砂の熔着が認められる。12 は丸碗形の染付小杯で、JB-6-a に分類される。

高台内側には砂の熔着が認められる。外面には蝶などが描かれている。13は仏飯器で、JB-8-bに分類される。胎土は灰白色を呈す。焼成不良のため、釉は白濁し釉飛びしている。外面には簡素な唐草文が描かれている。14は花生で、JB-22に分類される。底部欠損。胎土は灰白色を呈す。内面口縁部以下は無釉である。呉須の発色はやや黒ずみ、簡素な草花文が描かれている。

15～33は陶器である。15は刷毛目碗で、TB-1に分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、白色砂粒を含み、硬質である。畳付、見込みに3箇所の砂目痕が認められる。高台断面は逆台形を呈し、高台から体下半部にかけて粗くケズリが施されている。体部はほぼハの字状に開き、口縁部で緩やかに外反する。内外面ともに横方向に白泥を刷毛目掛けしている。16は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。胎土は黄白色を呈す。畳付を除き施釉され、全体に細かい貫入が認められる。17は刷毛目丸碗で、TB-1-dに分類される。胎土は褐色を呈し、硬質である。内外面ともに渦巻き状の刷毛目が施されている。18～20は京焼風陶器丸碗で、TB-1-bに分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。高台内のケズリは浅く、中央に円圏ケズリを有す。18は円圏に重なるように「清水」銘が刻印されている。19は円圏に重なるように「清」銘が刻印されている。20は円圏に隣接して刻印が施されている。21は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色砂粒を少量含み、硬質である。底部を除き、やや青味を帯びた灰釉が掛けられている。22、23は平碗で、TD-1- hに分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。22は高台内に円圏ケズリを有し、高台断面は内側が外傾する逆台形を呈し、畳付外側が面取りされている。高台脇に「清閑寺」銘が刻印されている。被熱している。23は畳付を除き施釉され、見込みには銹絵染付によって竹が描かれている。24は青緑釉見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿で、TB-2-aに分類される。黄灰白色を呈し、緻密である。見込みには青緑釉が、外側面には透明釉が掛けられている。25、26は京焼風陶器皿で、TB-2-cに分類される。25の胎土は黄灰白色を呈し、緻密である。高台断面は長方形を呈し、畳付外側はナデによって丁寧に調整されている。内側のケズリは浅い。高台内には直径46mmの円圏ケズリが施され、中心には一重角枠内に篆書による「都」銘が刻印されている。底部を除き、細かい貫入を伴う透明釉が掛けられているが、見込みに若干の釉飛びが認められる。見込みには呉須によって楼閣山水文が描かれている。26の胎土は明褐色を呈し、緻密である。高台断面は長方形を呈し、畳付外側はナデによって丁寧に調整されている。高台内には直径49mmの円圏ケズリが施され、中央には二段角一重角枠内に篆書による「建」銘が刻印されている。釉は底部を除き、細かい貫入を伴う透明釉が掛けられているが、焼成不良のためやや白濁している。見込みには呉須によって楼閣山水文が描かれている。27は鉢で、TB-5に分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微砂粒を微量含む。比較的硬質である。高台断面は逆台形を呈す。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は強く内湾する。底部を除き、鉄釉が施されている。28は鉄釉小坏で、TC-6に分類される。胎土は白色を呈し、白色砂粒を微量含む。高台脇から体下半部にかけて渦巻き状に鋭く削られている。口縁部は外側がやや肥厚し内湾する。底部を除き、鉄釉が施されている。29は鉄釉香炉で、TC-9-bに分類される。胎土は黄白色を呈し、やや粗い。底部はほぼ平坦に削られ、円錐台形状の三足が貼り付けられている。体部はハの字状に開き、中位から口縁部にかけてS字状を呈す。底部を除き、黒斑を伴う鉄釉が施されている。30は鉄釉鉢で、TE-5に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、硬質かつ緻密である。底部は平底で左回転のケズリによって調整されている。体部は丸味を帯びて立ち上がり、体下半で屈曲し弓なりに直立する。さらに内湾して口縁に至る。体中位には糸目状の集合沈線が、上位内湾部には数条の沈線が施されている。口縁部内側から底部にかけて鉄泥が施され、底部には火襷が認められる。31～33は擂鉢である。31、32は、TC-29に分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。底部には右回転の糸切り痕が残る。31の

口縁部は外側にクランクして縁帯を形成する。また口唇部は内側に折り曲げられ、玉縁状を呈す。擂目は1単位12条からなり、上端はナデによって揃えられている。釉は器面全面に錆釉が掛けられ、底部付近は拭き取られている。見込み周囲と底部外端に重ね焼きのための団子痕が認められるが、潰れたためか外面には部分的に擂目痕が認められる。32の口縁部は外側にクランクして縁帯を形成する。口唇部には幅3cmの注ぎ口が設けられている。擂目は1単位10条からなる。見込み周囲と底部外端には重ね焼きのための団子痕が4箇所が認められる。釉は器面全面に錆釉が掛けられ、底部付近は拭き取られている。33は焼き締め擂鉢でTE-29に分類される。胎土は明茶褐色を呈し、硬質である。底部脇に貼り付けられた高台には、鉄泥施釉後に直径7mmを測る孔が穿たれている。口縁部縁帯断面は三角形を呈し、外面には2条の沈線を施し、内側には1条の隆帯が形成されている。擂目は1単位11条からなり、見込み中程まで引かれている。また見込みには放射状の擂目が付けられている。器面全面に鉄泥が施されているが、見込みから体中位にかけては摩耗し、胎土が露出している。高台から体下半にかけて火襷が、畳付外側には直重ねによる擂目痕が認められる。

34～46は土器である。34～45はかわらけである。34～36、38、39は、DZ-2-aに分類される。34、35、38は右回転のロクロ成形による製品である。34の胎土は橙褐色で、白色砂粒を含む。35の胎土は褐色を呈し、白色微粒を少量含む。被熱している。36は右回転のロクロ水引き成形で離れ糸切りによる製品である。胎土は橙褐色を呈す。灯心痕が認められる。38の胎土は褐色を呈す。糸切り痕は比較的疎である。39の体部はやや外反する。37、40～45は左回転のロクロ水引き成形による製品で、DZ-2-bに分類される。胎土は褐色～橙褐色を呈し、暗赤褐色含有物を含む。37、40、42には灯心痕が認められる。44は内面に、42は内外面ともにタール状付着物が認められる。45の底部中央には直径7mmを測る焼成前穿孔が施されている。また内面には墨書が認められる。46は瓦燈の身で、DZ-45に分類される。胎土は土師質で、外面は橙褐色、内面は黒色を呈す。蓋掛かりから派生する舌状突起は高さ9cmを測る。油皿置きにはヘラ書きが認められる。

47はミニチュアの染付碗で、JB_2001_Wに分類される。釉は厚く、山水文様が薄くぼんやりしている。畳付は釉を剥いでいる。僅かに砂粒が熔着している。 48は鴛鴦で、JB_1211_M2eに分類される。翼に朱色、緑色、目に金色が観察される。後方にある翼（銀杏羽）下と喉に穿孔が施されている。孔と接合部の内面に素地土を貼り付けて補強している。49は西行で、DQ_1109_M2oに分類される。開口した内面は篦の調整痕が観察される。

第3節　包含層（C層）出土磁器・陶器・土器（Ⅲ－24図）

1は端反形小杯で、JB-6-bに分類される。畳付には砂が熔着している。体下半に線書きによる鋸歯状文様が巡る。2は色絵油壺で、JB-12に分類される。胎土は灰白色を呈す。体部上半に、赤、青絵の具によって上絵付けされている。不動山3号窯跡などに観られる製品である。3は京焼風陶器丸碗で、TB-1-bに分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。高台内中央には円圏ケズリが施され、その脇に刻印が押されている。体部には楼閣山水文が描かれている。4は青緑釉丸碗で、TB-1-iに分類される。胎土は灰白色を呈し、緻密である。見込みには透明釉、底部を除く外体部には青緑釉が施されている。5は右回転によるロクロ成形のかわらけで、DZ-2-aに分類される。胎土は褐色を呈す。高台径が広く体部は内湾気味に立ち上がる。灯心痕が認められる。6は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。胎土は表面が淡褐色、内面が橙褐色を呈し、砂粒を含む。側面には焼塩生産時の二次火熱によると考えられる変色が認められる。

第4節　瓦（Ⅲ－25図）

1はSK3549出土の軒丸瓦である。瓦当部の下方のみ残存している。瓦当文様は幼剣梅鉢紋。2はSK3711出土の軒丸瓦である。瓦当部上方のみ残存している。瓦当文様は連珠三つ巴文。連珠は6箇所残存。

第5節　金属製品（Ⅲ－26図）

1はSK3315出土。刀柄の縁。鍛造した側板の上部に刀を嵌め込む部品が溶接されている。側板の溶接は反り側に施されている。側面は無文。漆と考えられる黒色の薄い膜に覆われている。側板と接続している部品の地金の色調は赤銅色。溶接部の地金の色調は腐食のため不明。2はSK3316出土。鉄瓶の口縁部。地金の色調は黒鉄色。3はSL3313出土。金具。何の部品かは不明。地金の色調は金色。4はSL3145出土。板状の金属。やわらかい金属で、地金の色調は銀色。5a・5bは遺構外出土。留め金具。5bは留め金具の差し込む側。板材を6本の鋲と溶接で接合している。金具の間には茶褐色の薄い膜が挟まっている。地金の色調は金色。5aは留め金具の受け側で鉤穴がある。板材を4本の鋲と溶接で接合している。鉤穴部分に折り曲げた板材が嵌っている。この板は5bの部品と考えられる。飾り穴の開いた部分に層状の茶褐色の膜2枚が挟まれている。金具に挟まれていた革の両面に塗られていたものが残ったものと考えられる。地金の色調は金色。溶接部の色調は銀色。

第6節　銭貨（Ⅲ－27～30図）

出土銭貨の分類基準などは第3分冊第9節銭貨の章を参照願いたい。

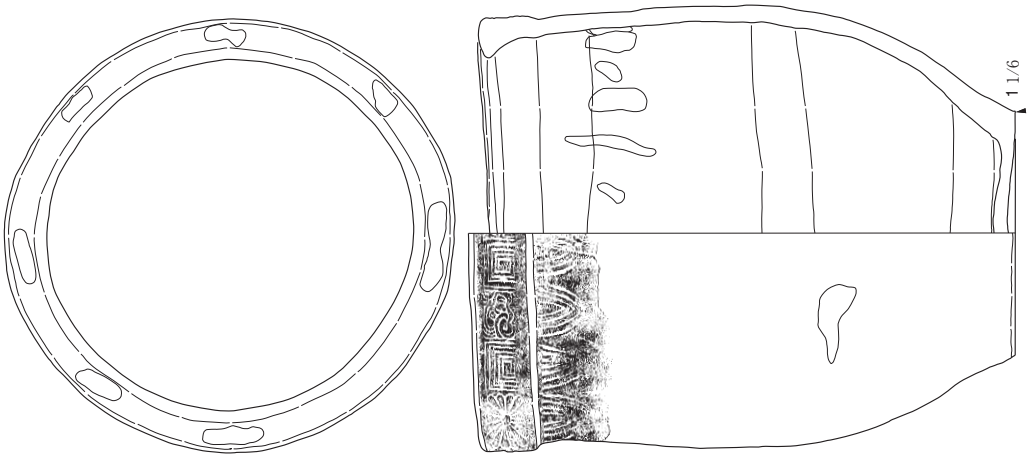
1～7はSK3310から出土している。遺構の廃絶年代は陶磁器分類Ⅳb～Ⅴ期が与えられる。1～4はⅡ期に属する新寛永通宝文銭である。1、2は正字背文型、4は中字背文型である。5はⅢa期、新寛永四ッ寶銭跳永型、6は元文十万坪銭類と思われる。7は小字背元型である。ともにⅤ期に属し、この遺構の年代下限近くの鋳銭期と思われる。

8～88はSB3544-1出土の銭貨である。柱穴列坑底から、差し銭の状態で検出された。埋納されていたと考えられる。出土総数は88枚である。内訳は渡来・模鋳銭4枚、Ⅰa期古寛永通宝17枚、Ⅰb期古寛永通宝10枚、Ⅱ期新寛永通宝文銭49枚、不明8枚である。Ⅲ期以降の新寛永通宝は出土していない。差しの状態は銭種、表裏の規則性は見いだせなかった。掲載順は遺存状態の悪いものを除き、順列に掲載した。8～34はⅠa期古寛永通宝である。8は称御蔵式大永型、9は二草点型、10は四草点型、11、12は不草点型、13は称水戸式正字型、14は広足寛型、15～17は太細型、18は称井之宮式縮寛型、19～24は称建仁寺式で19～22が大字型、23、24が小字型である。25～30は正足寳型、31は高寛型、32～34が低寛型に分類される。35～53はⅡ期、新寛永通宝文銭で54のみ正字入文型で、その他は正字背文型である。正字入文型の特徴としては、「文」ノ画上部が「一」字より離れ、入の字のように見えることから分類される。55～69は中字背文型であり、正字背文型に酷似するが、「寛」字、後足が内側に跳ねていることから分類される。70、71は深字背文型で、72～83は細字背文型である。銭文全体に細字となり背「文」字が横長となっている。85～88は渡来銭・模鋳銭で、85は元豊通宝、85は淳化元宝、86、87は元豊通宝、88は永楽通宝である。

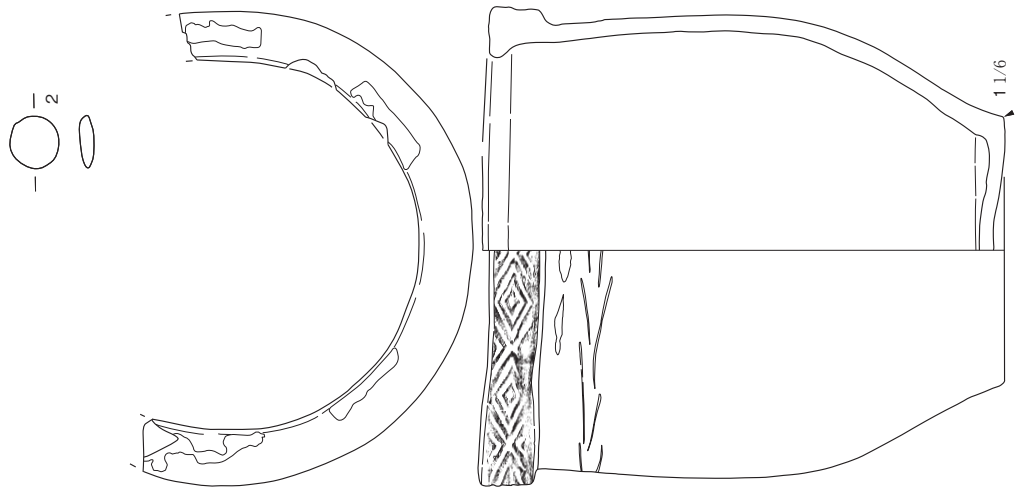
第７節　石製品・石造物（Ⅲ－31 ～ 35 図）

1 は火打ち石。SE1734 出土。白色系の石材である。焼成を受け、部分的に黒変している。使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられる。使用中のものであろうか。12.3g。2 は硯である。SK3715 出土。粘板岩。3､4 は砥石である。SK3715 出土。3 は粘板岩､2 面使用。右手前から左奥にかけて大きく反っている。4 はデイサイト、1 面使用。右手前から左奥にかけて反っている。

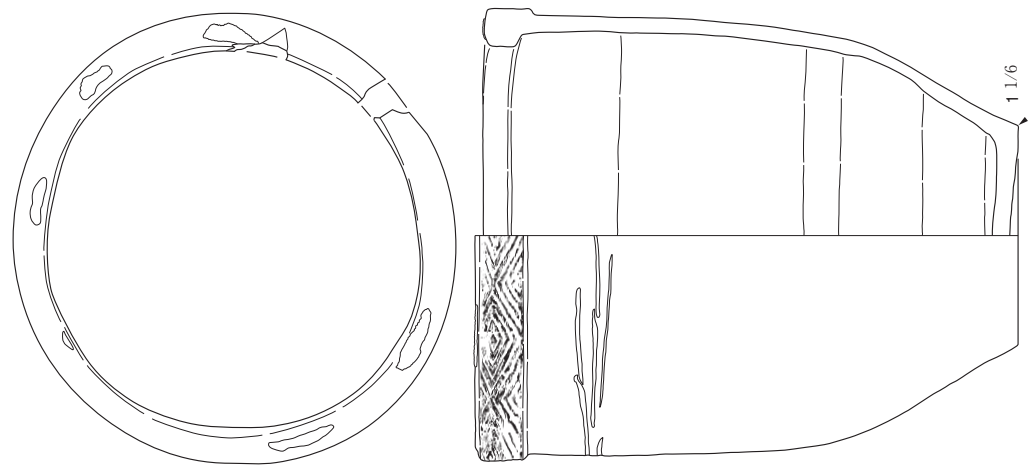
5 は如意輪観音。遺構外出土。裏面の仕上げは表面に比べて粗い。底部は凸凹している。「知圓妙鏡信女　霊意　歸一　元禄十丁丑五月十五日」と刻まれている。石質は輝石安山岩。6 は地蔵。遺構外出土。上部と地蔵の顔が欠損している。裏面の仕上げは表面に比べて粗い。底部は凸凹している。「光誉秋圓進士〇位　享保十二丁未七月三日」と刻まれている。石質は多孔質安山岩。7 は地蔵の頭部片。SK1905 出土。石質は輝石安山岩。8 は墓石の竿石。遺構外出土。裏面の仕上げは表面と側面に比べて粗い。底部の仕上げは凸凹している。前面に「圓進士　天明七丁未　十二月廿三日　道進士　（享）和二戌年　三月二十日　〇圓進士　（寛政）六甲寅　三月〇七日」、側面に「花屋武右エ〇」と刻まれている。石質は礫質砂岩。9 は墓石の竿石。遺構外出土。上部に宝珠、外周に唐草文、宝珠。石質は安山岩。10 は墓石の竿石。遺構外出土。裏面の仕上げは表面と側面に比べて粗い。前面に「申天施主　居士菩提也　廿四日」。石質は安山岩。11 は墓石の台石。B 層出土。表面と上面の仕上げに比べ背面の仕上げは粗い。竿石の乗る部分、長方形の範囲の仕上げは凸凹している。他の竿石の底部の仕上げも凸凹していることから、竿石と台石の座りを良くするための仕上げと考えられる。前面に蓮の葉と蕾が彫られている。上面手前中央に水鉢、水鉢の両側に花立てが彫られている。水鉢と花立ては底で繋がっている。石質は礫質砂岩。12 は墓石の台石。遺構外出土。表面と上面の仕上げに比べ背面の仕上げは粗い。竿石の乗る部分､長方形の範囲の仕上げは凸凹している。上面手前中央に水鉢、水鉢の両側に花立てが彫られている。水鉢と花立ては底で繋がっている。石質は多孔輝石。13 は宝篋印塔の宝珠と受花部分。遺構外出土。宝珠の表面には細かい線が刻まれている。縦半分に割られ、受花の花弁は削られている。宝珠前は上端が削られ、前部分は受花の削りに合わせて削られている。長方形の石材として二次加工したと考えられる。石質は安山岩。14 は隅丸方形の柱状の石材。遺構外出土。



ST2211

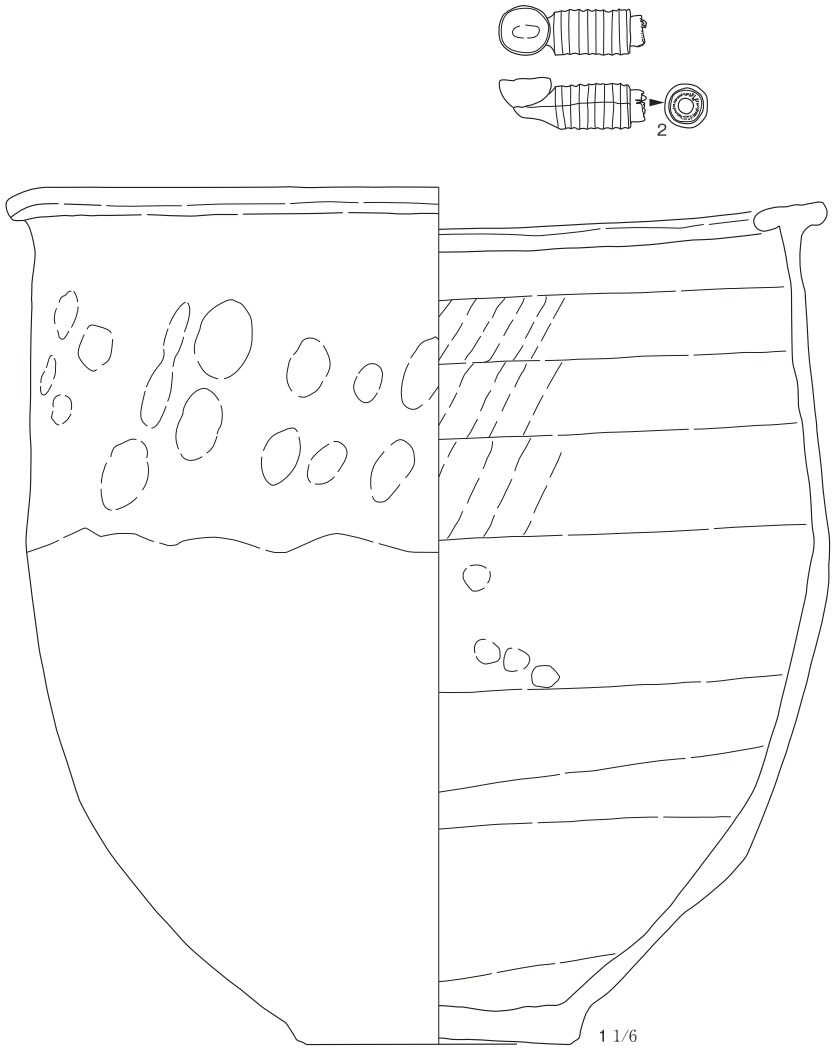


ST1733

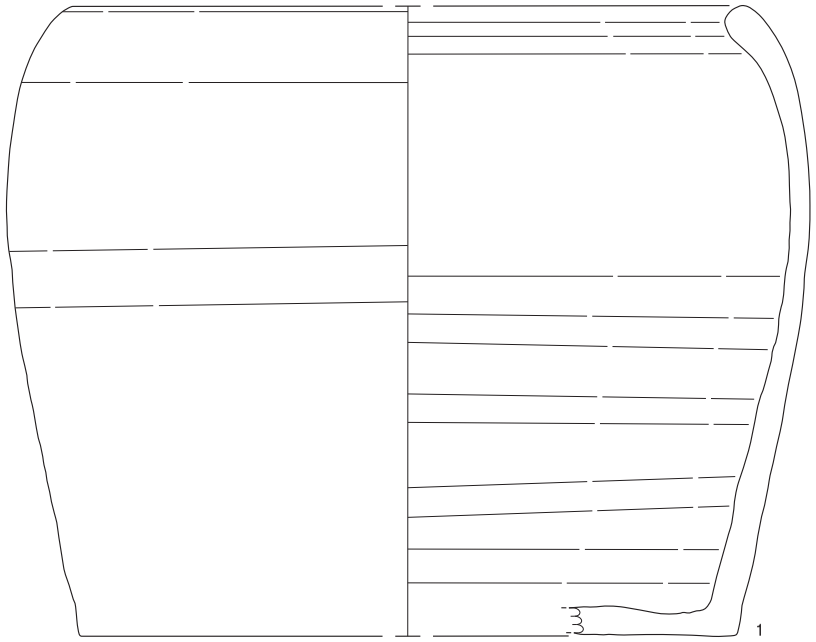


ST1732

Ⅲ-1図　ST1732、ST1733、ST2211　出土遺物

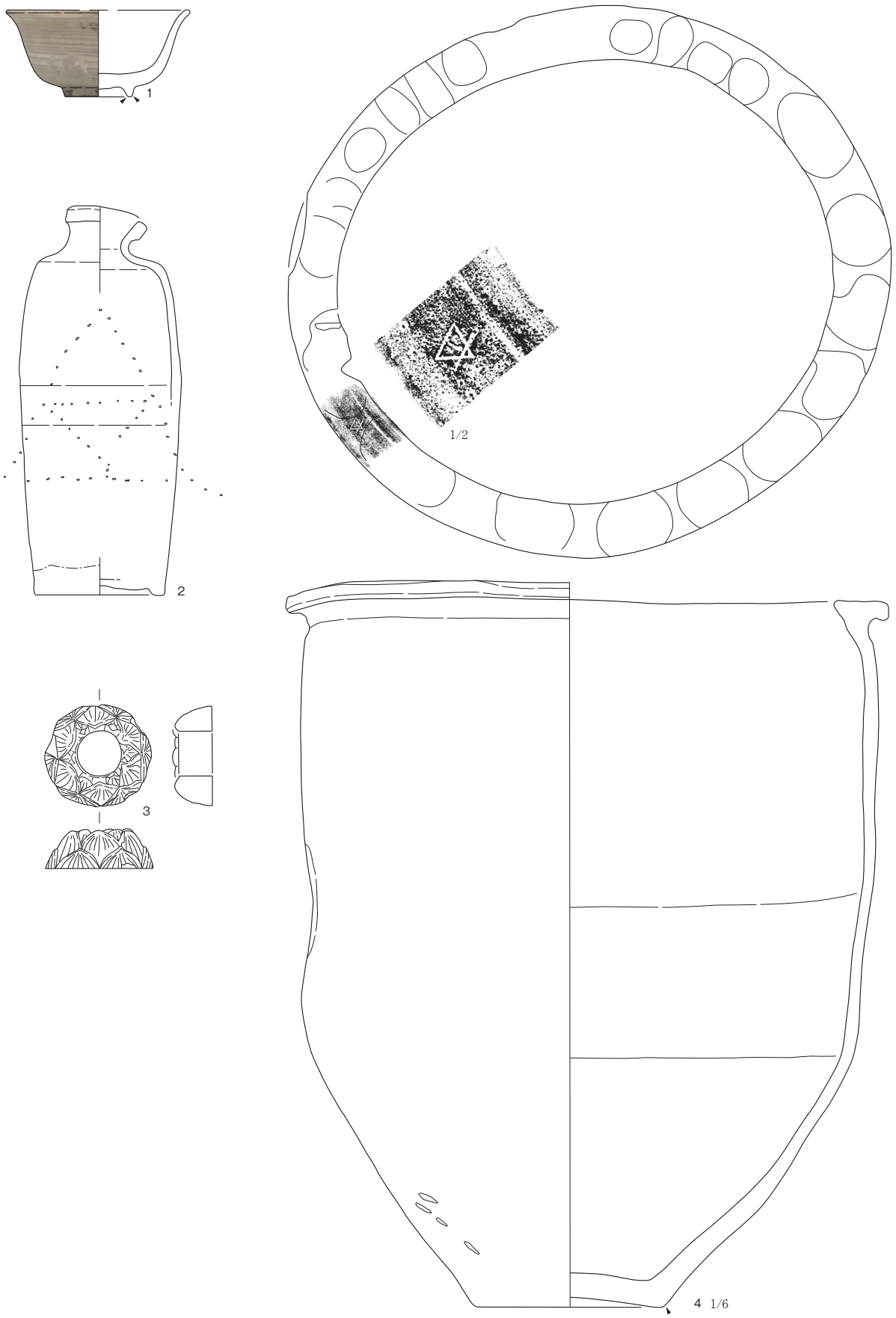


ST1988

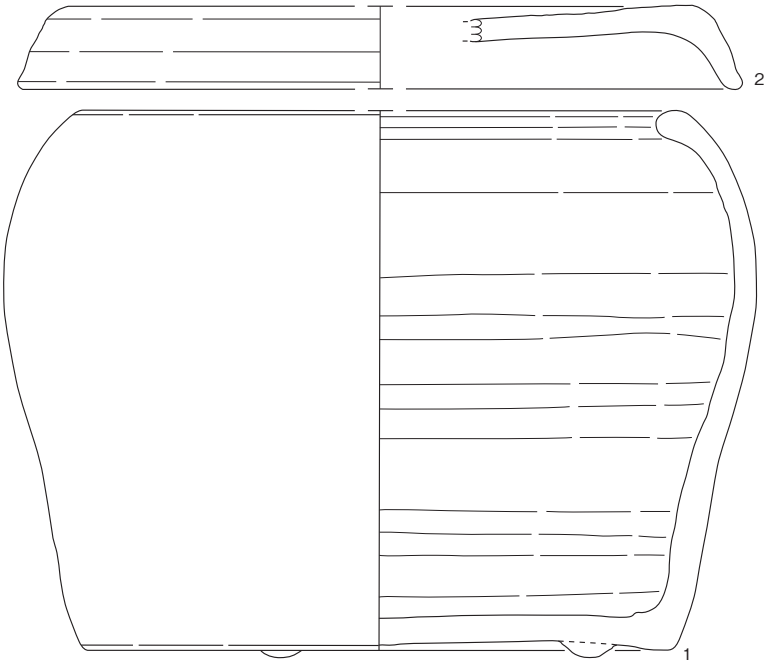


ST2394

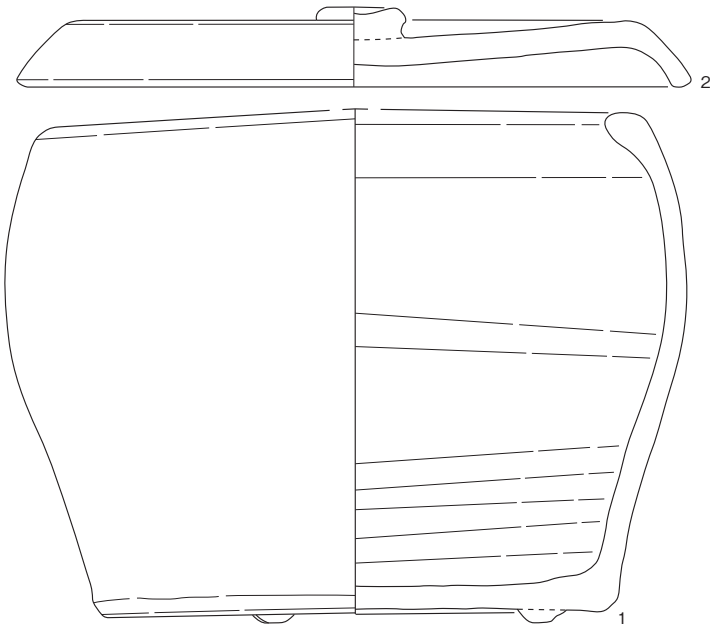
Ⅲ-2図　ST1988、ST2394　出土遺物



Ⅲ-3図　ST2212　出土遺物

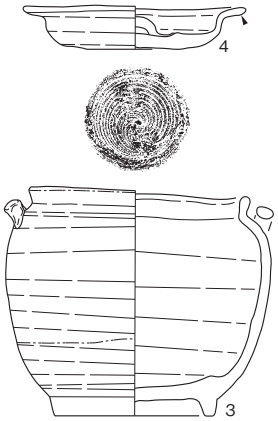


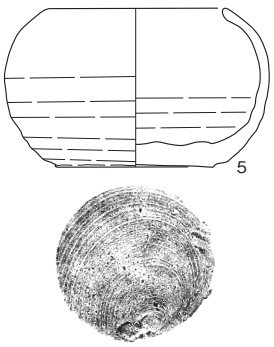
ST2406



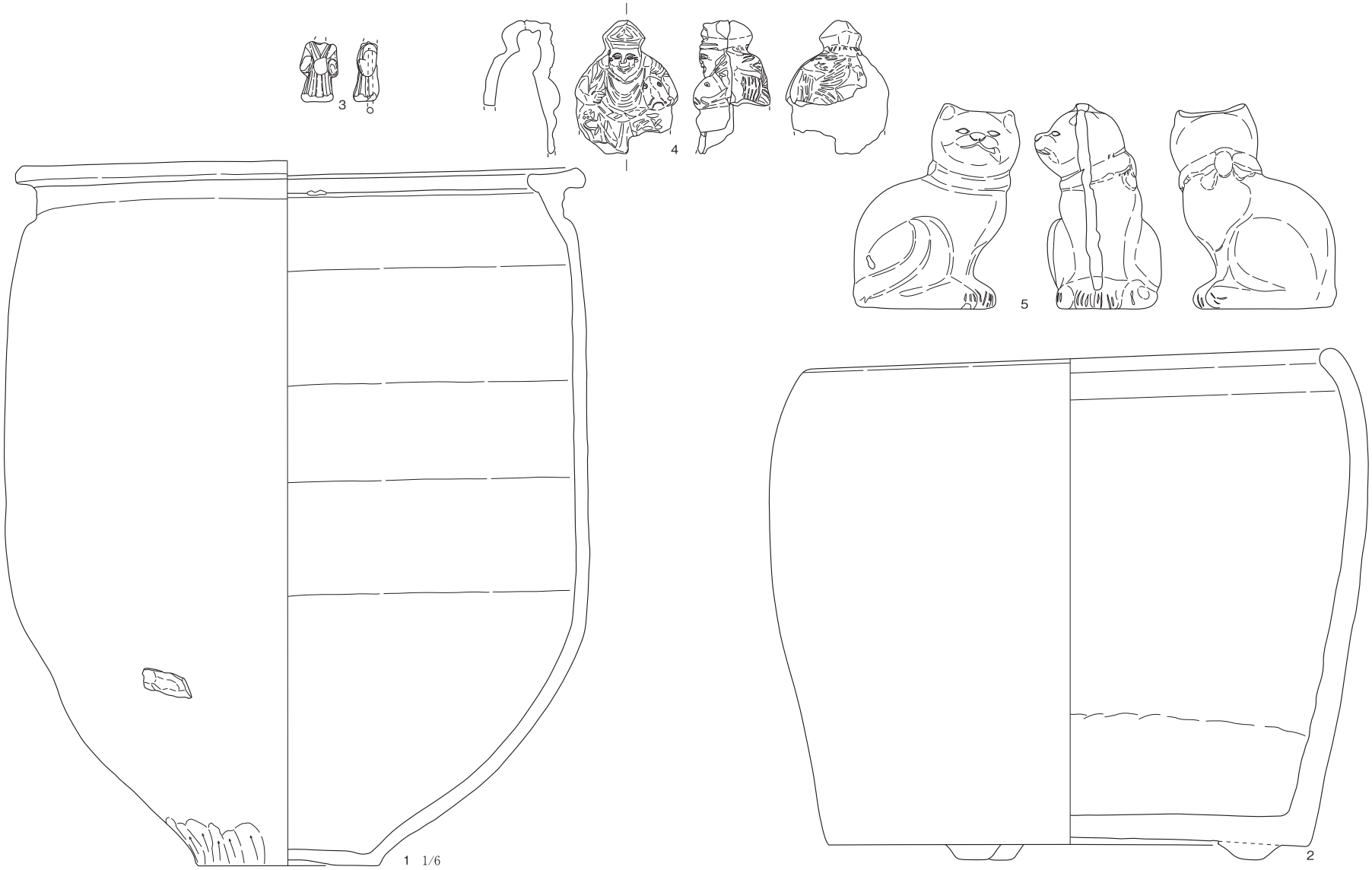
ST2424

Ⅲ-4図　ST2406、ST2424　出土遺物

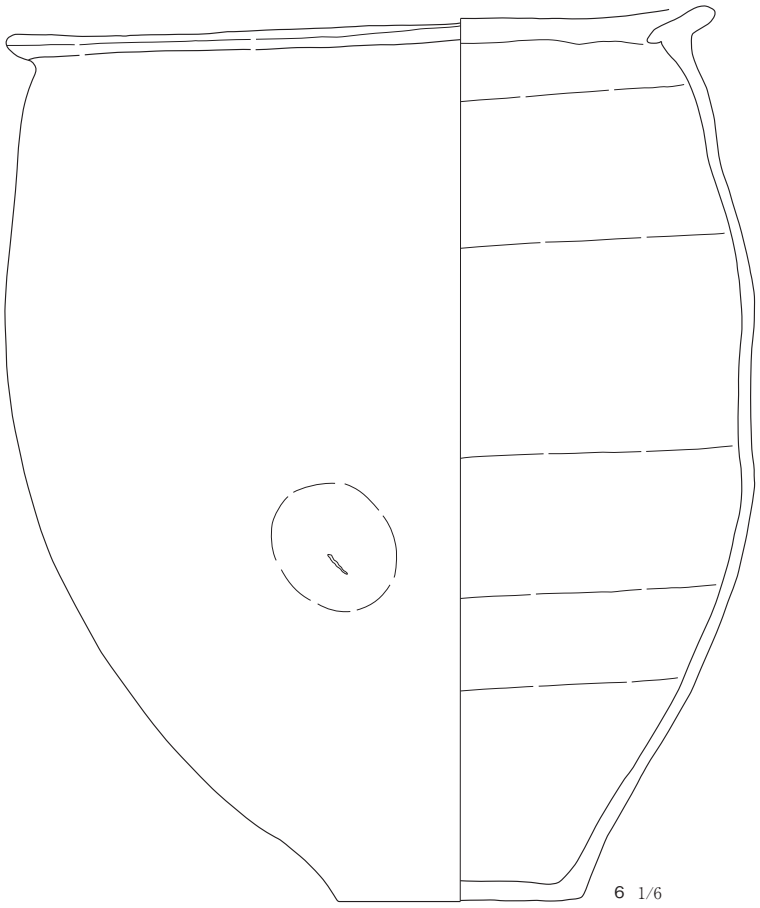




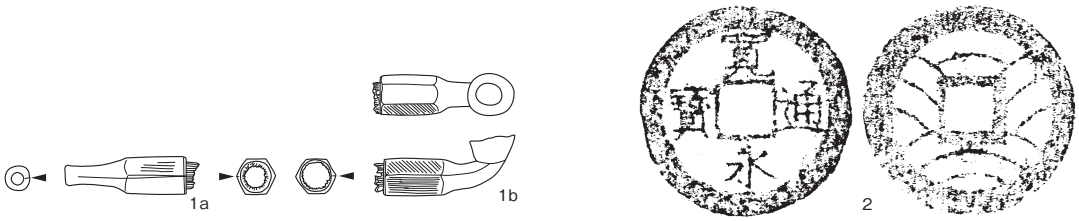
Ⅲ-5図　ST2502・2503・2583　出土遺物



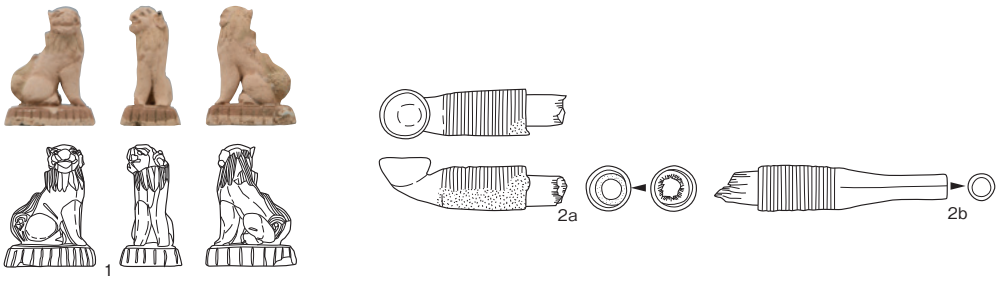
Ⅲ-6図　ST2584(1)　出土遺物



ST2584(2)

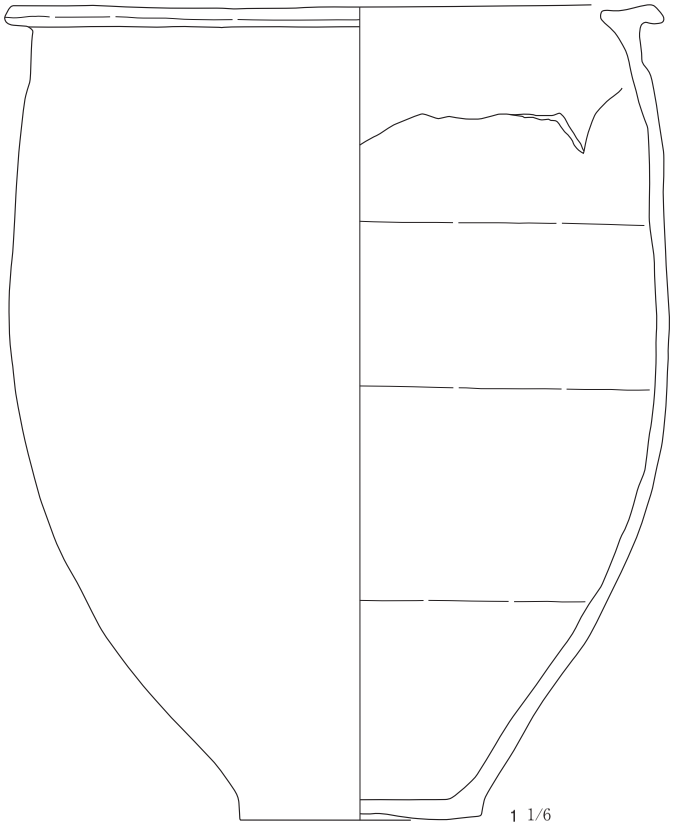


ST2892

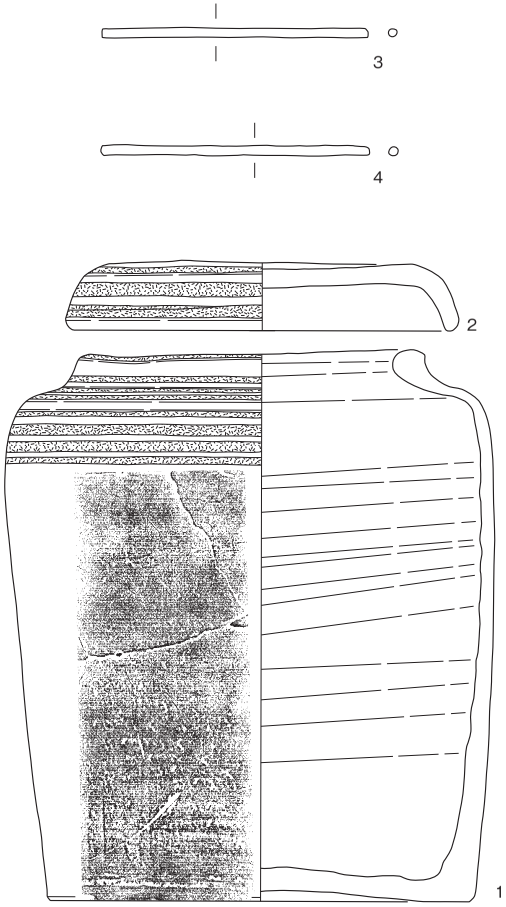


ST2951

Ⅲ-7図　ST2584(2)、ST2892、ST2951　出土遺物

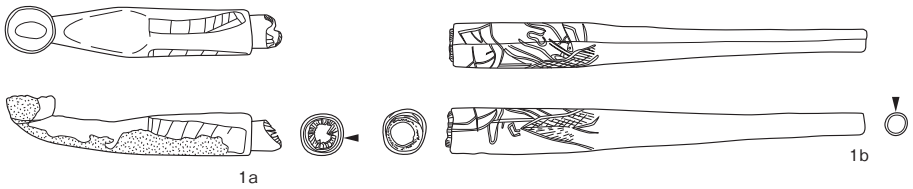


ST2893

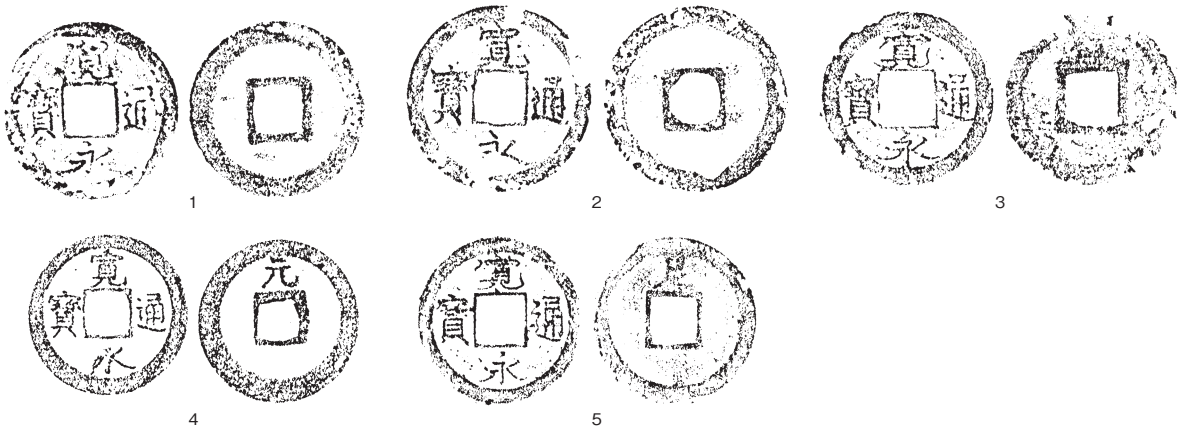


ST3143

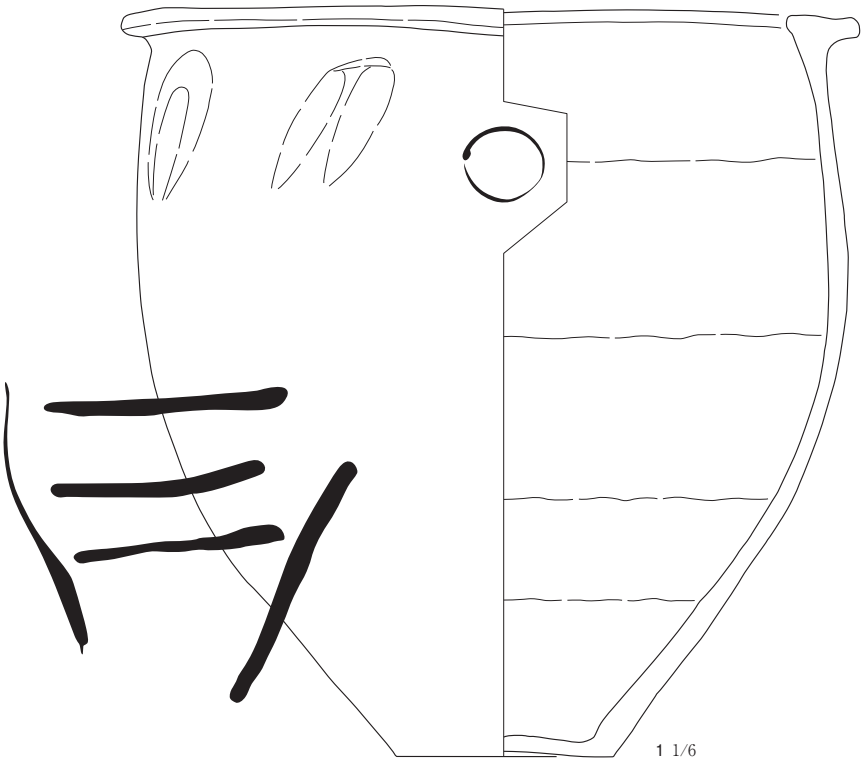
Ⅲ-8図　ST2893、ST3143　出土遺物



ST3146

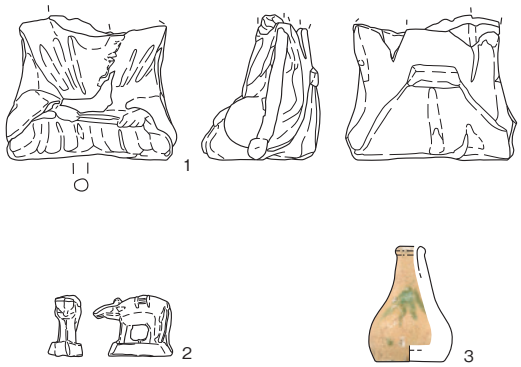


ST3310-9



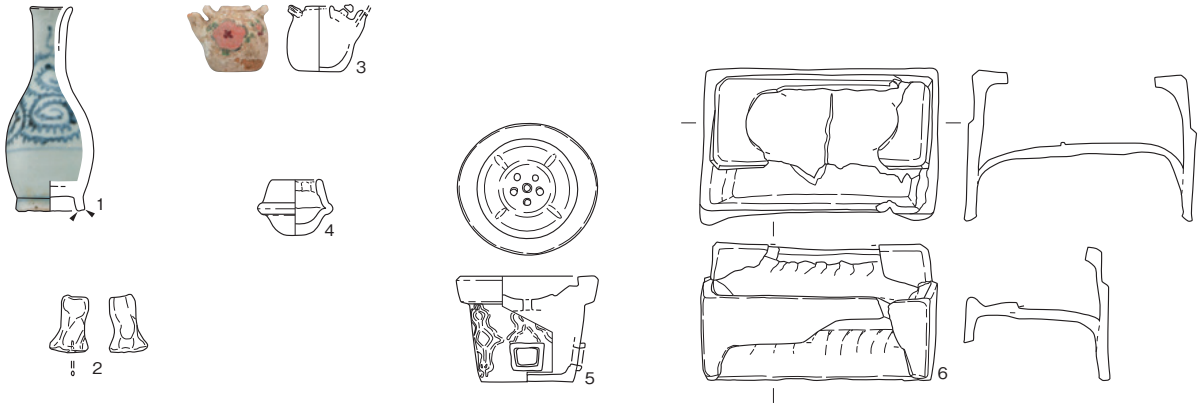
ST3310-10

Ⅲ-9図　ST3146、ST3310-9、ST3310-10　出土遺物

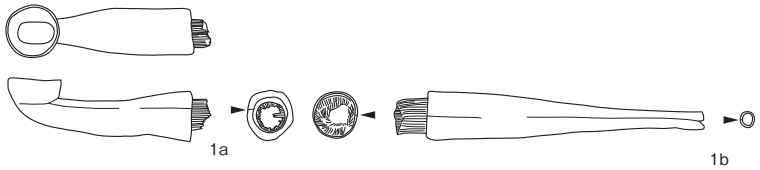


ST3320

ST3321

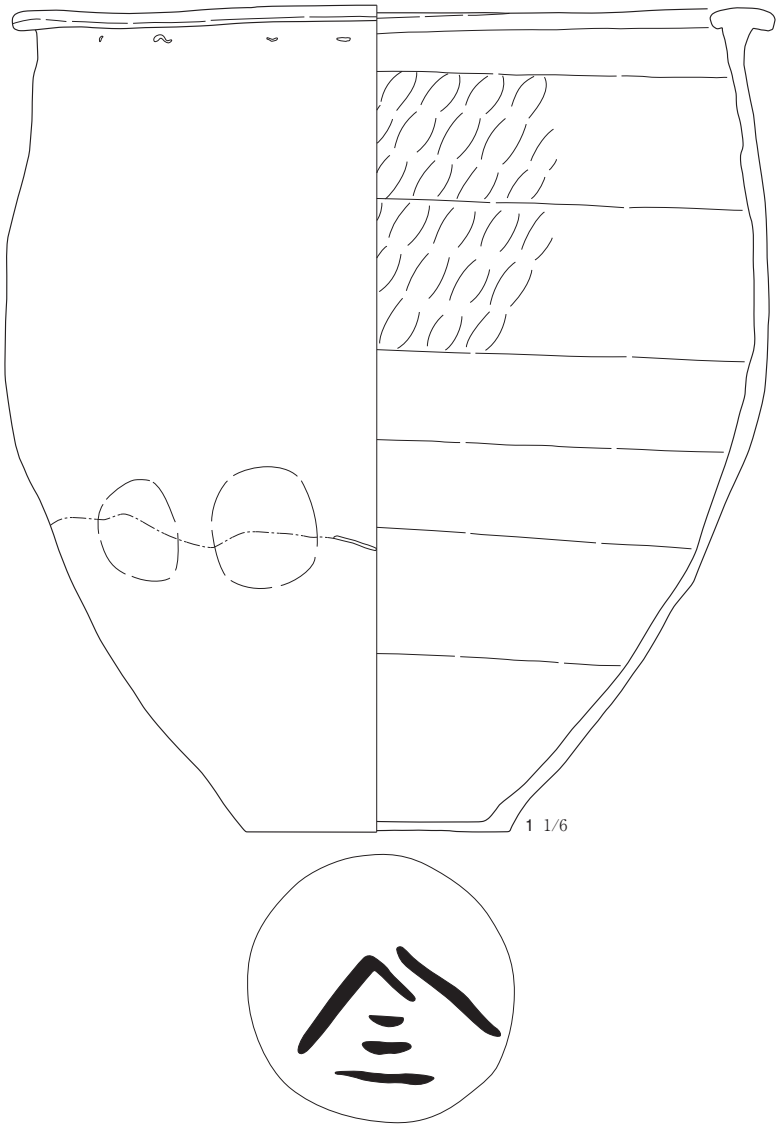


ST3441

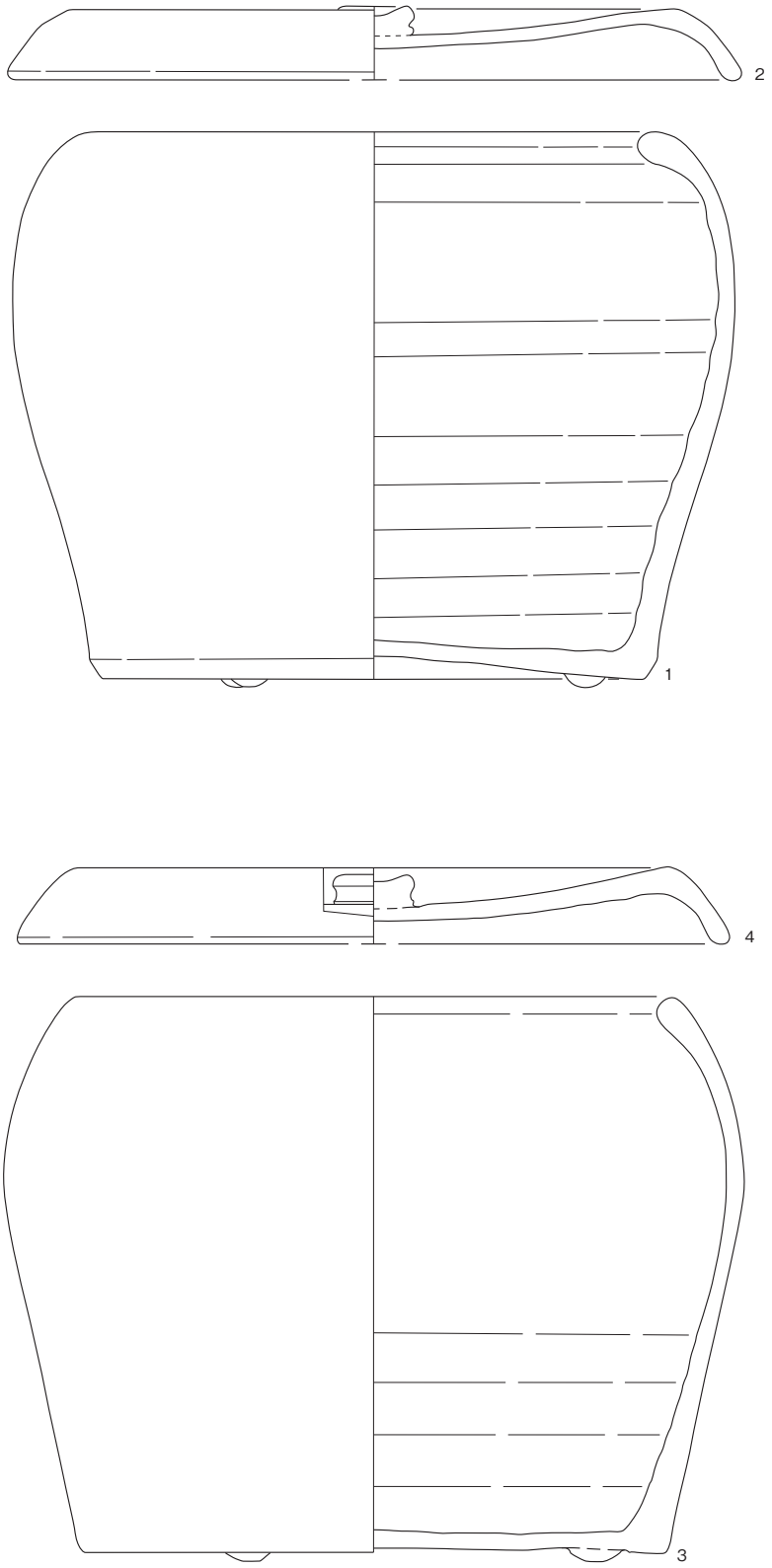


ST3526

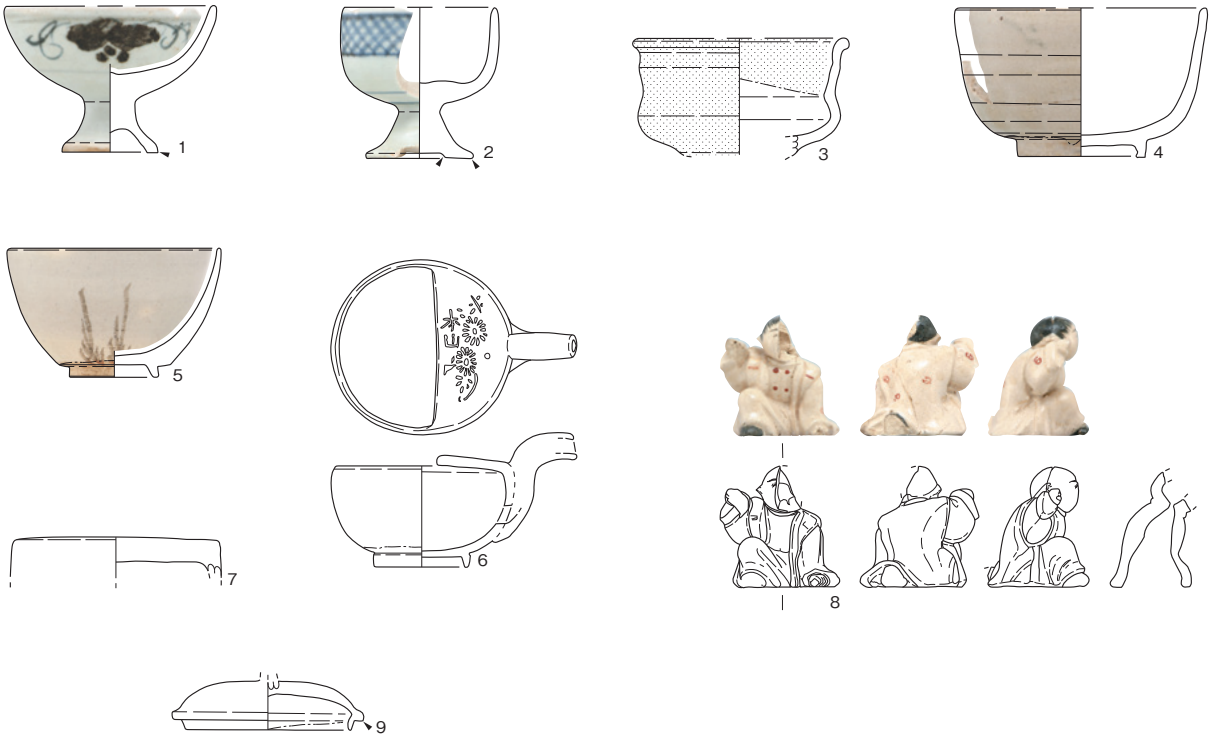
Ⅲ-10図　ST3320、ST3321、ST3341-1、ST3526　出土遺物



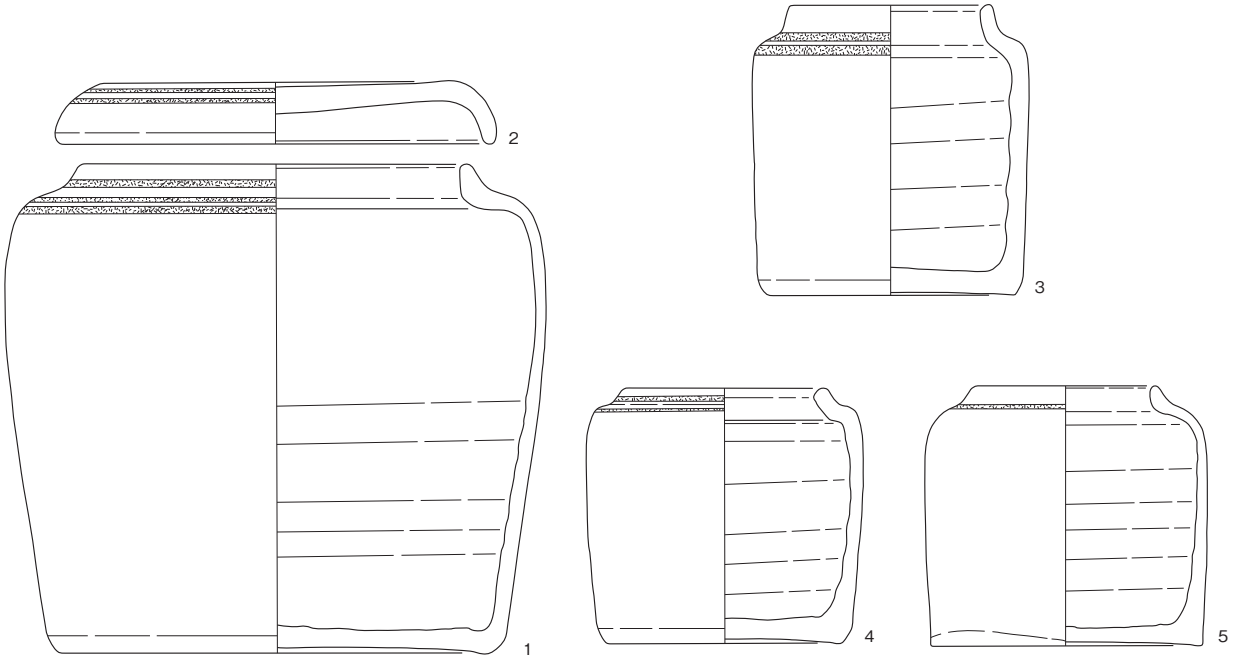
Ⅲ-11図　ST3531　出土遺物



Ⅲ-12図　ST3539　出土遺物

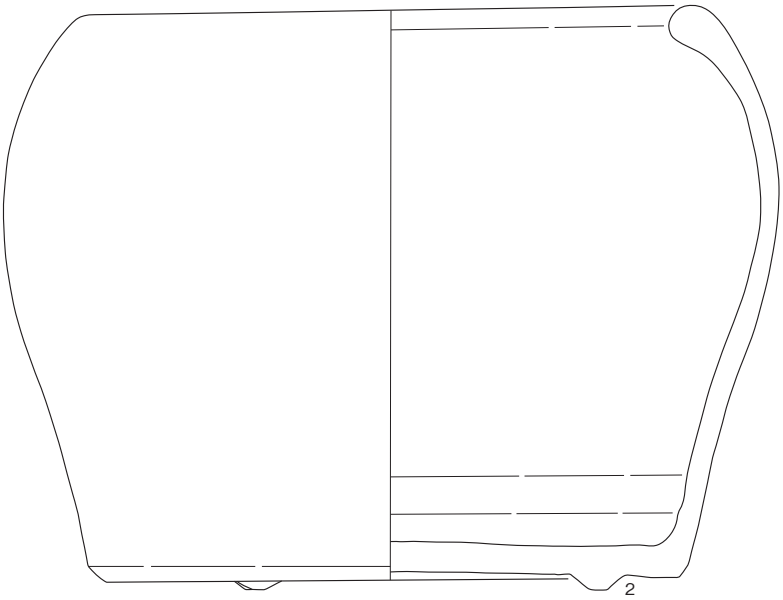


SE1734

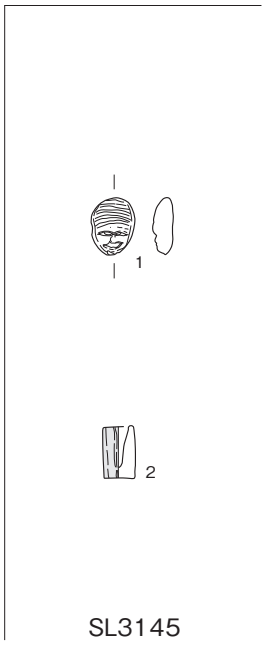


SK1905

Ⅲ-13図　SE1734、SK1905　磁器・陶器・土器



SX2519

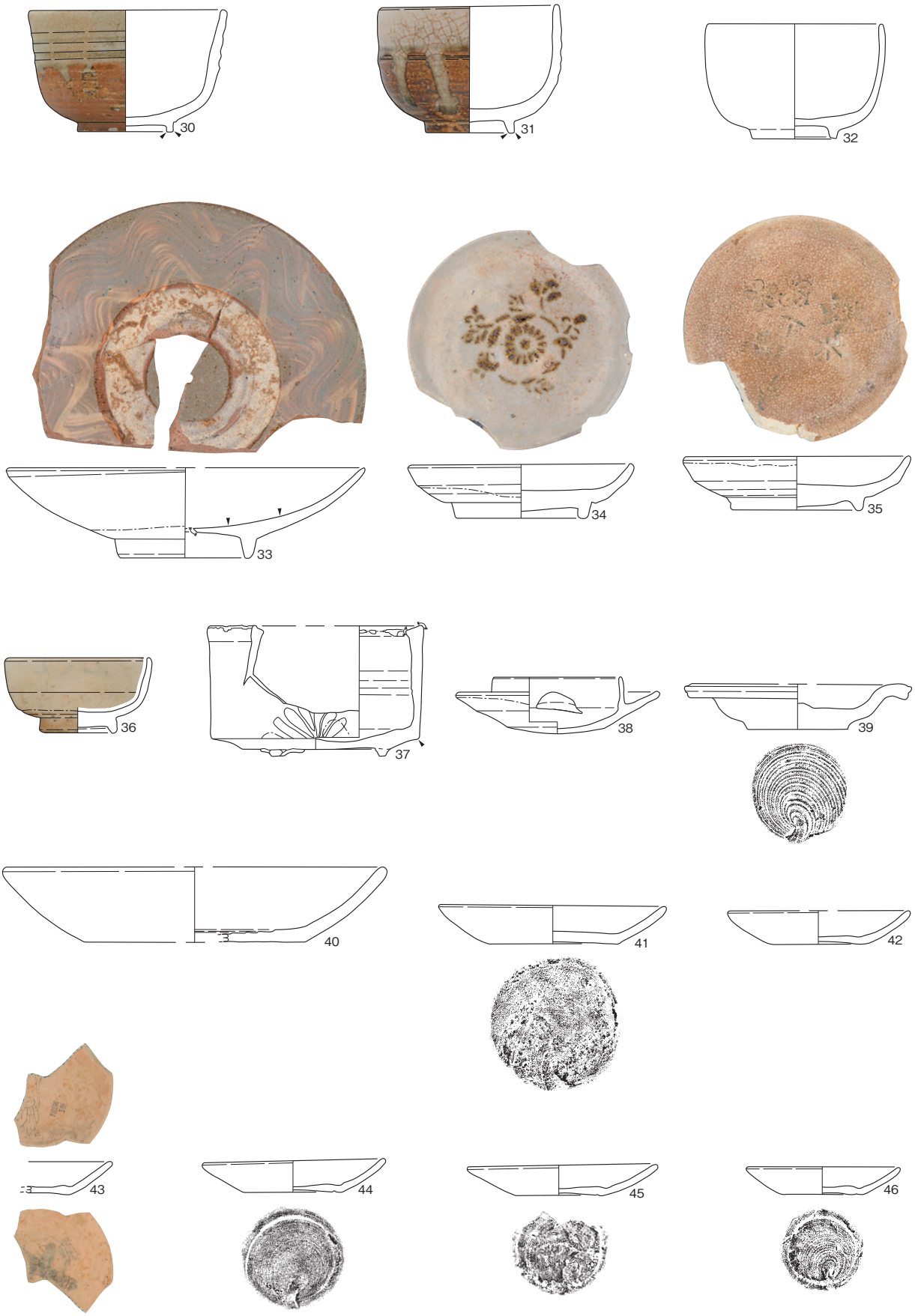


SL3145

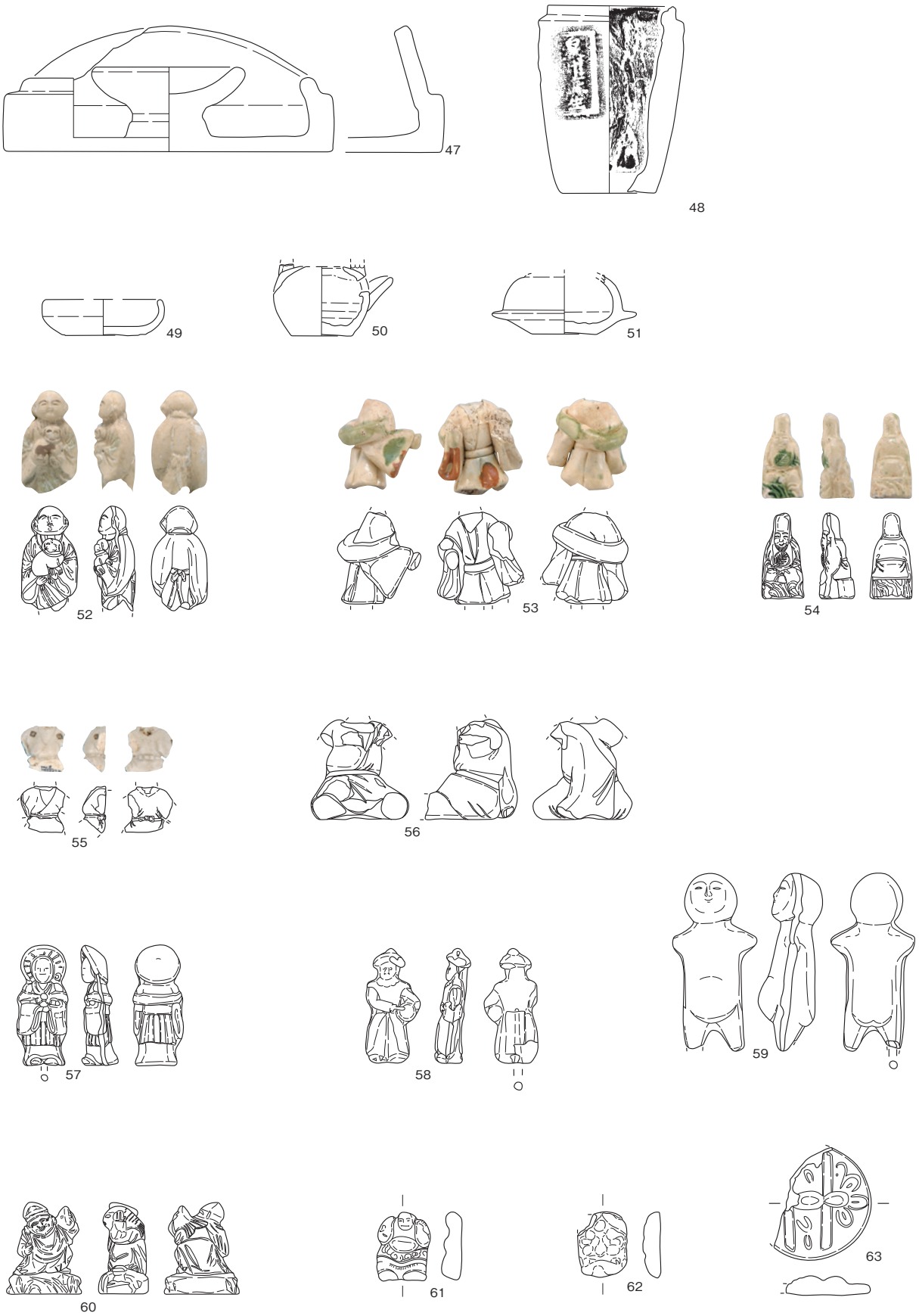
Ⅲ-14図　SX2519、SL3145　磁器・陶器・土器

Ⅲ-15図　SK3310(1)　磁器・陶器・土器

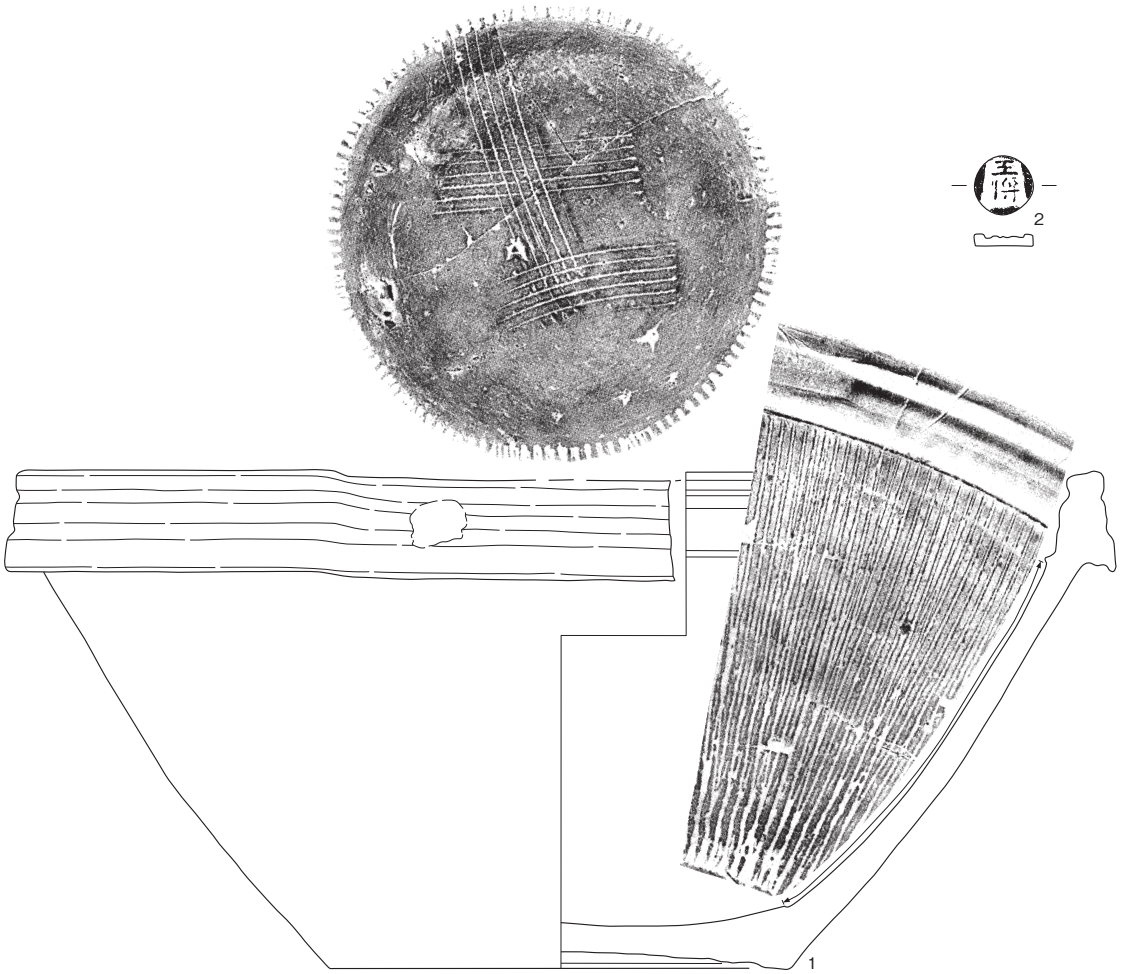
Ⅲ-16図　SK3310(2)　磁器・陶器・土器



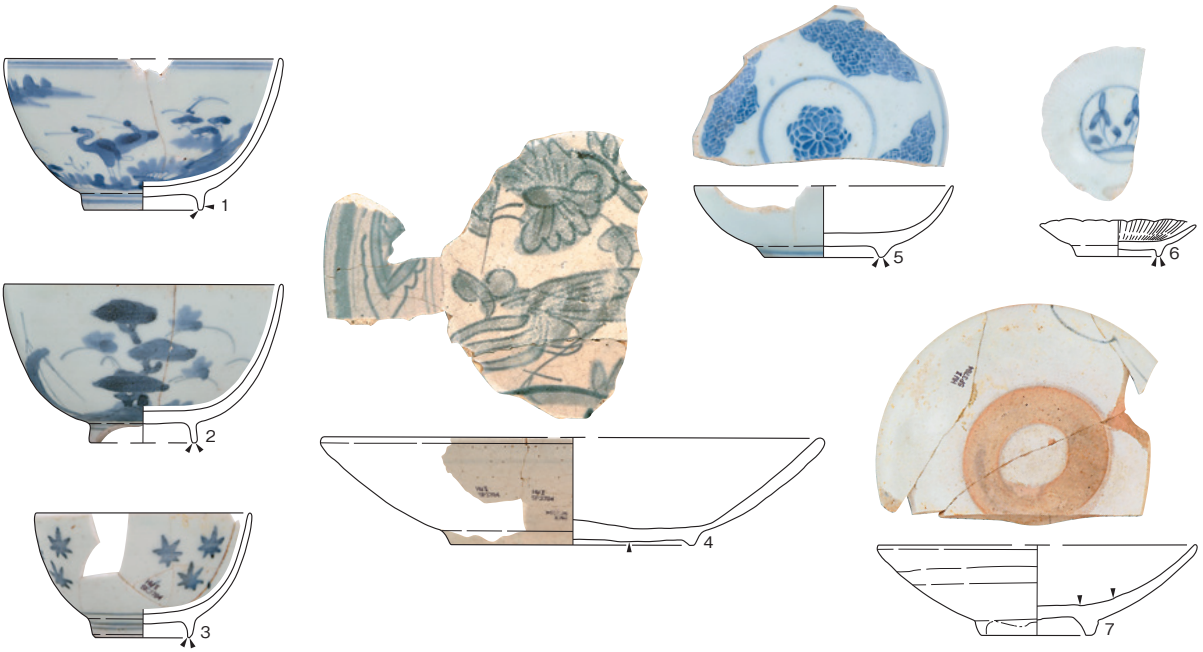
Ⅲ-17図　SK3310(3)　磁器・陶器・土器



Ⅲ-18図　SK3310(4)　磁器・陶器・土器



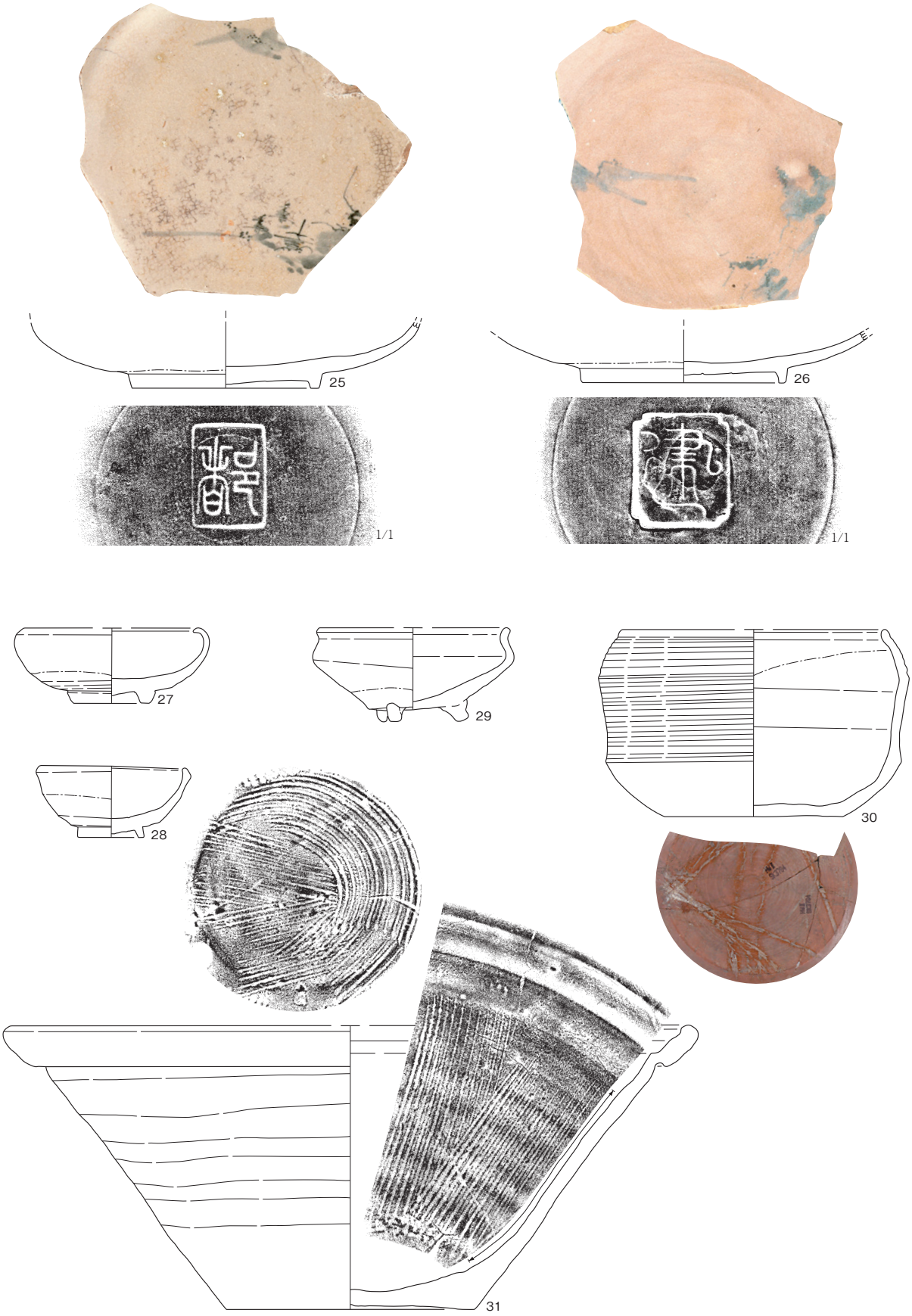
SK3316



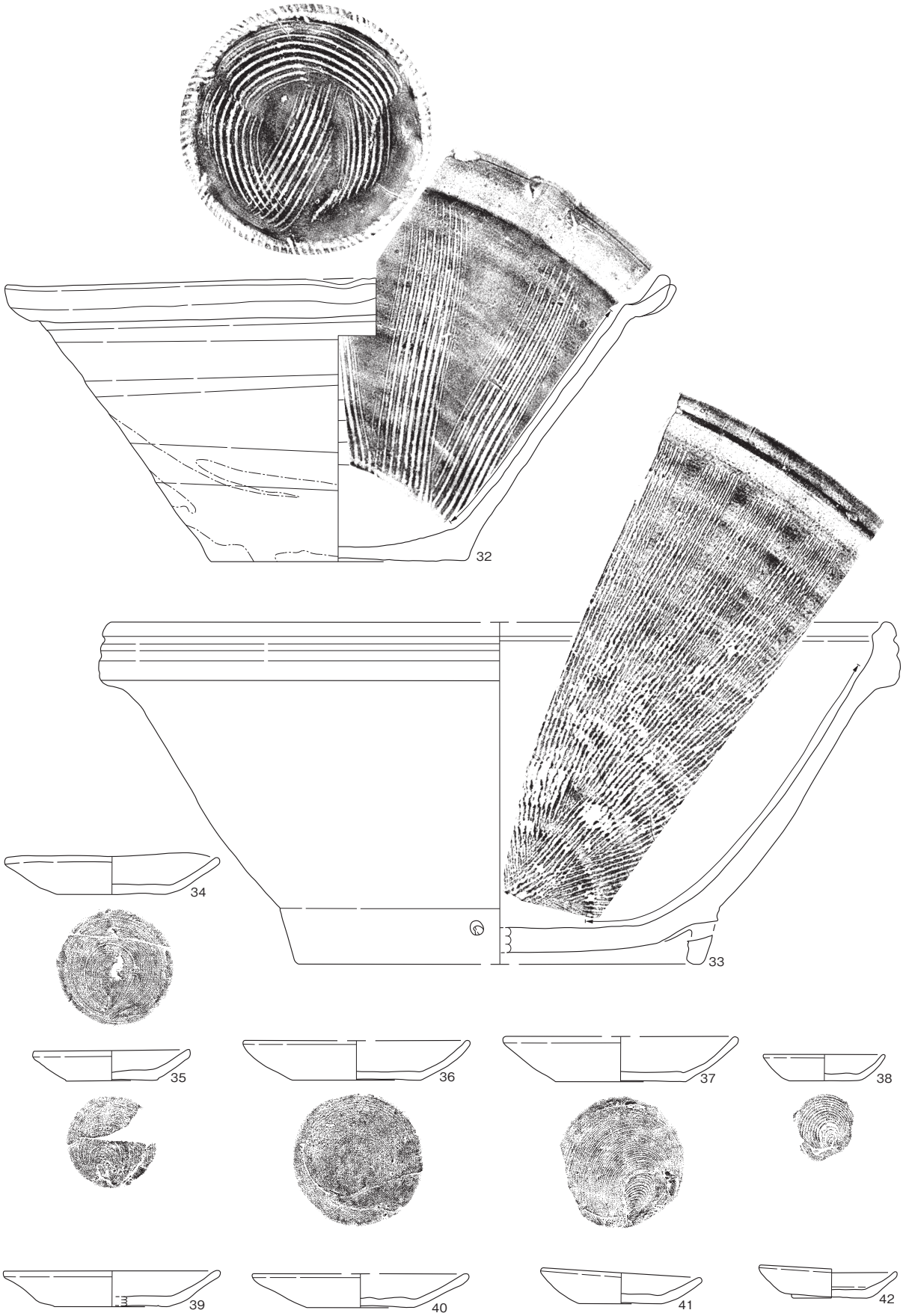
SK3715（1）

Ⅲ-19図　SK3316、SK3715（1）　磁器・陶器・土器

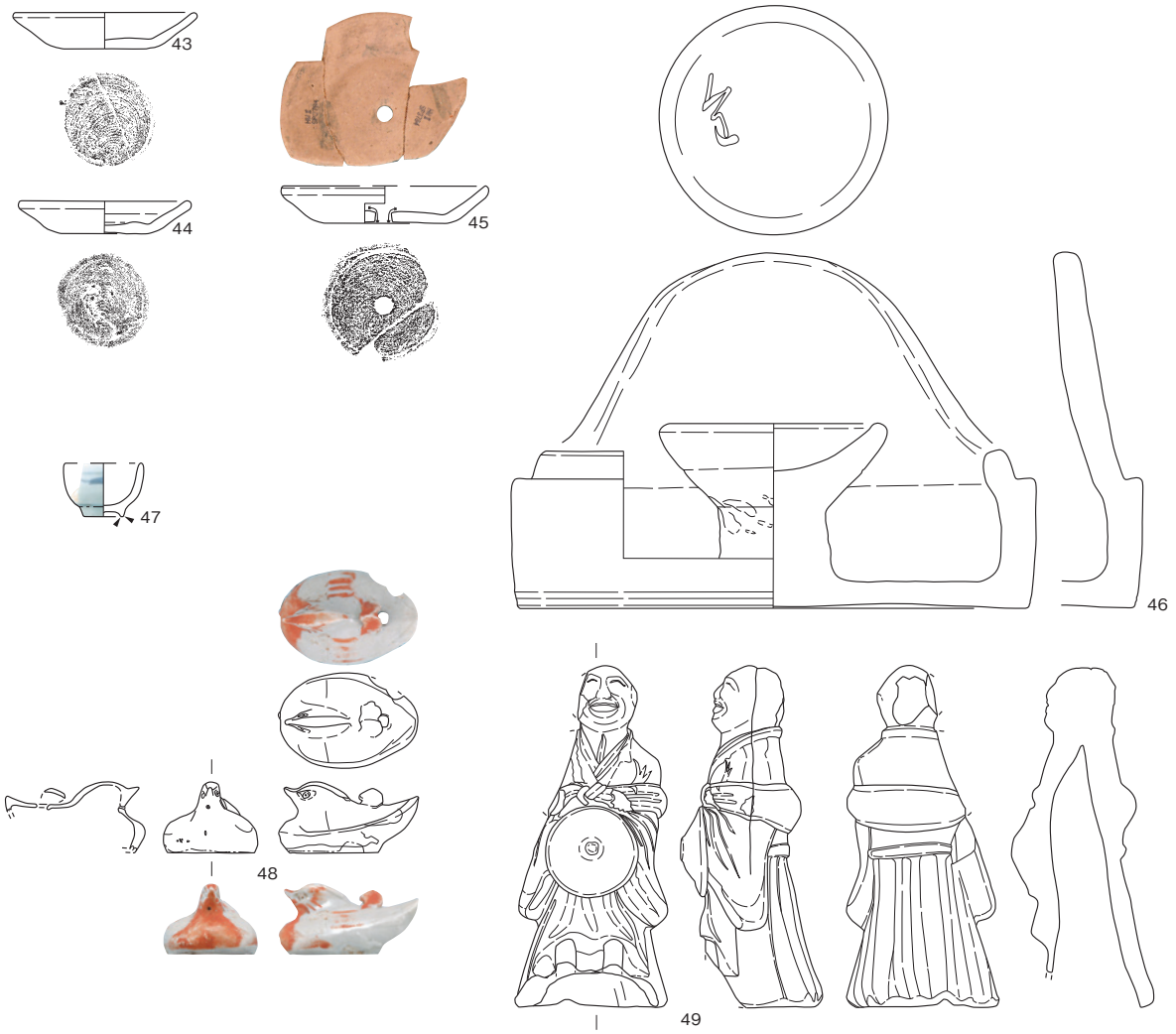
Ⅲ-20図　SK3715(2)　磁器・陶器・土器



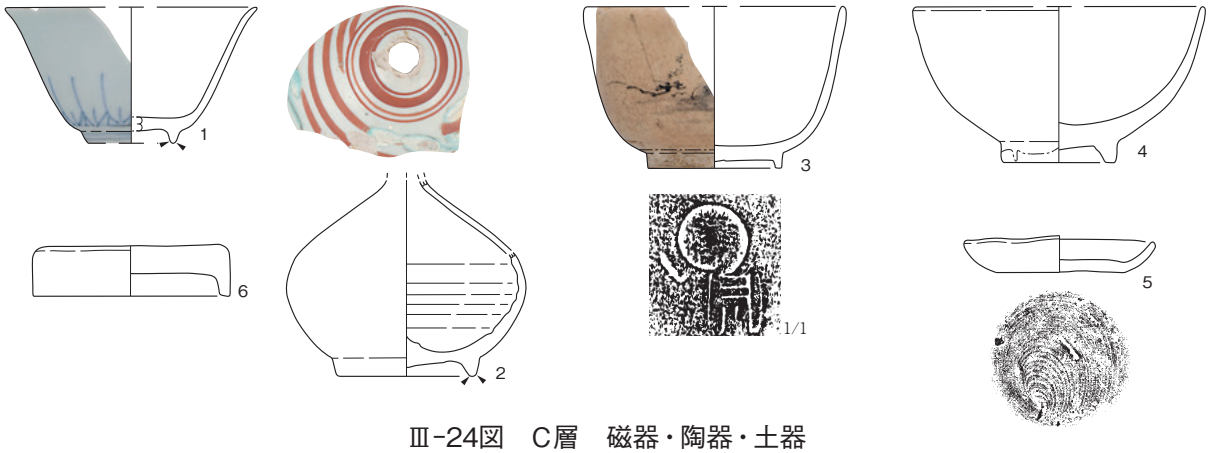
Ⅲ-21図　SK3715(3)　磁器・陶器・土器



Ⅲ-22図　SK3715(4)　磁器・陶器・土器

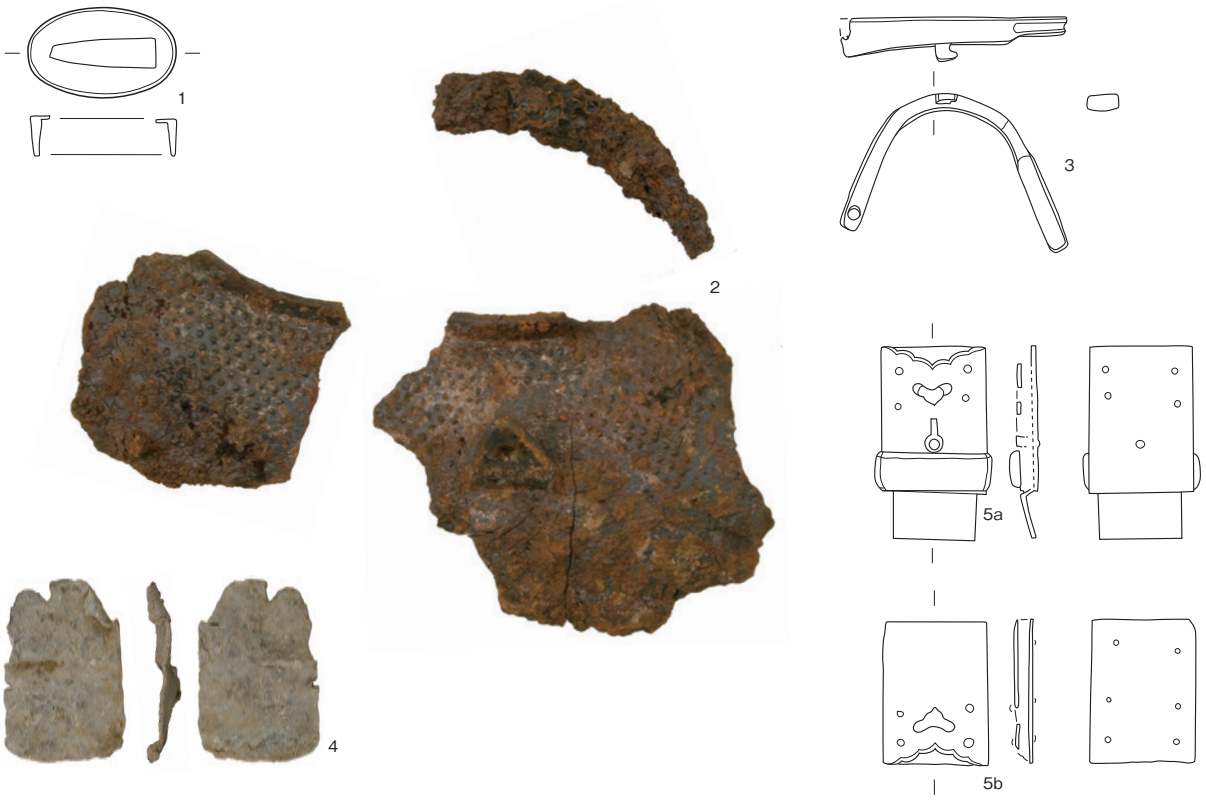


Ⅲ-23図　SK3715(5)　磁器・陶器・土器

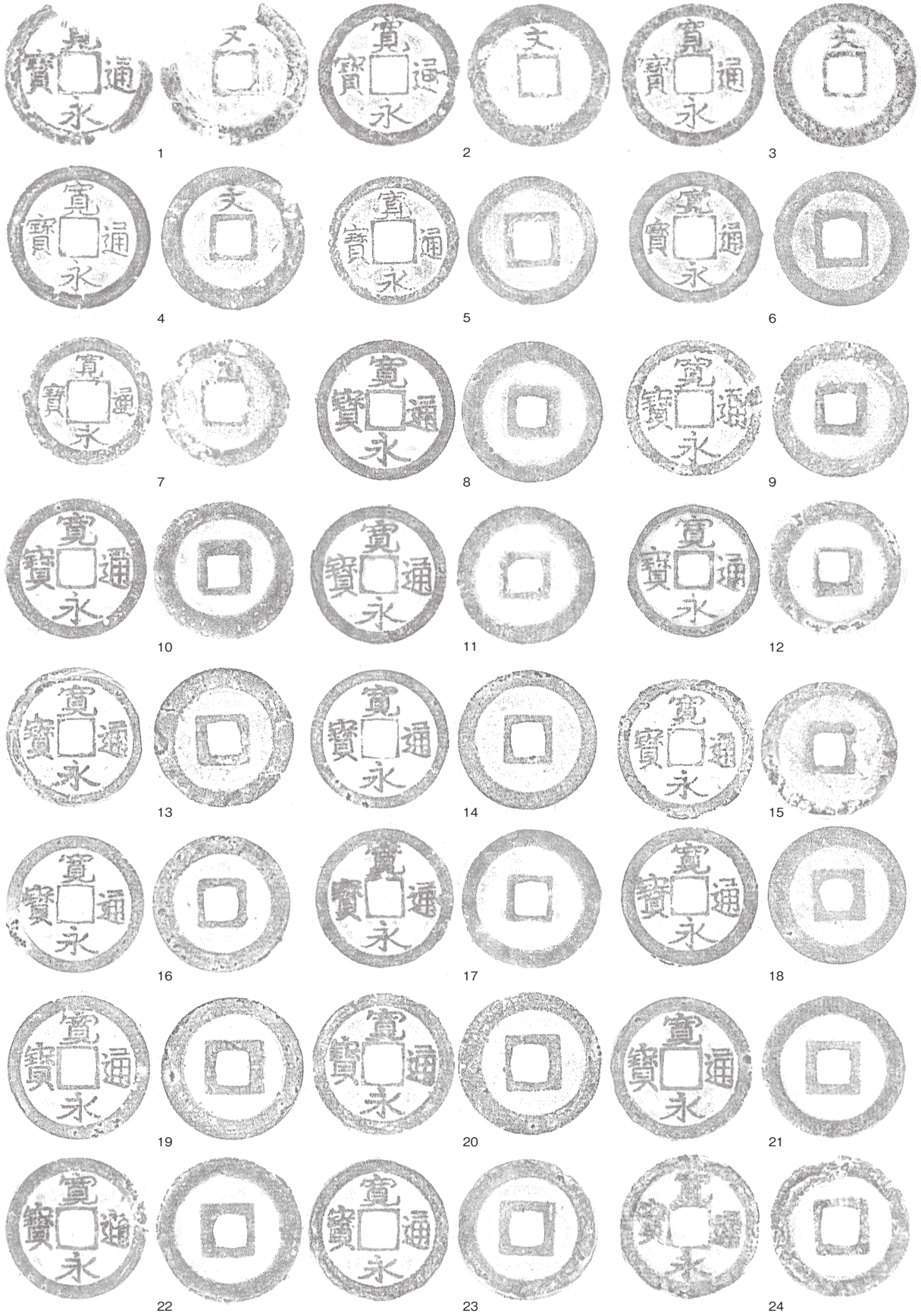


Ⅲ-24図　C層　磁器・陶器・土器

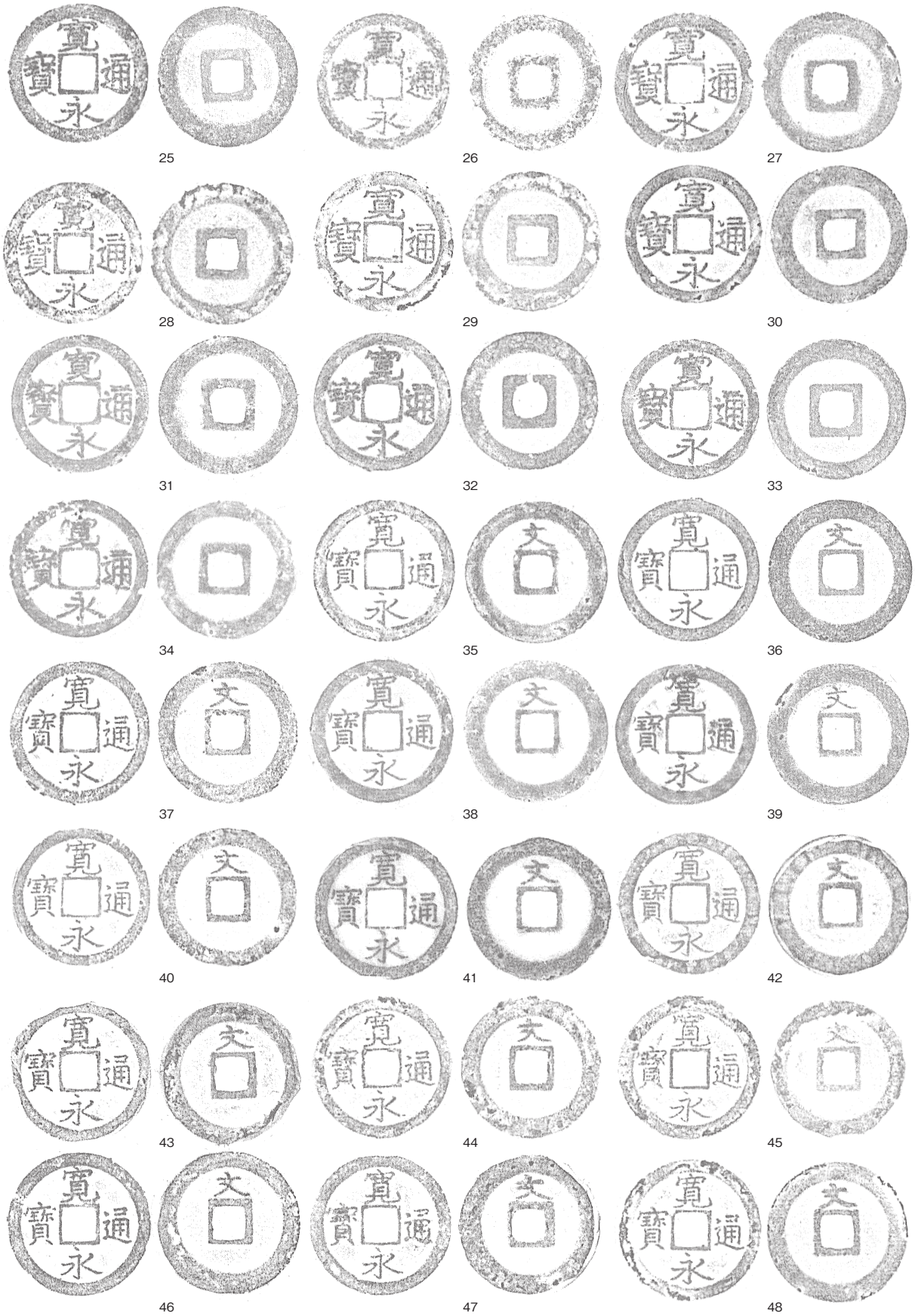
Ⅲ-25図　瓦



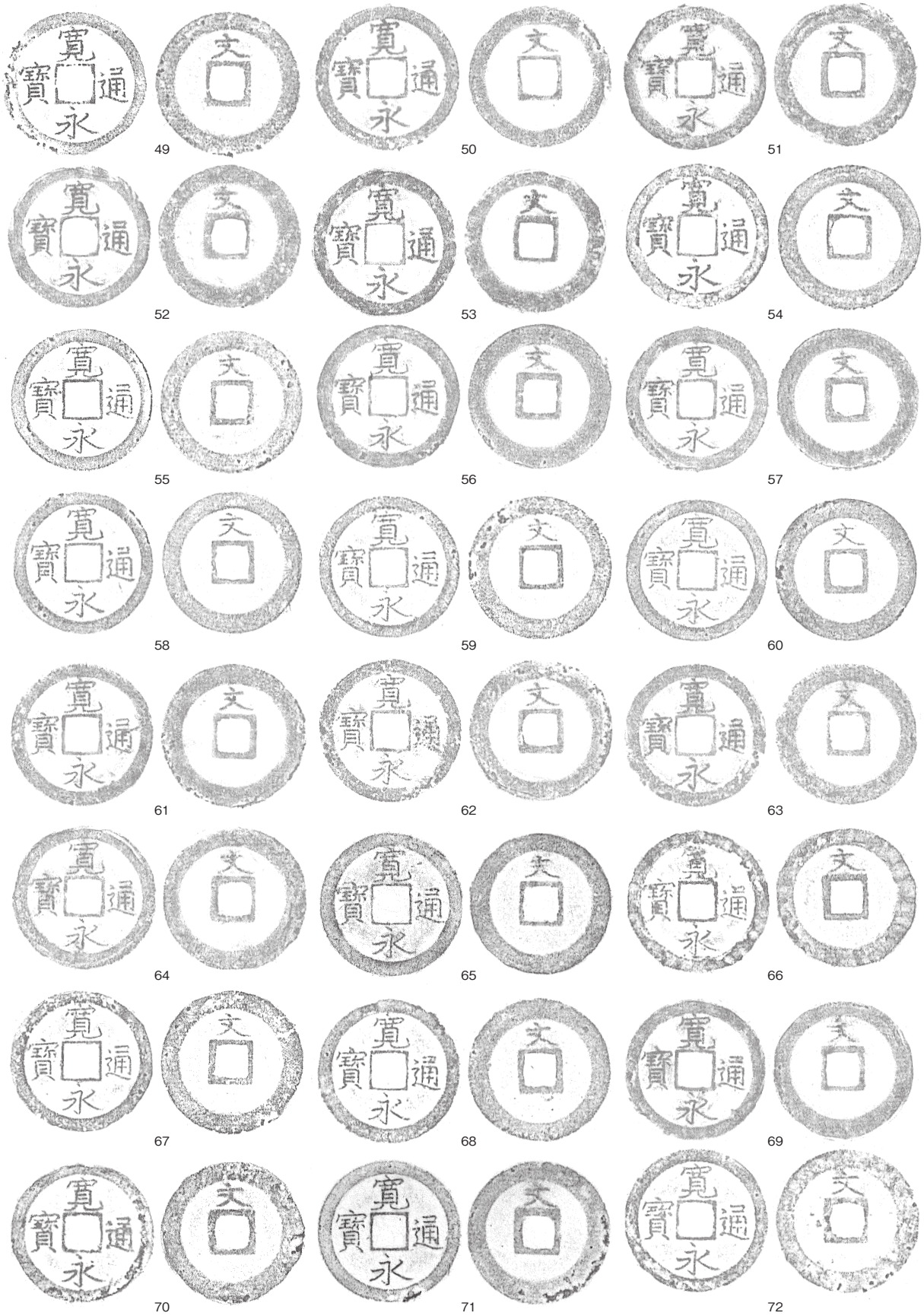
Ⅲ-26図　金属製品



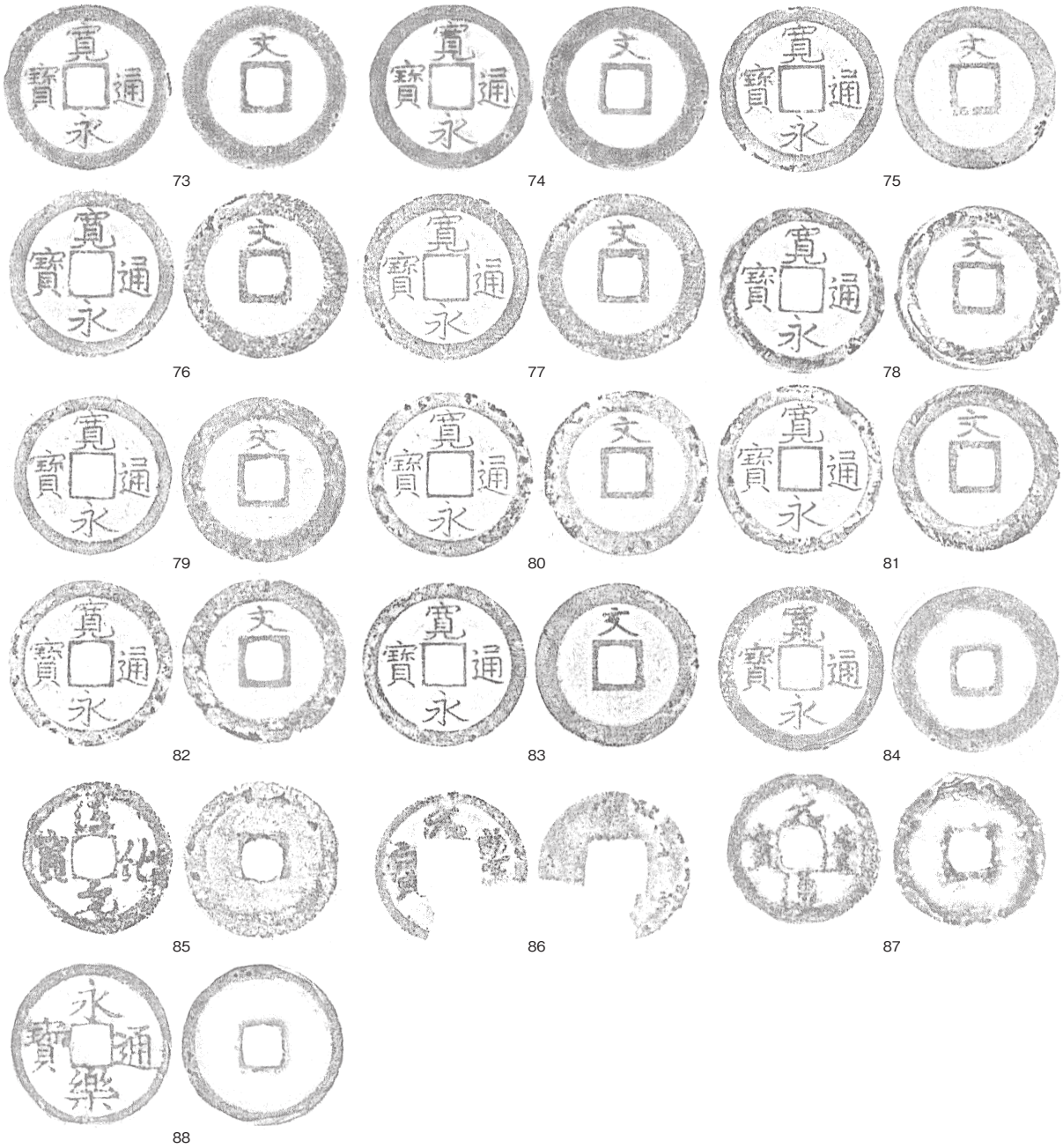
Ⅲ-27図　銭貨(1)



Ⅲ-28図　銭貨(2)



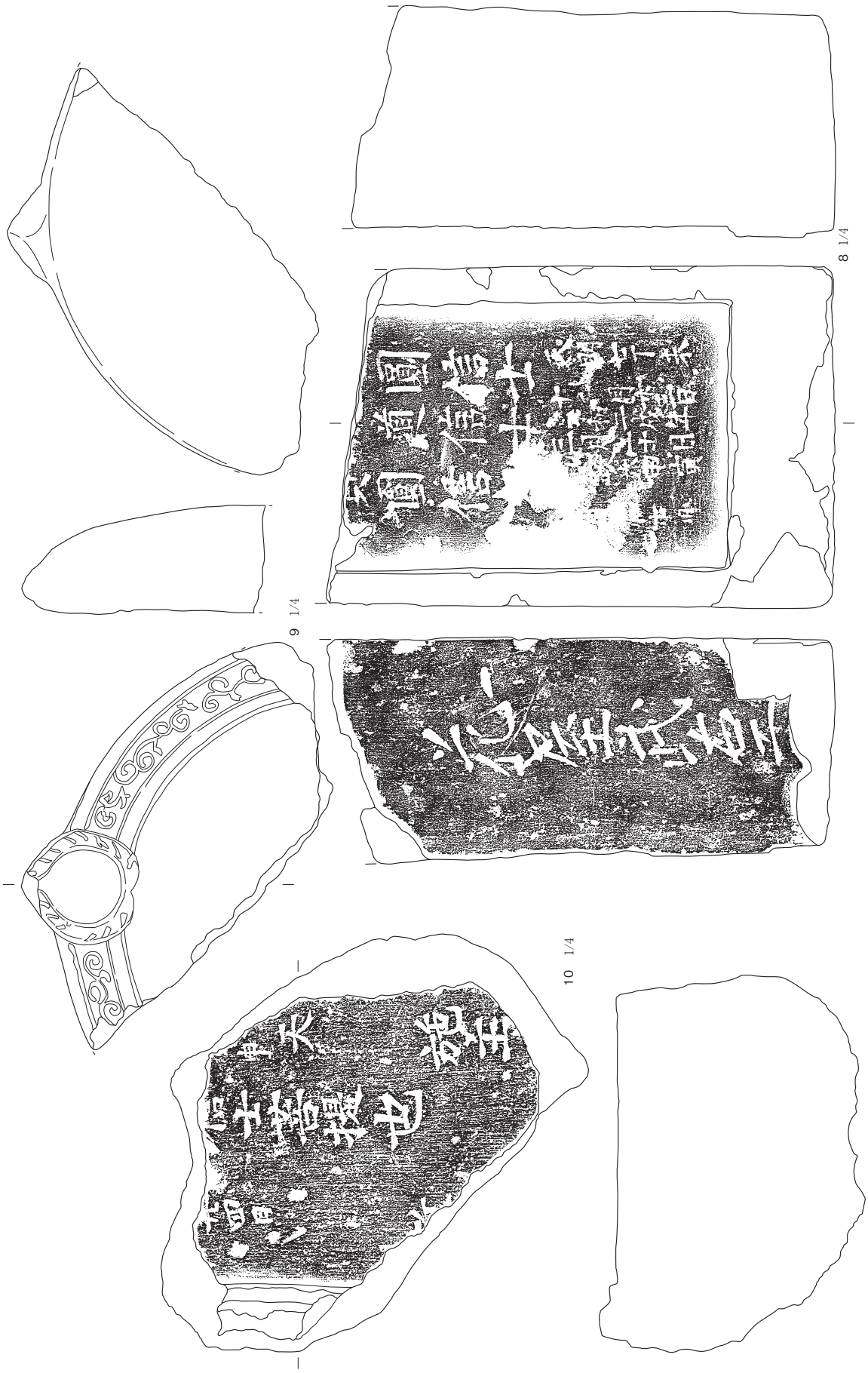
Ⅲ-29図　銭貨(3)



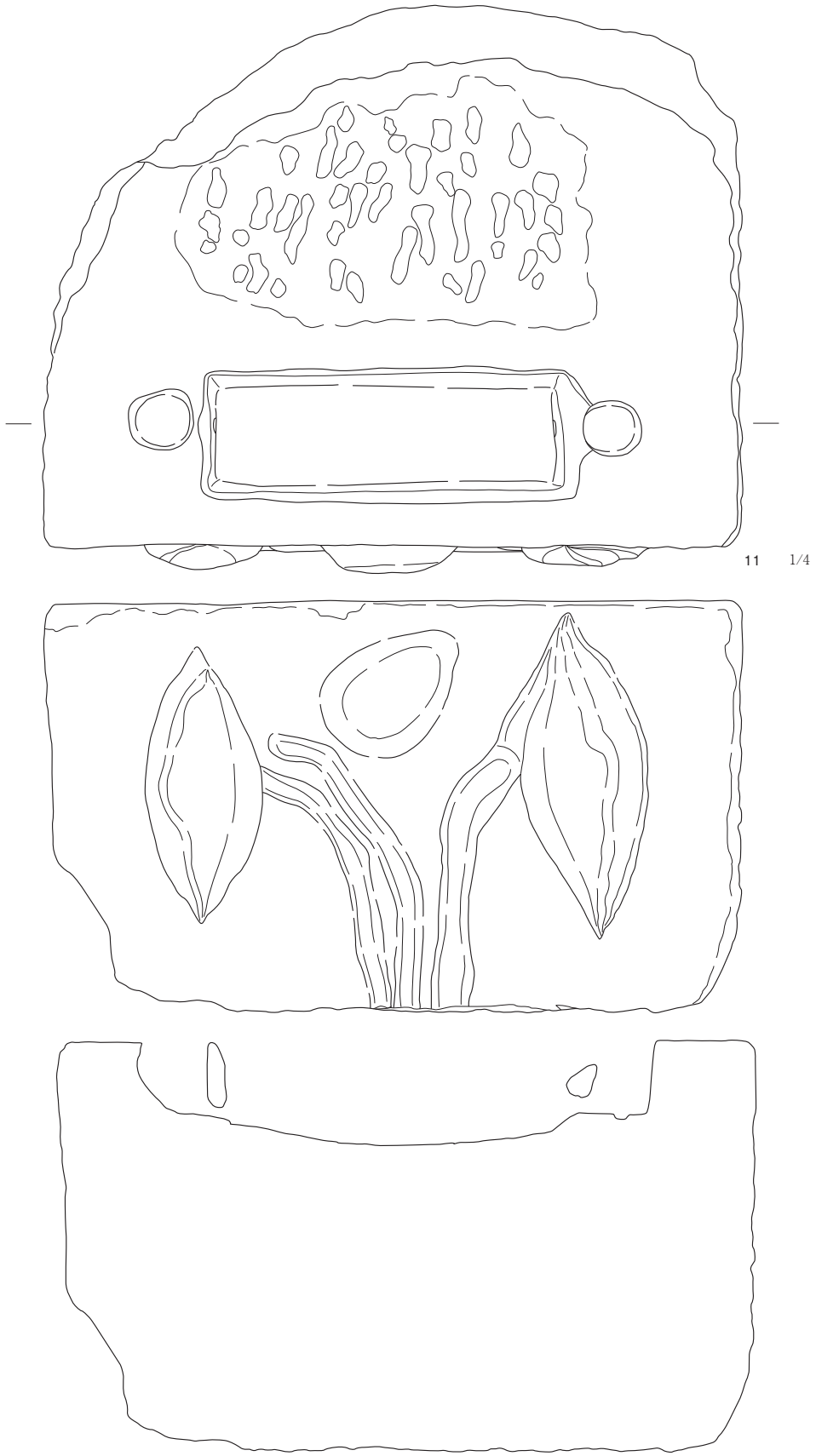
Ⅲ-30図　銭貨(4)

Ⅲ-31図　石製品・石造物(1)

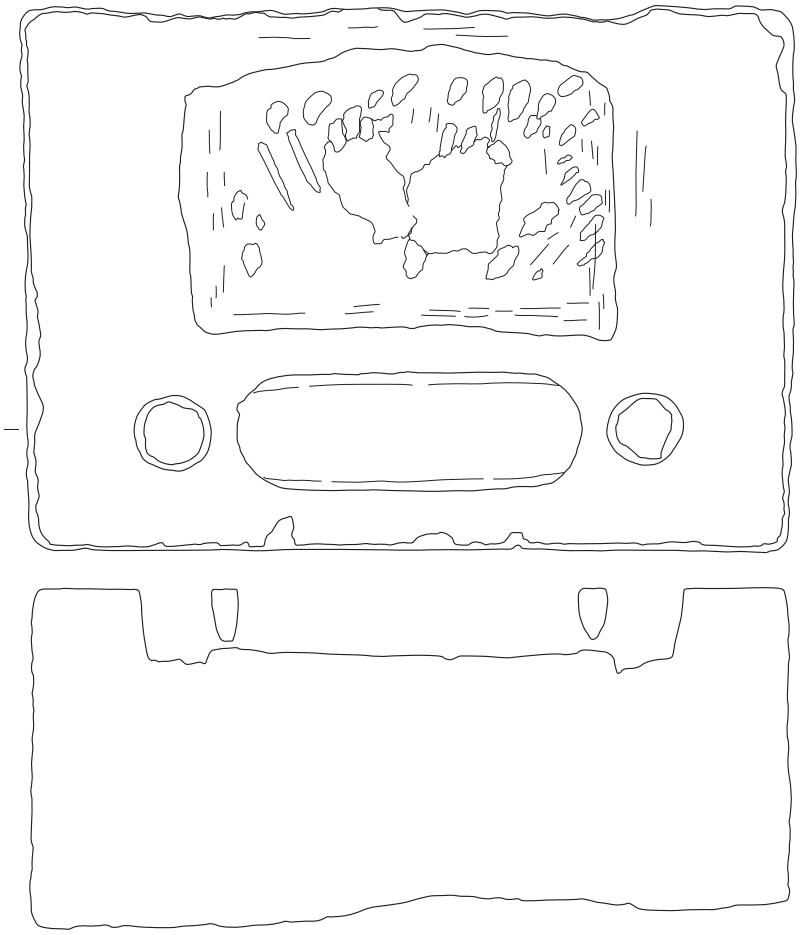
Ⅲ-32図　石造物(2)



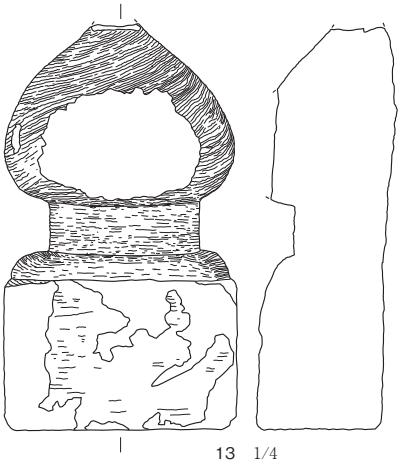
Ⅲ-33図　石造物(3)



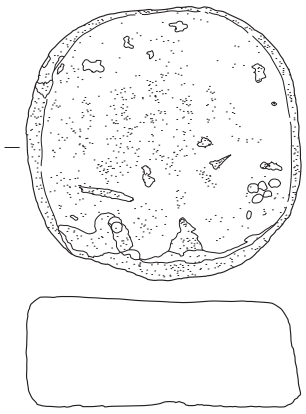
Ⅲ-34図　石造物(4)



12　1/4



13　1/4



14　1/4

Ⅲ-35図　石造物(5)

第Ⅳ章　まとめ

現在、湯島講安寺は東京大学医学部附属病院の東南に位置し、明治時代に寺域を縮小したものの江戸時代から現在まで湯島に本堂を構えている。講安寺には江戸時代の過去帳・縁起・町屋経営等に関する古文書の写しが保存されている（講安寺史料）。講安寺は慶長 11（1606）年 8 月 5 日、湯島寺地を天神下に拝領し、元和 2（1616）年 8 月 22 日、現在の地に移転、2100 坪の寺地を拝領した。天保 11（1840）年以降の『諸宗作事図帳』（Ⅳ－1 図）によれば無縁坂往来の北側に門前町屋がコの字形に配置されコの字の中側が本堂、座敷、庫裏、居間等に、北側が墓所になっている。西側は松平備後守殿（大聖寺藩邸）境、北側は松平出雲守殿（富山藩邸）貸地、東側は稱仰院境となっている。明治 38（1905）年、大正元（1912）年に寺地の一部が段階的に東京帝国大学の敷地となり敷地を縮小した。この間の明治 42 ～ 45（1909 ～ 12）年に墓地の一部が豊島区西巣鴨 4 丁目に移転している。

調査地点は大聖寺藩邸と富山藩邸に囲まれた北西角で調査結果から墓域に該当する。調査地点が重なる寺地の西側は『諸宗作事図帳』によれば無縁坂から富山藩邸境まで奥行き六十間（109m）、そのうち門前町屋の奥行き合計は 17 間 2 尺（31.5m）となり、墓所の奥行きは 77.5m になる。明治 10 年『講安寺境内図』（Ⅳ－2 図）によれば墓地の東側奥行きは南から八間六尺、六間九尺、弐十弐間壱尺、三間四尺。寸法を合計しメートルに換算すると墓地の奥行きは 76m。『諸宗作事図帳』と『講安寺境内図』では『諸宗作事図帳』の方が 1.5m 長い。測量方法、計測位置の違いによると考えられるが、ほぼ同じ距離である。

「東京府武蔵国本郷区本郷元富士町近傍　明治十六年　第一測期第二測図」（Ⅳ－3 図）（『参謀本部陸軍測量局五千分一東京図測量原図』（財団法人日本地図センター発行国土交通省国土地理院所蔵 2011 以下、陸軍参謀本部測量原図）によると、講安寺は『諸宗作事図帳』、『講安寺境内図』同様に町屋、本堂、墓地が描かれる。『講安寺境内図』では北西に興安寺貸地　墓、等正寺墓地貸 2 つの区画が描かれている。陸軍参謀本部測量原図では 2 つの区画に該当する部分が生垣で区画された墓地で表記され、前者は 2 つの長方形区画が並んでいるのに対し、後者は L 字形の区画になっている。陸軍参謀本部測量原図では墓地の西側地境沿いに井戸が描かれている。井戸は間口から北へ約 60m に位置し、『講安寺境内図』の墓地に描かれた井戸とは位置関係から同じ井戸と考えられる。

本調査では C 面、B 面、A 面を確認した。敷地は大聖寺藩邸側より一段低く段切りされている。墓壙群の北端は H 区、南側は L 区の範囲で確認されている。

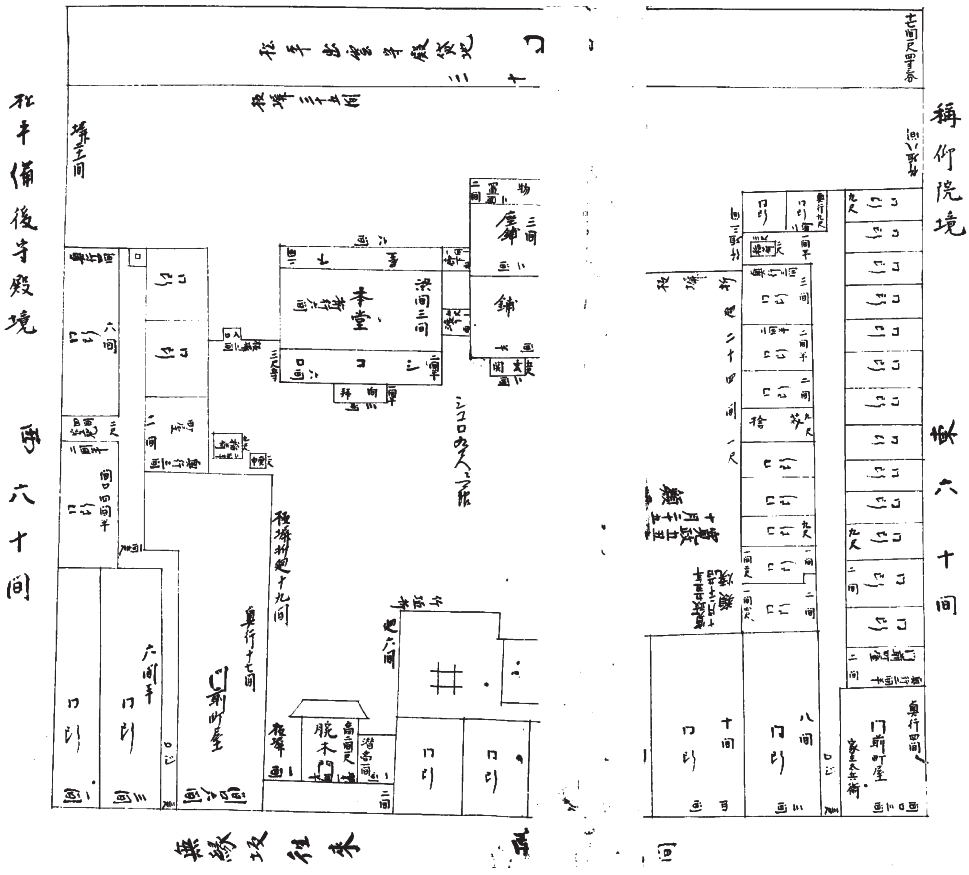
A 面は講安寺の墓域で地境の石垣、井戸、土坑、蔵骨器墓、甕棺墓を検出している。講安寺敷地は明治 38（1905）年から大正元（1912）年に寺地の一部が段階的に東京帝国大学敷地になっていることから、少なくとも大正元（1912）年まで講安寺の敷地として利用されたと考えられる。B 面の墓を改葬し盛土を施し墓域としているが、A 面の盛土が施される前に寺地の土地利用の変化などにより改葬が行われ、墓石、遺体が撤去されたと考えられる。B 面に比べ遺構の密集度は低い。F ～ G・16 ～ 17 グリッドの撹乱を境に、南側に墓壙が分布している。蔵骨器墓 ST1732、ST1733 からは人骨は確認されず改葬されている。甕棺墓 ST1988 は人骨が残っているが、すべてではなく、蓋石は甕棺の口縁から約 25cm 上で確認されたことから、甕棺の蓋としてではなく改葬後に墓壙を埋める過程で廃棄されたと考えられる。SE1734 は地境との位置関係、現在の間口からの距離、『講安寺境内図』、陸軍参謀本部測量原図に描かれている井戸と考えられる。井戸が掘削されたのは江戸時代で大正元

（1912）年、墓域を縮小するまで使用されたと考えられる（Ⅳ－3図）。

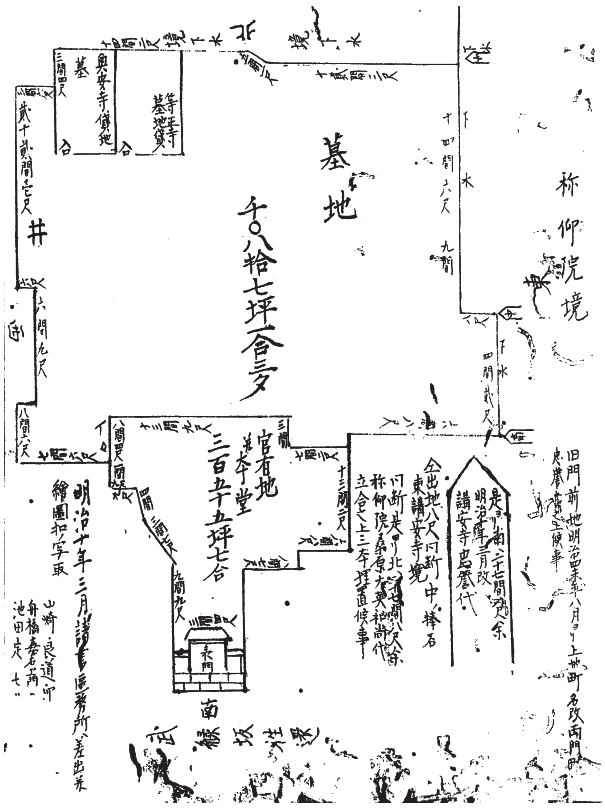
B面は講安寺の墓域で地境の溝と小穴列、土坑、円形木棺墓、方形木棺墓、蔵骨器墓、甕棺墓を検出している。天保年間末（1842～44）頃、講安寺が富山藩へ貸していた土地が返却される。講安寺史料によれば、富山藩が借地した600坪のうち墓地として転貸した3分の1（200坪）以外の400坪の土地利用については史料上で明確ではないとされる。検出した墓域は天保年間末頃まで富山藩が借りていた敷地より南側と考えられる（Ⅳ－5図）。点線より北側、西側の大聖寺藩邸、富山藩邸へ至る道路と興安寺貸地（Ⅳ－2図）の間は富山藩への貸地の一角と考えられ、墓の検出はなく富山藩への貸地が返地後の土地利用に影響したと考えられる。遺構はF～G・16～17グリッドの撹乱を境に南側に分布している。A面と遺構の分布状況は同じで撹乱された部分に敷地内を区画する施設があったと考えられる。人骨から推定される墓の正面と甕棺墓の分布、改葬時の掘削方向から墓域の配置を検討すると、ST2584の人骨は南向き、ST2211は改葬時に北方向から掘削されていることから、甕棺墓が背合わせに並ぶ東西に伸びる帯状の墓域と考えられる。この他、改葬された甕棺墓ST2212、ST3148が分布する。また、蔵骨器墓ST2406、ST2502、ST2503、ST2519もこの範囲に分布している。墓壙のない幅約1mの帯状の範囲を挟んだ甕棺墓ST3531は北向き、その南側のST3310－10の人骨は南向きで、甕棺墓が背合わせに並ぶ東西に伸びる帯状の墓域と考えられる。ST3310－10から南へ墓壙のない幅約1mの帯状の範囲を挟んでST2893が配置される。甕棺墓の分布を検討すると調査範囲には少なくとも東西に伸びる2本の墓道を挟んで3列の帯状区画があったと考えられる（Ⅳ－4図）。

C面からは地境の小穴列、井戸、地下室、土坑、厩等を検出している。講安寺の敷地を富山藩が借地した富山藩借地期の遺構群である。A面、B面の分布がG16～17グリッドより南に集中するのに対して、B～J·16～17グリッドに分布、そのうちB～H·16～17グリッドに集中する。遺構の軸は、真北から東へ5°振れる遺構、真北から8°振れる遺構、真北から－8°振れる遺構、真北の遺構に分かれる。東へ5°振れる遺構には地下室、厩がある。SK3547、SK3549は壁面に柱穴を伴い、厩の建物列から約2m西に位置し南北に並ぶ。厩は基礎SB3544－3～10、便槽SL3313－1～6、8、10、11からなる。便槽の位置から間口は東側と考えられる。厩の東側は調査区外のため全体の規模は不明であるが、基礎と便槽の関係から少なくとも9部屋の存在が確認された。基礎が2基南北に並ぶSB3544－1・2とSB3544－3～10の礎石の配置方法は異なり関連性は明確ではない。遺構軸が真北から東へ8°振れる遺構は礎石列SB3538。真北から東へ－8°振れる遺構はSK3310、SK3715で、SK3715は東大編年Ⅳb期の一括資料である。SK3310は遺物の年代が東大編年Ⅴ期の一括資料である。富山藩借地期のごみをまとめて廃棄した遺構と考えられる。遺構軸がほぼ真北を示す遺構は地境に沿って南北に並ぶ小穴とSK3315、SK3316で、SK3315、SK3316は遺構の木枠が炭化している。遺物は出土していないため年代を明確にすることはできない。寛政5（1793）年、長柄者の小屋（藩士の長屋）から出火したと伝えられているが関連は不明である。切り合い関係から厩はSK3715より新しい。地下室は長柄者の小屋に関連する可能性があるが、切り合い関係は明らかにできなかった。SE3550は上部施設が確認できないため遺構軸は不明である。

本地区の調査ではⅣ－5図の点線で示した北側に該当する富山藩の借地範囲より南側から富山藩邸に帰属すると考えられる遺構を検出している。天保年間末（1842～44）頃に講安寺へ返却された区画以前、厩の建物は点線で示した部分を跨いで検出しており、点線より南側も北側と合わせて富山藩に借地されていた時期があったと考えられる。範囲が変更されたのはSK3310が廃絶された東大編年Ⅴ期以降と考えられる。

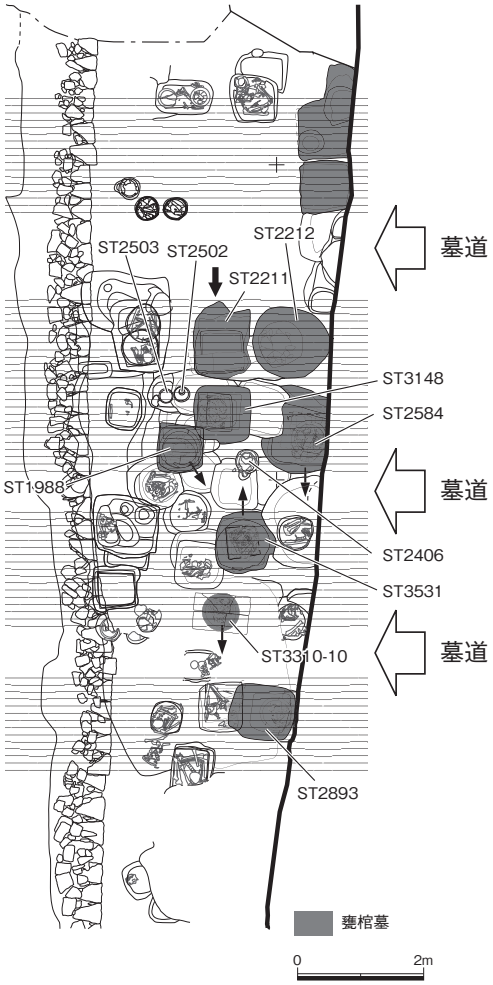


Ⅳ-1図　「諸宗作事図帳」131（国立国会図書館所蔵、天保11年以降）

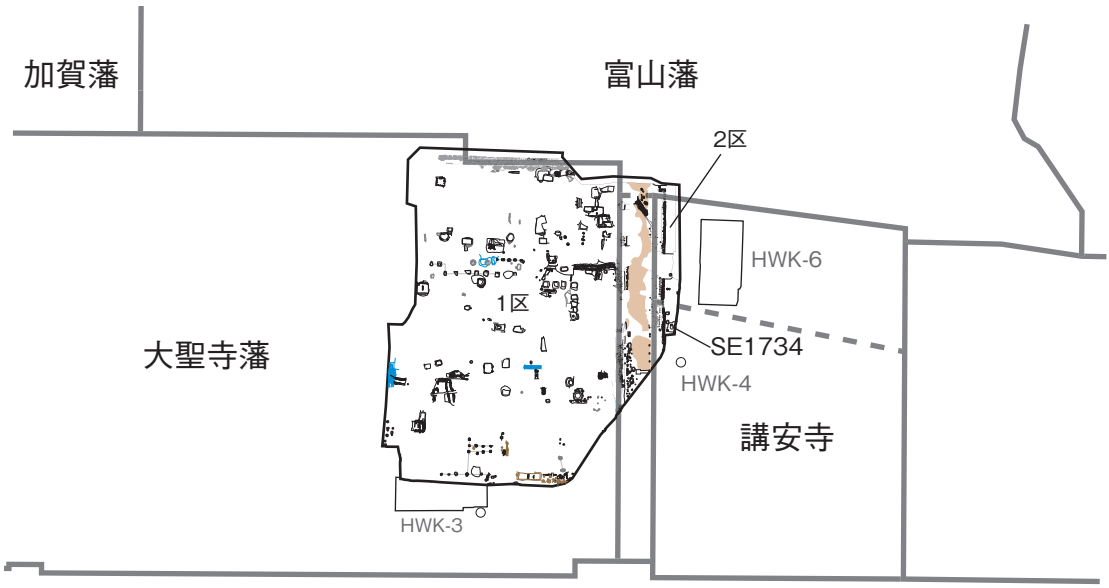


Ⅳ-2図　講安寺境内図（明治10年）

Ⅳ-3図　明治16年測量図と調査地点の位置関係
「東京府武蔵国本郷区本郷元富士町近傍 明治16年第一測期第二原図」
『参謀本部陸軍測量局五千分一東京図測量原図』より作成



Ⅳ-4図　墓域と墓道の復元



Ⅳ-5図　調査区と幕末期屋敷割りの対比
地割りは（公財）前田育徳会尊経閣文庫所蔵
「御上屋敷御地面惣絵図」「御上屋鋪御地面之絵図」をトレース

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院入院棟 A 地点
報告編《第 5 分冊》

2016 年 3 月 25 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 － 6 － 1
http://www.aru.u-tokyo.ac.jp

印　刷　　能登印刷株式会社